

佐賀県文化財調査報告書 第119集

^{ひら} ^{ぼる}
平原遺跡 I

— 本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書 1 —

1993年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書 第119集

^{ひら} ^{ばる}
平原遺跡 I

— 本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書 1 —

1993年3月

佐賀県教育委員会

序

この調査報告書は、佐賀県土木部による本川川防災調節池新設工事に先立ち、佐賀県教育委員会、鳥栖市教育委員会及び基山町教育委員会が協力して平成3年度に実施した、平原遺跡1区発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代から古墳時代の集落が姿を現し、当時の暮らしぶりを彷彿とさせる数々の遺物が出土しました。なかでも、弥生時代中期の遺物のうち、国内14例目となった石製剣把頭飾や我国でも初期段階の青銅器鋳型の発見は、この地域における弥生時代遺跡の重要性を再認識させるものです。

これらの成果が学術文化の向上に幾分とも寄与し、併せて郷土の歴史と文化財について県民の皆様が御理解を深めていただく資料となれば幸いに存じます。

発刊にあたり、酷暑や厳寒の時節を通じ調査作業に従事していただきました地元の皆様をはじめ、関係各位から賜った深い御理解と多大な御協力に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

佐賀県教育委員会
教育長 堤 清 行

例 言

1. 本書は本川川防災調節池事業に伴う埋蔵文化財の事前調査のうち、平成3年度に発掘調査を行った鳥栖市柚比町所在の平原遺跡1区の調査報告書である。
2. 発掘調査は、佐賀県土木部の依頼を受けて、佐賀県教育委員会が主体となり、鳥栖市教育委員会及び基山町教育委員会と合同で実施した。
3. 発掘調査にあたっては、地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所、佐賀県開発局新都市対策課、佐賀県土木部河川砂防課・鳥栖土木事務所、北部丘陵新都市開発事務所、鳥栖市建設部北部丘陵対策課、基山町企画課、並びに地元各位の協力を得た。
4. 本書の執筆は下記の分担で行い、編集は湯浅 満暢の協力の元に徳永 貞紹が担当した。

第1章・第2章・第4章：徳永 貞紹

第3章：徳永 貞紹・湯浅 満暢

5. 発掘調査及び報告書作成作業は下記の分担で行った。

発掘作業：天本 勲・飯田 学・緒方 アキエ・鬼塚 義和・熊田 シヅ子・熊田 駿

黒田 キクノ・後藤 チドリ・佐々木 ツゲノ・佐藤 サチ子・佐藤 千代子

佐藤 ミチ子・田熊 スマヨ・高原 唯則・寺崎 イツ子・寺崎 和枝・時 シマ子

中島 康幸・野下 八重子・久光 新・平田 シゲ子・平山 逸子・福山 ハツ子

藤田 トモエ・藤田 正一・松隈 キミ・松隈 紀子・松本 隆・村山 作次

門司 功・山下 正義・山本 セツ子・吉戸 タツエ・渡辺 トキ子

遺構実測：天本 和子・石橋 和子・佐田谷 昌子・佐藤 ヨシエ・渋谷 信子・高田 加代子

高嶋 カホル・寺崎 和枝・時 シマ子・徳永 貞紹・永渕 笑美子・花田 京子

久山 高史・藤田 暁子・松野 富子・湯浅 満暢・横枕 栄子

(埋蔵文化財サポートシステム)

遺構写真撮影：徳永 貞紹・湯浅 満暢

遺跡空中写真撮影：(空中写真企画)

遺物整理：佐田谷 昌子・佐藤 ヨシエ・渋谷 信子・高田 加代子・高嶋 カホル

遺物実測：江副 朋子・上瀧 光子・鶴田 啓子・徳永 貞紹・兵動 律子・光石 逸子

村里 育子

整図：天本 和子・徳永 貞紹・兵動 律子・御厨 瑞枝・三好 文子・光石 逸子・湯浅 満暢

遺物写真撮影：湯浅 満暢

写真現像焼付：江島 紀子・黒木 優子・古賀 栄子

6. 測定値の表示に用いた単位は遺構がm、遺物がcmである。
7. 方位は国土座標第Ⅱ系の座標北で、磁北はこれより西偏約6°10'である。
8. 遺物実測図のうち、須恵器は断面塗り潰しで表現した。

本文目次

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経過…………… 1
2. 調査組織…………… 2
3. 調査の経過と方法…………… 3

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境…………… 5
2. 歴史的環境…………… 7

第3章 調査の内容

1. 平原遺跡1区の概要……………14
2. 弥生時代の遺構と遺物……………19
 - (1) 竪穴建物……………19
 - (2) 土坑……………59
 - (3) 溝……………74
 - (4) 小穴の出土遺物……………75
3. 古墳時代の遺構と遺物……………76
 - (1) 竪穴建物……………76

第4章 総括

1. まとめ……………82
2. 弥生時代中期初頭から前葉の集落……………82
3. 弥生時代後期後半から終末の集落……………84

挿 図 目 次

図1 平原遺跡の位置	6	図2 周辺の主要遺跡	8
図3 遺跡周辺の地形	13	図4 平原遺跡1区の位置	15~16
図5 1区の遺構配置	17~18	図6 SH101,出土遺物	19
図7 SH102,出土遺物	20	図8 SH102出土鉄器	21
図9 SH113	22	図10 SH114,出土遺物	23
図11 SH115	24	図12 SH121,出土遺物	25
図13 SH123	26	図14 SH123出土遺物	27
図15 SH124	28	図16 SH124出土遺物1	29
図17 SH124出土遺物2	30	図18 SH127	31
図19 SH127出土遺物	32	図20 SH128	33
図21 SH128出土遺物1	34	図22 SH128出土遺物2	35
図23 SH131,出土遺物	36	図24 SH132	37
図25 SH132出土遺物1	38	図26 SH132出土遺物2	39
図27 SH133,出土遺物	40	図28 SH134	41
図29 SH135,出土遺物	42	図30 SH136,出土遺物	43
図31 SH137,出土遺物	44	図32 SH138,出土遺物	45
図33 SH141,出土遺物	46	図34 SH142	47
図35 SH154,出土遺物	48	図36 SH157	49
図37 SH158,出土遺物	49	図38 SH161,出土遺物	50
図39 SH162,出土遺物	51	図40 SH164,出土遺物	52
図41 SH165,出土遺物	53	図42 SH169	54
図43 SH171	55	図44 SH171出土遺物1	56
図45 SH171出土遺物2	57	図46 SK103,把頭飾出土状況,把頭飾,出土土器	58
図47 SK104,出土遺物	59	図48 SK105,出土遺物	60
図49 SK107,出土遺物	61	図50 SK116,出土遺物1	62
図51 SK116出土遺物2	63	図52 SK118,出土遺物	64
図53 SK119,出土遺物1	65	図54 SK119出土遺物2	66
図55 SK126,出土遺物	67	図56 SK129,出土遺物	68
図57 SK130,出土遺物	69	図58 SK140,出土遺物	70
図59 SK143,出土遺物	71	図60 SK151,出土遺物	71

図61 SK152,出土遺物	72	図62 SK156,出土遺物	72
図63 SK159,出土遺物	73	図64 SD144	74
図65 SD172	74	図66 小穴の出土遺物	75
図67 SH120,出土遺物	77		

表 目 次

表1 1区出土遺物一覧	78
表2 日本出土の石製剣把頭飾	83

写真図版目次

写真図版1	鳥栖市北部から基山町主要部		
写真図版2	平原遺跡1区全景		
写真図版3	1区北中央部 (南上空から)	1区北東部 (南上空から)	
	1区北西部 (南上空から)	1区南東部 (南上空から)	
写真図版4	SH101 (西から)	SH102 (西から)	SH114 (南東から)
	SH114・SH115 (東上空から)		SH121 (東から)
	SH123 (南東から)	SH124 (東上空から)	SH127 (北から)
写真図版5	SH128 (西から)	SH128南東部遺物出土状況	
	SH131 (東から)	SH132 (南東から)	SH133 (西上空から)
	SH135 (東から)	SH136 (西から)	SH137 (東上空から)
写真図版6	SH138 (東から)	SH165 (西から)	SH171 (北上空から)
	SH120 (南上空から)	SK103石製剣把頭飾出土状況	
	SK104 (西から)	SK116 (西から)	SK119 (南から)
写真図版7	SH171出土遺物		
写真図版8	SK103・SK104出土遺物	1区出土石器	
写真図版9	SH128出土土器		
写真図版10	SH124出土土器	SH102出土鉄器	SH120出土土器

報告書抄録

ふりがな	ひらばるいせき							
書名	平原遺跡 I							
副書名	本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	徳永 貞紹、湯浅 満暢							
編集機関	佐賀県教育委員会							
所在地	〒840 佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号 PHONE:0952-25-7232							
発行年月日	西暦 1993年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらばる 平原1区	きがけんとすし 佐賀県鳥栖市 ゆびまちあざひらばる 柚比町字平原	412031	—	33度 23分 56秒	130度 31分 28秒	19910626~ 19920128	3,000	河川(本川 川防災調 節池建設 に伴う事 前調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平原1区	集落跡	弥生 古墳	堅穴建物29棟 土坑39基 溝2条 堅穴建物1棟	弥生土器 石器 鉄鎌 須恵器、土師器		弥生中期初頭~前 葉の青銅器鋳型片 石製剣把頭飾		

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経過

鳥栖市の北部にあって三養基郡基山町大字園部と接する柚比町・今町一帯は、東を国道3号線とJR鹿兒島本線に、西を九千部山系の山麓部に、南を長崎自動車道によって画され、杓子ヶ峰から派生する段丘群の間に比高差10~30mの狭長な小谷がハツ手状に入り込んだ複雑な景観を見せる地域である。段丘上には柚比遺跡群と総称される弥生~古墳時代の遺跡が展開する一方、基幹交通網が縦横に走ることからも解るように、福岡都市圏の近郊では有数の至便の地であり、大規模な開発適地として注目を集めていた。

鳥栖市教育委員会は、将来予想される開発に先立ち、文化財の保存と活用に積極的に対応するための基礎作業として、国庫・県費補助を得て文化財確認調査を昭和52(1977)年度から10年計画で開始した。第3年次にあたる昭和54(1979)年度の安永田遺跡の確認調査で九州初の銅鐸鑄型が出土し衆目を驚かせたが、続く昭和55~56年度の調査でも新たな銅鐸鑄型や銅矛鑄型などが出土し、青銅器生産を行った集落であることが明らかになった。この調査成果によって、安永田遺跡は昭和57(1982)年度に国史跡に指定され、柚比地区の文化財確認調査は当初の目的の一つをここに達した。

ところが、奇しくも同じ昭和57(1982)年度に久留米・鳥栖テクノポリス基本構想が示され、佐賀県側の中核的事業として柚比地区を中心とした鳥栖北部丘陵開発が計画された。この開発計画を受けて、佐賀県教育委員会・鳥栖市教育委員会・基山町教育委員会は、鳥栖市教育委員会が行ってきた確認調査の早期終了を図るため3者で協力することにし、昭和59(1984)年度までに水田部と宅地などを除いた部分の埋蔵文化財の概要を把握することができた。この間、昭和58(1983)年に高度技術工業集積地域開発促進法(テクノポリス法)が成立し、翌昭和59(1984)年には開発計画が承認され、鳥栖北部丘陵新都市開発整備事業が動き始めた。

佐賀県教育委員会・鳥栖市教育委員会・基山町教育委員会は、確認調査の結果を基に文化財保護の基本方針を協議し、地区内で確認された遺跡のうち、柚比遺跡群を代表する重要遺跡としてハツ並・金丸遺跡及び柚比梅坂遺跡の主要部分約10haを保存地区、それ以外を発掘調査による記録保存地区として対応することとし、開発部局との協議を重ねて保存地区の取り扱いについて合意した。

昭和61(1986)年にそれまでの用地全買方式から土地区画整理事業方式導入への転換がなされたことにより、本事業の推進が加速しだした。鳥栖北部丘陵新都市開発整備事業に伴う文化財調査は、大規模でかつ鳥栖市と基山町の両市町に跨ることから、佐賀県教育委員会を調査主体とし、鳥栖市教育委員会と基山町教育委員会との合同で調査体制を組むことで協議が進められ、1班2名から成る3班を専従とし、この6名に全体の調整を担当する1名を加えて、佐

賀県3名、鳥栖市3名、基山町1名の7名体制で臨むことになった。

平原遺跡^{ひらばら}1・2区調査の原因となった本川川^{ほんごう}防災調節池新設工事は、鳥栖北部丘陵新都市開発整備事業鳥栖工区の治水・防災を目的とする関連事業で、佐賀県土木部の所管により計画が進められていたが、平成2年度に入り事業の見通しがついた段階で、埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を始めた。鳥栖工区全体の基本設計が確定していない状態ではあったが、幹線道路等の主要部分は概ね決定されており、防災調節池についても工事工程の関係上、計画の変更は困難であることから、地区内の埋蔵文化財については発掘調査による記録保存で対応することで協議を進めた。

防災調節池が予定された約7.2haの内、西北角の段丘上約3,000㎡については昭和53（1978）年度の鳥栖市教育委員会による試掘調査で、弥生～古墳時代の集落遺跡が確認されていたが（鳥栖市教育委員会 1982 「平原遺跡・平原古墳」鳥栖市文化財調査報告書第11集）、これを除く低地の水田部は埋蔵文化財の有無が不明であった。このため平成2（1990）年11月に佐賀県教育委員会が鳥栖市教育委員会の協力を得て、水田部の試掘調査を実施した。その結果、縄紋時代から近世の遺物が出土し、当初予想されなかった縄紋時代の遺構も確認され、遺構の検出された地点を中心に平原遺跡の拡大として周知化した。これに基づき約17,000㎡が新たに調査の必要な面積となった。実際の調査工程としては、基山工区（黒谷古墳群^{くろたに}・水呑古墳群^{みづのみ}・浦田遺跡^{うらた}）の本調査が1班、鳥栖工区の試掘調査が1班、本川川防災調節池工区（平原遺跡）の本調査が1班の体制で、平成3（1991）年6月末から現地作業に入ることになった。

2. 調査組織

調査主体	佐賀県教育委員会	
調査協力	鳥栖市教育委員会・基山町教育委員会	
総括	堤 清行 ^{つづみ きよゆき}	佐賀県教育長
事務局		
局長	高島 忠平 ^{たかしま ちゅうへい}	佐賀県文化財課長
次長	中牟田 賢治 ^{なかむた けんじ}	佐賀県文化財課長補佐
	西村 貞幸 ^{にしむら さいゆき}	佐賀県文化財課長補佐（平成3年度）
	瀬戸 明廣 ^{せと あきひろ}	佐賀県文化財課長補佐（平成4年度）
庶務会計	永松 和久 ^{ながまつ かずひさ}	佐賀県文化課庶務企画係長
	濱野 清子 ^{はまの きよこ}	佐賀県文化課庶務企画係主査
	小林 宣洋 ^{こばやし のぶひろ}	佐賀県文化課庶務企画係主査
	松瀬 弘 ^{まつせ ひろし}	佐賀県文化課庶務企画係主事（平成3年度）
	池田 学 ^{いけだ まなぶ}	佐賀県文化課庶務企画係主事（平成4年度）

たけつぎ たみこ 武次 多美子 佐賀県文化課庶務企画係嘱託（平成3年度）
ましかわ ひきこ 岸川 向祥子 佐賀県文化課庶務企画係嘱託（平成4年度）

調査員

調査主任 高瀬 哲郎 佐賀県文化財課調査係長
調査員 樋口 秀信 佐賀県文化財課調査係文化財保護主事
徳永 貞紹 佐賀県文化財課調査係文化財保護主事
(本川川防災調節池工区担当)
渋谷 格 佐賀県文化財課調査係文化財保護主事（平成4年度）
森本 陽二郎 佐賀県文化財課調査係嘱託（平成3年度）
鹿田 昌宏 鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員
湯浅 満暢 鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員
(本川川防災調節池工区担当)
久山 高史 鳥栖市教育委員会社会教育課事務吏員
飛松 広美 基山町教育委員会教育課文化財保護主事

協力 地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所 佐賀県開発局新都市対策課
佐賀県土木部河川砂防課・鳥栖土木事務所 鳥栖北部丘陵新都市開発事務所
鳥栖市建設部北部丘陵対策課 基山町企画課 地元各位

この他、出土石器の一部については唐木田芳文先生（西南学院大学）に鑑定していただき、また村上恭通氏（名古屋大学）には出土鉄器の応急処置についてご教示をいただいた。

3. 調査の経過と方法

平原遺跡の本川川防災調節池新設工事に伴う調査区は、段丘上の田畑地部を1区（約3,000㎡）、段丘下の水田部を2区（17,000㎡）として、調査を進めることにした。1区は鳥栖市教育委員会試掘調査時の31-1区にあたり、第1～3試掘坑の3箇所が調査された地点で、このうち第1・第2試掘坑が範囲内に含まれていた。調査区の現況は、試掘調査時にはほとんど畑地であったものが、その後耕作されずに荒地地となっており、雑木や竹が生い茂っている状態であった。伐採後、平成3（1991）年6月26日に掘削機による表土除去から作業を開始した。折から7～8月の暑い時期が調査の序段となり心配されたが、前年の猛暑とは違ってかわった冷夏であったため、立て続けに来襲した台風9号・17号・19号の予期せぬ障害もあったものの、比較的順調に作業を進めることができ、平成4（1992）年1月28日をもって現場での作業を終了した。諸記録類や出土遺物の整理は現場での作業と並行しながら進め、本格的な報告書作成作業は2区と併せて平成4（1992）年度に行った。

遺跡名は、佐賀県遺跡地図による「平原遺跡」として、略号HRBで佐賀県教育委員会の台

帳に登録し、調査区の呼称は算用数字を用いた。したがって1区の場合であれば、調査・整理の際の記録類は「HRB-1」で表示されている。

調査区画については国土座標第II系を基準とし、 $X=44,000\text{m}$ 、 $Y=-44,000\text{m}$ の交点を原点として $10\times 10\text{m}$ を1柵とする方眼区割を設定し、1km四方を同一の方眼区割で覆うことにした。南北列を南からアルファベット2文字の組み合わせで、AA, AB, AC, AD, ……………, CK, CL, の100列、東西列を東から数字2桁で、00, 01, 02, 03, ……………, 98, 99, の100列とし、各々の区画は南北列名称の後に東西列の名称を付けて「BE07区画」の要領で示した。

遺構番号は3桁の一連番号とし、百の位に1区を意味する1を付け、101から始めた。この番号の頭に遺構の性格を示すアルファベット2文字の分類記号を付けて表示した。遺構の分類記号は、佐賀県内に限っても必ずしも統一されているわけではないが、地域的に調査例の多い遺構の種類（弥生時代土器棺墓など）や調査時の手順などを勘案して、SA：柵列・堀、SB：掘立柱建物・礎石建物、SC：石棺墓・石蓋土坑墓、SD：溝・堀・流路、SE：井戸、SF：道・道路、SG：園池、SH：竪穴建物、SJ：土器棺墓、SK：土坑、SP：土坑墓・木棺墓、ST：古墳・墳丘墓、SX：その他、の分類を用いる。小穴については遺物の出土したものについて調査区毎に一連番号を付け、Pの記号を用いて「P-1」の要領で、また竪穴住居の柱穴等については、遺構毎にアルファベットで「P-A」の要領で表示する。

表土除去後、遺構の平面形を検出し、竪穴建物と予想される大型の遺構は4分割の基準を設定し、幅50cm程の土層観察用試掘坑を確実に底面と思われる部分まで掘り下げた後、堆積や遺物の出土状況を観察しながら面的に掘り下げた。実測は竪穴建物や特に必要と思われる土坑などについては、個別に1/20の実測図を作成し、それ以外については調査区全域を覆う形で1/20の平面図作成を委託した。調査の進行に従って土層図や遺物出土状況図の作成、写真撮影を実施した。遺構写真については白黒4×5、白黒・カラーリバーサル35mm/mを使用し、全体写真については気球による撮影を委託した。

出土遺物は各遺構の状況に応じて、例えば竪穴建物の場合であれば埋土中と床面の遺物を区別し、4分割した掘り下げの単位毎に取り上げた。床面でまとまって土器が検出されたものについては出土状況図を作成したが、SH128の南東部を除きいずれも廃棄状態の遺物であると判断されたため、報告書での図示は割愛した。水洗と乾燥の後、土器については遺存状態が非常に悪いことから含浸強化剤（バインダー-17）による処理を施して、接合を行った。

出土遺物と遺構実測図や写真などの調査記録及び遺物実測図や遺物写真などの資料は、佐賀県教育委員会で保管しており、各々登録番号を付けて検索が可能ないように整理している。

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

平原遺跡は、佐賀県鳥栖市柚比町字平原・大久保、今町字岸田に所在する。今回調査を行った1区的地籍は、柚比町字平原31-1である。

遺跡の所在する鳥栖市は佐賀県のほぼ東端部にあたり、東北は三養基郡基山町と、西は三養基郡中原町・北茂安町と、北は脊振山地の分水嶺を境として福岡県筑紫郡那珂川町と、東は福岡県小郡市と、南は筑後川を境として福岡県久留米市と、各々接している。

仮に市庁舎を中心とすると東経130°30'30"、北緯33°22'30"に位置し、市域は東西8.2km、南北9.0km、面積71.73km²で、平成2年度の国勢調査によれば、人口55,877人、世帯数16,183戸の地方中核都市である。気候は1991年の観測で、平均気温16.0℃、最高気温34.2℃、最低気温-3℃、年間降水量2,390.2mmと温暖湿潤である。

鳥栖市の地勢は、北西に脊振山地の東端である九千部山系を背負い、南の沖積平野に向かって開ける格好で、この平野部は筑紫平野の奥部にあたると同時に、朝倉平野の西縁部を占める。福岡平野へは基山町から福岡県筑紫野市方面一帯の地峡を経て連絡するのに対し、狭義の佐賀平野とは脊振山地より派生した丘陵地によって遮られ、独自の風土を醸し出している。

地形は、脊振山地の九千部山(847.5m)を主峰として、東南ないしは南方向に支嶺が伸び、次第に高さを減じながら枝分かれする段丘、ついで平坦部となって筑紫平野の一角を成す沖積地へと至る。支嶺は大きくは2方向があり、一方は権現山から南東に下り、杓子ヶ峰で一旦東に折れて平原遺跡の所在する柚比町・今町の段丘に達している。もう一方は九千部山の西南から南に下り、石谷山から笛吹山を経て北茂安町千栗辺りを末端とする段丘に続いており、それぞれ市域の東西両側を画する性格を有している。更にこれらの間にあって九千部山の南から始まる支嶺は、城山から南東に下り、群石山で収束する。

河川はこれらの支嶺に源を発し、山麓に扇状地を形成して段丘を開析した後、平野部を南流する。いずれも筑後川水系で、主要なものは東から秋光川、山下川、大木川、安良川、沼川である。本川川は、杓子ヶ峰の東麓から柚比町の段丘群を縫うように東流した後、赤坂付近で方向を変え、田代本町の載る中位段丘の東端に沿って南流して山下川に合流する。かつては流域の集落名に因んで赤坂川とも平原川とも呼ばれ、また上流部を柚批川、下流部を八幡川とも云ったようである。明治15~16年頃に作成された『長崎県肥前国基肄郡村誌』姫方村の項には「深処五尺、浅処貳尺。潤四間乃至八間、其流急ニ其實澄シ。村ノ北境永吉村字本河ヨリ出ツ。因テ本河川ト称ス。」とあり、本川川の由来を知ることができる。『肥前国風土記』基肄郡姫社郷の件には「此郷之中有川、名曰山道川。其源出郡北山、南流而會御井大川。」とあり、郡の北部山中に源を発して南流し、御井大川すなわち筑後川に注ぐという「山道川」は現在の山下川と

推定され、その支流である本川川も古くから重要な河川と見做されていたものと思われる。

表層地質は、花崗岩類を主体とし、朝日山一帯にのみ三郡変成岩に属する結晶片岩が認められる。土壌は、山地の花崗岩類母材褐色森林土壌、段丘の花崗岩類母材黄色土壌、扇状地と沖積低地の灰色低地土壌、の3つに大きく区分できる。高位・中位段丘では鳥栖ロームと呼ばれる阿蘇4火砕流堆積物が覆っているが、柚比地区の段丘群では認められない。

植生は、九千部山頂近くに夏緑広葉樹林帯に属するブナ林が自然植生として見られるものの、これ以下の標高では照葉樹林（暖温帯常緑広葉樹林）が潜在自然植生と考えられ、平原遺跡2区での花粉化石分析の結果から、遺跡周辺においては縄紋時代晩期～古墳時代の古植生も照葉樹林であったことが想定されている。



図1 平原遺跡の位置(1:800,000)

動物相は、大型獣ではキツネ、タヌキ、アナグマ、イノシシ、ニホンザルの5種が確認されており、脊振山系の他地域ではこれにニホンジカが加わる。平原遺跡1区の発掘調査中にも群れから離れたニホンザルと遭遇したことがあった。また鳥類では、1984年の石谷山における調査でコサギ、マガモ、トビ、コジュケイ、ヤマドリ、キジ等43種が確認されている。

2. 歴史的環境

旧石器(岩宿)時代では、本川原遺跡¹⁾・本行遺跡²⁾・牛原前田遺跡³⁾等でナイフ形石器や角錐状石器といった示標遺物が確認されているが、遺構や遺物包含層の調査例は今のところない。

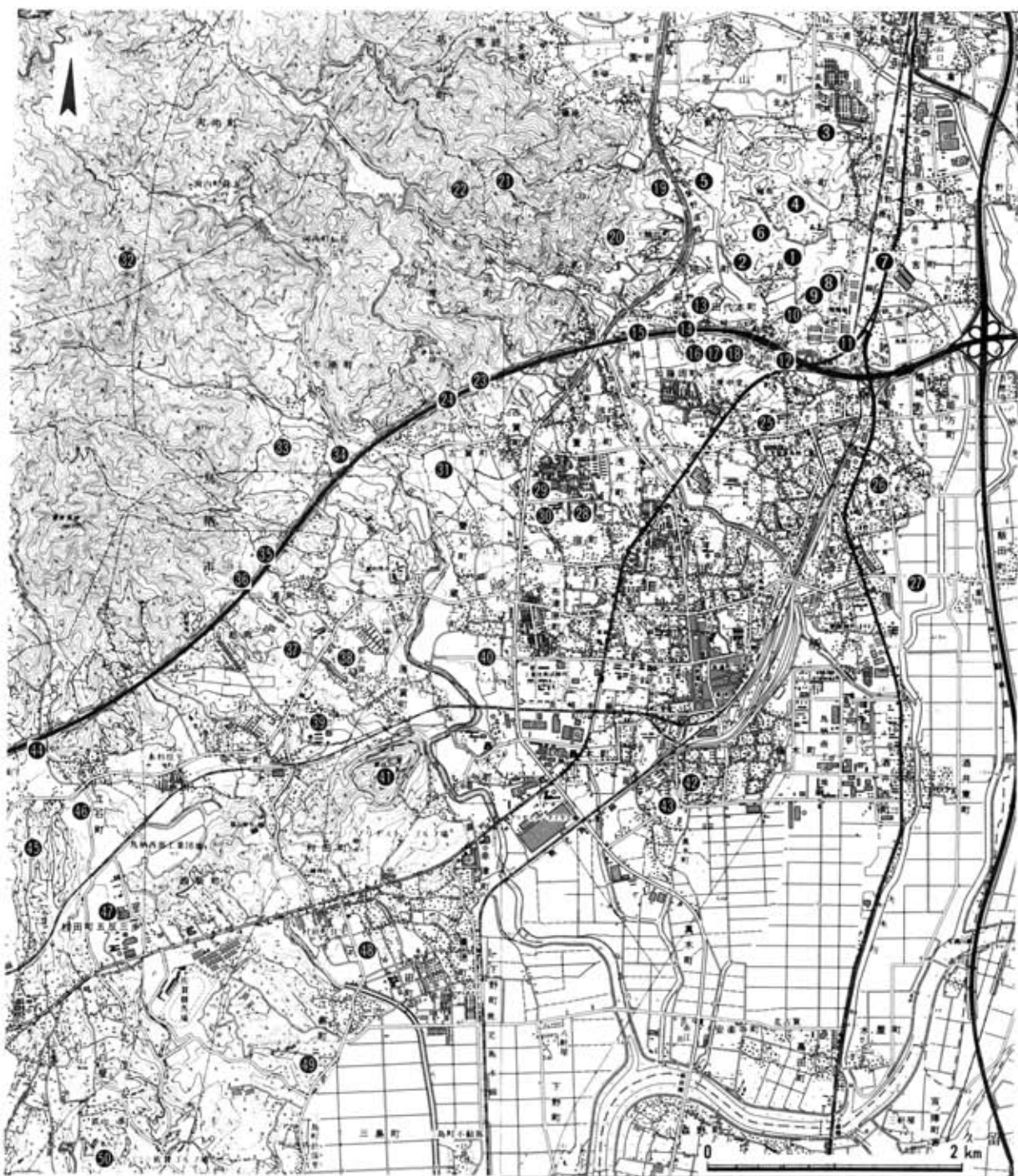
縄紋時代では、草創期を除き少ないながらも早期から晩期までの資料が認められる。この時代の様相については『平原遺跡II』でやや詳しく述べることにし、主要なものに限って触れておくと、前期と後期の遺物は散在的に見られるのみであるが、早期では西田遺跡⁴⁾で押型紋期の集石炉多数が、中期では平原遺跡2区⁵⁾で並木式期の集石炉多数が、晩期では本川原遺跡⁶⁾で黒川式期の袋状土坑2基が、安永田遺跡⁷⁾で前半頃の土器棺墓1基が検出されている。

縄紋時代晩期後半あるいは弥生時代早期とされる時期の遺跡は、村田三本松遺跡⁸⁾で山の寺式~夜白式の土器棺墓群が調査され、永吉遺跡⁹⁾では完形の有柄磨製石剣が夜白式の壺と共に出土し、土坑墓の副葬品である可能性が示されている。

この時期から弥生時代前期前半にかけての集落は実態が不明であるが、前期後半になると北東部の柚比地区の一群と、南西部の朝日山南麓から北茂安町千栗に至る丘陵地に展開する一群との二つの遺跡群が形成される。いずれの地域も段丘と小谷とが複雑に入り組んだ地形であり、初期の水稻農耕集落の立地条件に適ったものであることが従来から指摘されている。

北東部の柚比遺跡群では、八ツ並遺跡¹⁰⁾・今町岸田遺跡¹¹⁾・長ノ原遺跡¹²⁾が集落として早く成立しており、八ツ並遺跡と長ノ原遺跡は後期まで続く拠点集落である。中期初頭には平原遺跡¹³⁾・安永田遺跡¹⁴⁾、中期中葉には前田遺跡¹⁵⁾等の集落が新たに加わる。墓地は柚比梅坂遺跡¹⁶⁾・安永田遺跡¹⁷⁾・大久保遺跡¹⁷⁾・フケ遺跡¹⁸⁾等の集団墓地が形成されている。中期後半段階には安永田遺跡¹⁹⁾で鉄剣や細形銅戈を副葬する土器棺墓が、八ツ並遺跡に隣接する基山町久保田遺跡²⁰⁾で鉄剣や鉄戈を副葬する土器棺墓が検出されている。また平原遺跡3区²¹⁾で細形銅戈の鋳型が、平原遺跡1区では中期初頭の竪穴建物から青銅器鋳型の小破片が出土し、初期の青銅器生産が明らかになりつつある。更に中期後半から後期初頭には安永田遺跡において銅鐸や銅矛の生産が行われている。

一方、南西部の遺跡群は調査例が少ないため実態の不明瞭な部分が多いが、村田三本松遺跡では前期末~中期後半の土器棺墓群が検出されており、早い時期に集落の成立をみていたことが解る。現在調査中の本行遺跡は中期から後期の拠点集落で、10数点の青銅器鋳型の出土は柚比遺跡群の安永田遺跡に匹敵する集中的な青銅器生産を示す。ここでは細形銅矛・中細形銅



- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-----------|-----------|
| ①：平原遺跡 | ⑪：本川原遺跡 | ⑳：杓子ヶ峰古墳群 | ㉑：牛原前田遺跡 | ㉒：蜂推定地 |
| ②：大久保遺跡 | ⑫：田代天満宮東方遺跡 | ㉒：東十郎古墳群 | ㉒：勝尾城跡 | ㉓：今泉遺跡 |
| ③：八ツ並・金丸遺跡 | ⑬：安永田遺跡 | ㉓：都谷(群石)古墳群 | ㉓：葛籠城跡 | ㉔：真木宮の前遺跡 |
| ④：今町岸田遺跡 | ⑭：荻野遺跡 | ㉔：宮西古墳群 | ㉔：山浦新町遺跡 | ㉕：山田遺跡 |
| ⑤：柚比梅坂遺跡 | ⑮：日岸田遺跡 | ㉕：田代代官所跡 | ㉕：山浦西北方遺跡 | ㉖：笛吹山遺跡 |
| ⑥：梅坂炭化米遺跡 | ⑯：庚申堂塚古墳 | ㉖：本原遺跡 | ㉖：西田遺跡 | ㉗：惣楽遺跡 |
| ⑦：長ノ原遺跡 | ⑰：田代太田古墳 | ㉗：浦田遺跡 | ㉗：四の坪遺跡 | ㉘：柳の元遺跡 |
| ⑧：赤坂古墳 | ⑱：岡寺古墳 | ㉘：古賀遺跡 | ㉘：山浦古墳群 | ㉙：村田三本松遺跡 |
| ⑨：剣塚古墳 | ⑲：永田古墳群 | ㉙：元古賀遺跡 | ㉙：薄尾古墳群 | ㉚：本行遺跡 |
| ⑩：フケ遺跡 | ㉚：神山古墳群 | ㉚：稲塚古墳 | ㉚：桑ノ木添遺跡 | ㉛：検見谷遺跡 |

図2 周辺の主要遺跡 (1:50,000)

矛・細形銅劍・中細形銅劍・銅鐸・不明青銅器と多様な製品が生産されており、本遺跡や北茂安町^{けんみだに}検見谷遺跡²²⁾の中広形銅矛埋納遺構や、周辺からの出土と推測される広形銅戈の鋳型²³⁾から、中期から後期に至るまで青銅器の生産が継続した地域であることが推測される。

弥生時代後期になると、この二つの遺跡群を核としつつも^{ほんばる}本原遺跡²⁴⁾や牛原前田遺跡等に見られるように、前代まで土地利用の痕跡が比較的少なかった鳥栖市街地を含む扇状地や低位段丘の先端部にも集落の形成が活発に行われ始める。これらは古墳時代前期まで継続して営まれるようで、柚比遺跡群や本行遺跡などの中期から続いた集落が古墳時代に至らずに衰退することと対比して、興味深い傾向と言える。

古墳時代前期～中期の様相は、集落域・墓域の双方において不明瞭な部分が多い。出現期の前方後方墳である^{あかさか}赤坂古墳²⁵⁾や^{ひがんだ}本川原遺跡²⁶⁾・^{ひがんだ}日岸田遺跡¹⁾の低墳丘方形墳等が前期の、^{ひらばる}平原古墳¹³⁾・^{やまうら}山浦古墳群²⁷⁾・^{すすきお}薄尾古墳群²⁸⁾等が中期の古墳として知られ、集落遺跡では^{もとこが}元古賀遺跡²⁹⁾でややまとまった資料が得られている。

古墳時代も後期の6世紀になると、新たな集落の形成や国造級の首長墓と見られる^{つもぎづか}剣塚古墳³⁰⁾・^{おかでら}岡寺古墳³¹⁾・^{こうしんどうづか}庚申堂塚古墳³²⁾の3基の前方後円墳の築造等、この地域における政治的状況の大きな変化が窺えるが、その実態や背景については今のところ憶測の域をでない。またこの時期には^{とうじゅうろう}脊振山系の^{しゃくしがみね}山麓部を中心に、^{ながた}東十郎³³⁾・^{かみやま}杓子ヶ峰・^{みやこだに}永田³⁴⁾・^{みやにし}神山・^{たていし}都谷¹⁾・^{たていし}宮西¹⁾・^{たていし}立石古墳群等の6世紀後半から7世紀代にかけて群集墳の形成が顕著である。

飛鳥時代～平安時代前半期の律令期においては、肥前国東端の筑前国・筑後国と接する三國国境にあたり、概ね大木川を境として北東部は^{きい}基肄郡、南東部は^{きよ}養父郡の範囲である。「肥前国風土記」基肄郡の条には「郷陸所、里十七、驛壹所小路」とあり、「和名類聚抄」に^{ひめこそ}姫社・^{やまだ}山田・^{きい}基肄・^{かわかみ}川上・^{はせ}長谷の5郷が挙げられている。また、養父郡は「肥前国風土記」に「郷肆所、里一十二、烽壹所」と記載され、^{とす}鳥標郷、^{むらり}日理郷、^{きやま}狭山郷がみえ、「和名類聚抄」には^{きやま}狭山・^{やま}屋田・^{やぶ}養父・^{とす}鳥栖の四郷が挙げられている。このうち^{ひめかたまち}姫社郷は^{はたきまち}鳥栖市^{はるまち}姫方町・^{しづくまち}幡崎町・^{はるまち}原町一帯、^{きやまごち}基肄郷は^{こくら}基山町^{みやうら}木山町・^{やぶ}小倉・^{くらのうらまち}宮浦一帯、^{やぶ}養父郷は^{くらのうらまち}鳥栖市^{しづくまち}養父町・^{くらのうらまち}蔵上町・^{くらのうらまち}宿町一帯にそれぞれ比定されているが、これ以外の郷及び基肄駅の所在は確定していない。鳥栖の由来として「肥前国風土記」には「昔者 輕嶋明宮御宇營田天皇之世、造鳥屋於此郷、取聚雜鳥、養馴 貢上 朝廷。因曰鳥屋郷。後人改曰鳥標郷。」とある。地域は異なるが、^{かんざき}神埼郡^{よしの}吉野ヶ里遺跡³⁵⁾では、鳥飼部の存在を示唆する「日下部 鳥甘」と記された木簡や刻線で鳥を描いた多数の土器が出土しており、「養父」・「山田」・「栖」等の墨書土器の出土と考え併せると風土記の記述との関連で非常に興味深い。なお、養父郡の「烽壹所」は^ひ日の^{くらま}隈山と呼ばれた朝日山に比定され、また基肄郡には基肄城が設けられた他、基肄軍団の存在も想定されており、古くから交通の要衝であるとともに軍事的拠点であったことが窺える。当該期の遺跡としては、^{おぎの}荻野遺跡¹⁾・^{あやふ}安永田遺跡・^{ひがんだ}日岸田遺跡・^{あかさか}本川原遺跡・^{ほんばる}本原遺跡・^{もとこが}元古賀遺跡で7～8世紀代の、^{やなぎ}柳の^{もと}元遺跡³⁶⁾で9世

紀代の堅穴建物を主体とする集落が調査されている。

平安時代後期には、永承2(1047)年に神辺莊が、永保3(1083)年に鳥栖莊・幸津莊・幸津新莊が大宰府天満宮安楽寺に寄進されており、律令制の弛緩に伴って多くの莊園が立莊していたものと考えられる。鎌倉時代後期における肥前国内の公領・莊園を網羅的に知り得る史料として著名な正応5(1292)年8月16日「河上宮造営用途支配惣田数注文」³⁷⁾によれば、莊園として小倉庄・鳥栖庄・幸津庄・幸津新庄・神辺庄(以上は安楽寺領)・養父庄・村田庄(以上は宇佐弥勒寺領)・奈良田庄・蘭部庄・荒保社領・東屋社領が、公領として基肆北郷・基肆南郷・養父東郷・養父西郷・義得保・瓜生野保が挙げられており、大宰府天満宮安楽寺領を主体とする莊園が大きな割合を占めていること、公領では律令期の郡が中世的な郷へと分解し、義得・瓜生野等の名を冠する収税単位が成立していたこと等を知り得る。在地領主としては、曾禰崎氏・土々呂木氏・藤木氏・山浦氏・神辺氏等が史料に散見され、鎌倉御家人として活躍した氏族も多かったようである³⁸⁾。遺跡の調査例では、一の坪遺跡³⁹⁾・日岸田遺跡・浦田遺跡⁴⁰⁾等で村落の一部が、今泉遺跡⁴¹⁾では在地領主の館かと思われる遺構群が見つかっている。

南北朝から室町時代の肥前東部地域は、九州探題と小弐氏の覇権争いを軸として戦国期に至るまで戦乱が絶えず、西方に九州探題の本拠地ともなった綏部城を控え、交通の要衝でもある本地域は、諸勢力の錯綜する戦略的な拠点であった。戦国期には現在の筑紫野市原田を本貫地とする筑紫氏が勝尾城を本城として周辺を押さえ、戦国末期の天正14(1586)年に島津氏の北征によって落城するまで、葛籠城等の支城群と総構と推定される外郭線に防御された、領主の館を中心とする城下集落が形成されていた⁴²⁾。

天正15(1587)年の豊臣政権による九州平定の後、基肆郡と養父郡の東半分は小早川隆景に、養父郡西半分は鍋島直茂に与えられ、以後前者が対馬藩領、後者が佐賀本藩領として明治維新を迎えることになる。長崎街道が通過するため、領内にはそれぞれ田代宿と轟木宿が設けられ、宿場として栄えた。

本章の最後に、近世以前の「柚比村」について触れておきたい。慶長年間の絵図には柚比村と田代村が見え、現在の平原集落は柚比村を本村として、江戸中期までには成立している。これ以前の一帯の状況は、承元3(1209)年4月25日「肥前国留守所下文案」⁴³⁾に「基肆郡」の「恒松」名があり、文永3(1266)年6月日「肥前国検注帳案」⁴⁴⁾に「基肆北郷」の「由比恒松名」とあることから、鎌倉期には国衙領である基肆北郷に「由比恒松」と称される名田が存在していたことが解る。現在までの試掘調査や踏査による中世遺跡についての知見と先述の近世村落の在り方から察すれば、この「由比恒松」は、ほぼ現在の柚比集落を中心とする一帯に比定できよう。また、元徳2(1330)年閏6月10日「鎮西下知状案」⁴⁵⁾には河上宮の神役を対捍し催促を受けている「由比村地頭代重禰」の名があり、この「由比村」が「由比恒松」と同一である可能性は充分に考えられる。いずれにせよ先に挙げた2点の史料から鎌倉時代にこの地区に収

税の対象となる一定規模の村落が成立しており、それが「由比」と呼ばれていたことは疑いを容れない。

注

- 1) 佐賀県教育委員会 1991 「都谷遺跡」佐賀県文化財調査報告書第104集
- 2) 鳥栖市教育委員会が1991年度から調査中。弥生時代中期中葉～後期の拠点集落。
- 3) 鳥栖市教育委員会が1991年度に調査。弥生時代後期の集落と古墳時代後期の古墳群を主体とする。
- 4) 佐賀県教育委員会 1992 「西田遺跡」佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書10」佐賀県文化財調査報告書第108集
- 5) 佐賀県教育委員会 1993 「平原遺跡II」佐賀県文化財調査報告書第120集
- 6) 佐賀県教育委員会 1979 「本川原遺跡-第3次調査-」佐賀県文化財調査報告書第49集
- 7) 佐賀県・鳥栖市・基山町教育委員会が1992年度に調査。
- 8) 鳥栖市教育委員会 1983 「村田・三本松遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第17集
- 9) 小田富士雄 1959 「佐賀県田代発見の石剣と土器」九州考古学」7・8号 九州考古学会
- 10) 鳥栖市教育委員会が1983年度に調査。
- 11) 鳥栖市教育委員会が1984年度に調査。
- 12) 鳥栖市教育委員会 1979 「長ノ原遺跡概報」鳥栖市文化財調査報告書第5集
1986年度の調査では弥生後期の竪穴建物から後漢鏡片が出土している。
- 13) 鳥栖市教育委員会 1982 「平原遺跡・平原古墳」鳥栖市文化財調査報告書第11集
- 14) 鳥栖市教育委員会 1985 「安永田遺跡-佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸銅型出土地点の調査-」鳥栖市文化財調査報告書第25集
- 15) 鳥栖市教育委員会 1984 「前田遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第23集
- 16) 鳥栖市教育委員会 1984 「柚比遺跡群範囲確認調査第6年次概要報告書-柚比梅坂遺跡の調査-」鳥栖市文化財調査報告書第18集
- 17) 鳥栖市教育委員会 1980 「大久保遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第6集
- 18) 鳥栖市教育委員会 1984 「フケ遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第20集
- 19) 中山平次郎 1918 「銅鉾・銅剣並びに石剣発見地の遺物」考古学雑誌」第8巻第8号 日本考古学会
- 20) 柴元静雄 1971 「基山町久保田甕棺出土の鉄剣について」新郷土」267号 新郷土刊行会
1990年度の基山町教育委員会の調査で鉄戈が出土している。
- 21) 佐賀県・鳥栖市・基山町教育委員会が1992年度に調査。
- 22) 北茂安町教育委員会 1986 「検見谷遺跡」北茂安町文化財調査報告書第2集
- 23) 中川直之 1987 「広形銅戈の鋳型 鳥栖市で発見される」新郷土」462号 新郷土刊行会
- 24) 鳥栖市教育委員会 1988 「本原遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第36集
- 25) 藤瀬禎博 1988 「赤坂古墳」第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制」第1分冊
- 26) 佐賀県教育委員会 1974 「本川原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第26集
佐賀県教育委員会 1975 「本川原遺跡-第2次調査-」佐賀県文化財調査報告書第32集
- 27) 佐賀県教育委員会 1973 「鳥栖市山浦古墳群」佐賀県文化財調査報告書第21集
- 28) 松尾禎作 1958 「薄尾古墳群について」鳥栖史談」2 鳥栖史談会
- 29) 鳥栖市教育委員会 1992 「元古賀遺跡II」鳥栖市文化財調査報告書第42集
- 30) 鳥栖市教育委員会 1984 「剣塚前方後円墳」鳥栖市文化財調査報告書第22集
- 31) 鳥栖市教育委員会 1984 「岡寺前方後円墳」鳥栖市文化財調査報告書第21集

- 32) 佐賀県立博物館 1978 「庚申堂塚調査報告書」佐賀県立博物館調査研究書第4集
- 33) 佐賀県教育委員会 1966 「東十郎古墳群」
- 34) 鳥栖市教育委員会 1982 「柚比遺跡群範囲確認調査第5年次概要報告書－永田古墳群の調査－」鳥栖市文化財調査報告書第14集
- 35) 佐賀県教育委員会 1992 「吉野ヶ里－神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－」佐賀県文化財調査報告書第113集
- 36) 佐賀県教育委員会 1991 「柳の元遺跡」佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書9」佐賀県文化財調査報告書第101集
- 37) 河上神社文書23号(佐賀県史編纂委員会 1955 「佐賀県史料集成」古文書編第1巻)
- 38) 瀬野精一郎 1975 「肥前国における鎌倉御家人」「鎮西御家人の研究」吉川弘文館
- 39) 鳥栖市教育委員会 1985 「鳥栖市団体営圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書」鳥栖市文化財調査報告書第24集
- 40) 鳥栖市教育委員会が1988年度に調査。
- 41) 鳥栖市教育委員会が1985年度に調査。
- 42) 鳥栖市教育委員会 1993 「筑紫氏と勝尾城－鳥栖の町づくりと歴史・文化講座報告書第4集－」
- 43) 河上神社文書1号「河上社文書紛失状」中(佐賀県史編纂委員会 1955 「佐賀県史料集成」古文書編第1巻)
- 44) 龍造寺文書217号(佐賀県立図書館 1958 「佐賀県史料集成」古文書編第3巻)
- 45) 実相院文書続編11号「河上社重書案」中(佐賀県立図書館 1974 「佐賀県史料集成」古文書編第15巻)

参考文献

- ①鳥栖市総務部企画課 1992 「'92鳥栖市勢要覧」鳥栖市
- ②木原武雄 1969 「新鳥栖市史」鳥栖市史出版後援会
- ③鳥栖市史編纂委員会 1973 「鳥栖市史」鳥栖市
- ④杉谷 昭・日野尚志・太田順三編 1982 「角川日本地名大辞典 41 佐賀県」角川書店
- ⑤砥川隆二 1967・1968 「佐賀の火山灰層のおいたち」『新郷土』223号～228号 新郷土刊行会
- ⑥佐賀県企画室 1978 「土地分類基本調査 脊振山」佐賀県
- ⑦佐賀県 1986 「佐賀東部地域環境利用ガイド(昭和60年度環境庁委託業務報告書)」
- ⑧佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会 1951 「校本肥前風土記とその研究」
- ⑨石橋新次 1981 「鳥栖地方の中・近世」『小原遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第9集



図3 遺跡周辺の地形(1:20,000 ①は1区, ②は2区)

第3章 調査の内容

1. 平原遺跡1区の概要

平原遺跡は、佐賀県鳥栖市柚比町字平原・大久保と今町字岸田に所在する。脊振山地東部、九千部山系の杓子ヶ峰（標高312m）から東に伸びる段丘群の端部にあたる。遺跡がのる高位段丘は花崗岩質の基盤で、上部は粘質の強い赤褐色の風化土壌である。弥生～古墳時代の遺構はこの粘質土に掘り込まれており、その上位には旧耕作土を含む褐色～灰褐色の表土が30cm程度の厚さで堆積している。

平原遺跡として周知化されている範囲を地形的に見ると、大久保遺跡から連なる標高54～30mの段丘、その基部付近より派生して南側に並行しつつ伸びる尾根筋、2区として調査した東側の水田部、の大きく3つに区分でき、遺跡の主体部を成す約6haに及ぶ段丘上は、今次調査や確認調査の結果から一連の集落遺跡として認識できる。1区は、この段丘の東端部を占め標高43mを最高所とする尾根のほぼ主要部分で、3区周辺に次いでまとまった平坦面を成す地区である。

1978年度に鳥栖市教育委員会が確認調査を実施するまでは、遺跡の内容はほとんど知られておらず、1区東側の現在崖落ちとなっている部分が削平された際に、箱形石棺墓らしい遺構3基程があったと伝えられるのみであった。鳥栖市教育委員会の試掘は地番を地区名として行われたが、今回1区として調査した辺りは31-1区として3箇所の試掘坑が設定されている。確認調査の報告書では、他の試掘区の調査結果と併せて弥生時代中期初頭～前葉・中期末～後期初頭・後期後半～終末、古墳時代中期～後期と断続的に営まれた集落遺跡であることが予察として述べられており、今回の調査によって、その見通しの正しさが明らかになった。

1区の調査面積は約3,000㎡で地形的にもまとまりの良い範囲であり、遺構の分布は密集とは言えないまでも比較的密であった。遺構番号を与えた71基の内訳は竪穴建物30棟・土坑39基・溝2条で、その他に小穴多数が検出され、整理期間の関係で十分な検討は行えなかったものの、調査段階で掘立柱建物と認識できるものはなかった。竪穴建物は、弥生時代中期初頭～前葉が3棟、中期末～後期初頭が2棟、不確実であるが中期初頭～前葉の可能性のあるもの4棟、後期後半～終末が9棟、後期のいずれかの時期のもの6棟、弥生時代であることは解るか時期の限定が難しいもの2棟、古墳時代中期が1棟、時期不祥のもの2棟であり、弥生時代後期後半～終末が主体を占め、次いで中期初頭～前葉が多いようである。土坑のうち時期の解るものは、弥生時代中期初頭～前葉12基、中期末～後期初頭2基で、時期別の出現率は竪穴建物の傾向とはかなり異なっている。

以上のように、1区は弥生時代中期初頭～前葉と後期後半～終末の2時期を盛期とする断続的に営まれた集落であることが明らかになり、特に弥生時代中期初頭～前葉段階の遺構からは青銅器鋳型片や石製剣把頭飾が出土し、大きな成果を挙げた。

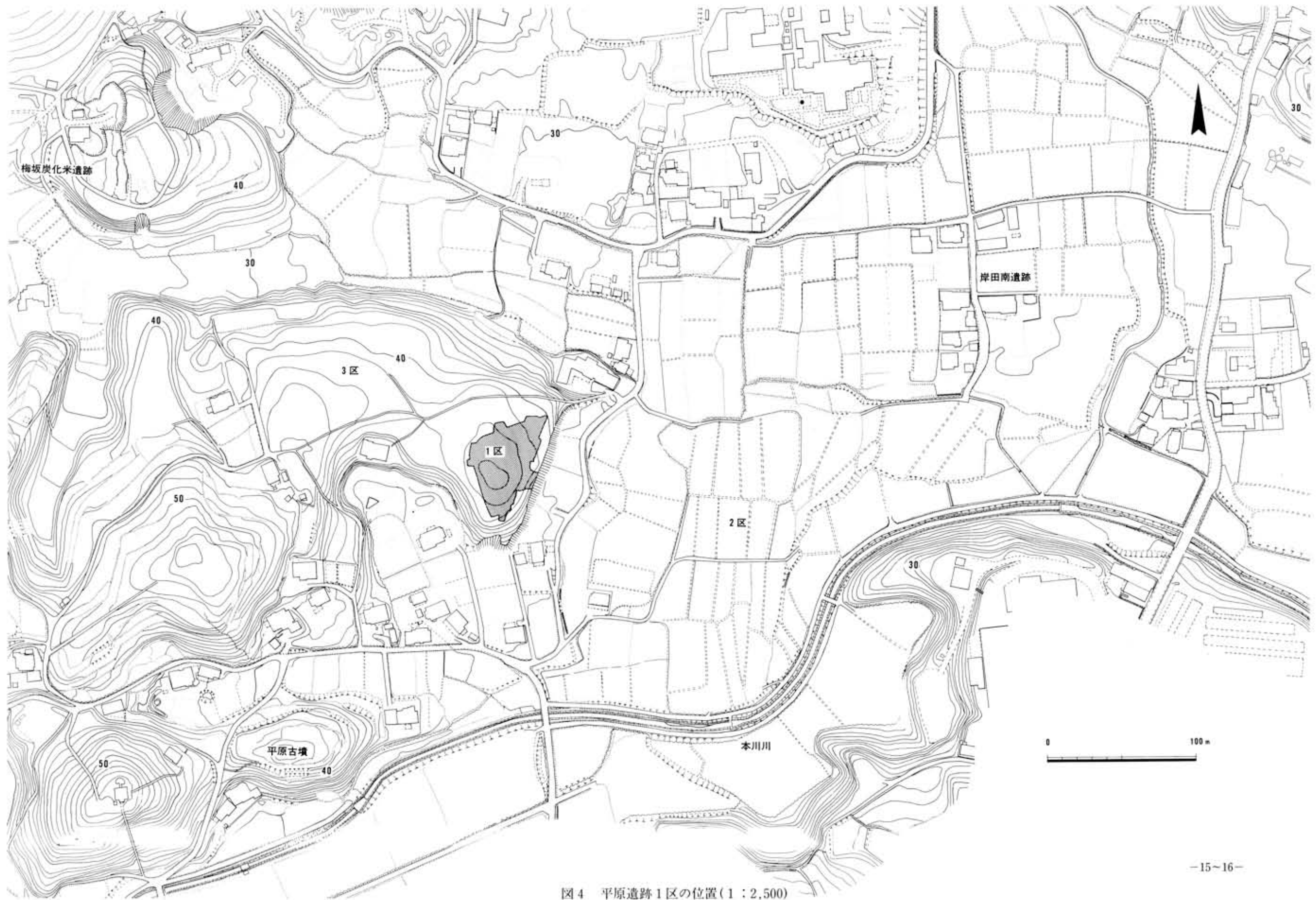


図4 平原遺跡1区の位置(1:2,500)

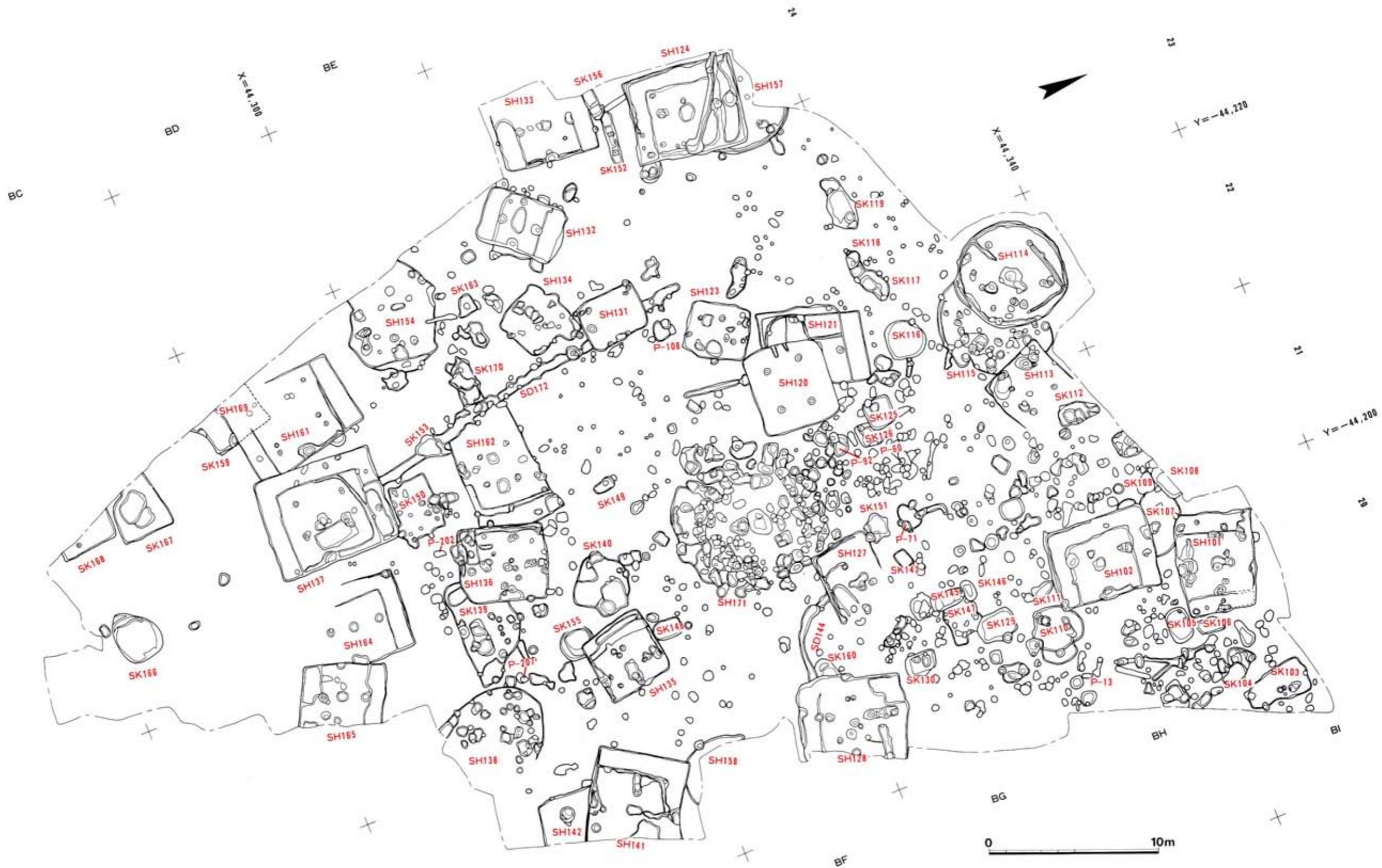


図5 1区の遺構配置(1:250)

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物

SH101 (図6, 写真図版4-1)

調査区北東部のB I 2 0区画に位置し、一部は調査予定区外であったが拡張して完掘した。SK107と重複し、これより新しい。平面は長方形で、北東隅が攪乱によって破壊されているが、概ね全形を知り得る。長軸6.0m、短軸4.7m、現存壁高0.07~0.3m、主軸はN73°Wである。

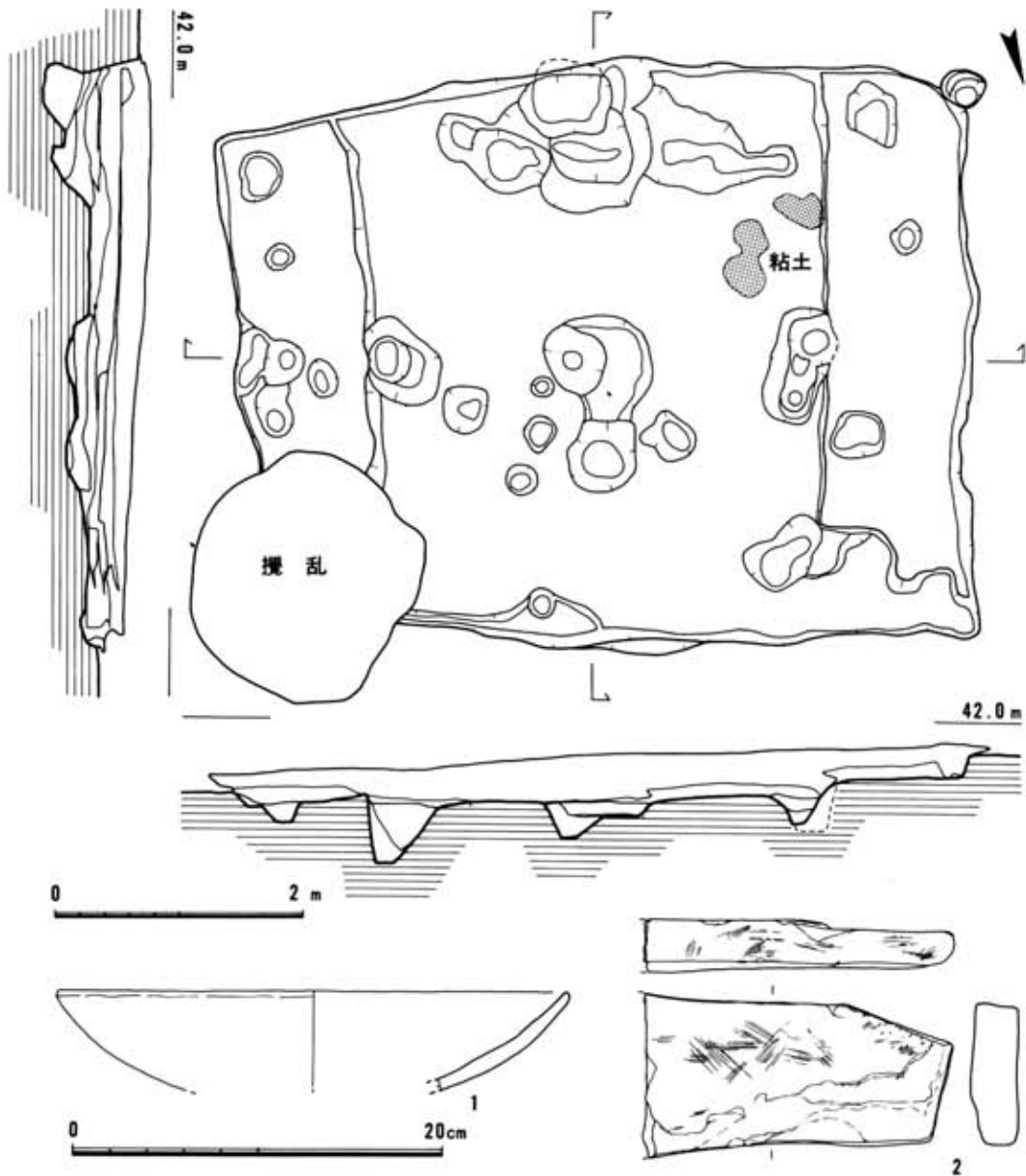


図6 SH101(1:60), 出土遺物(1:4)

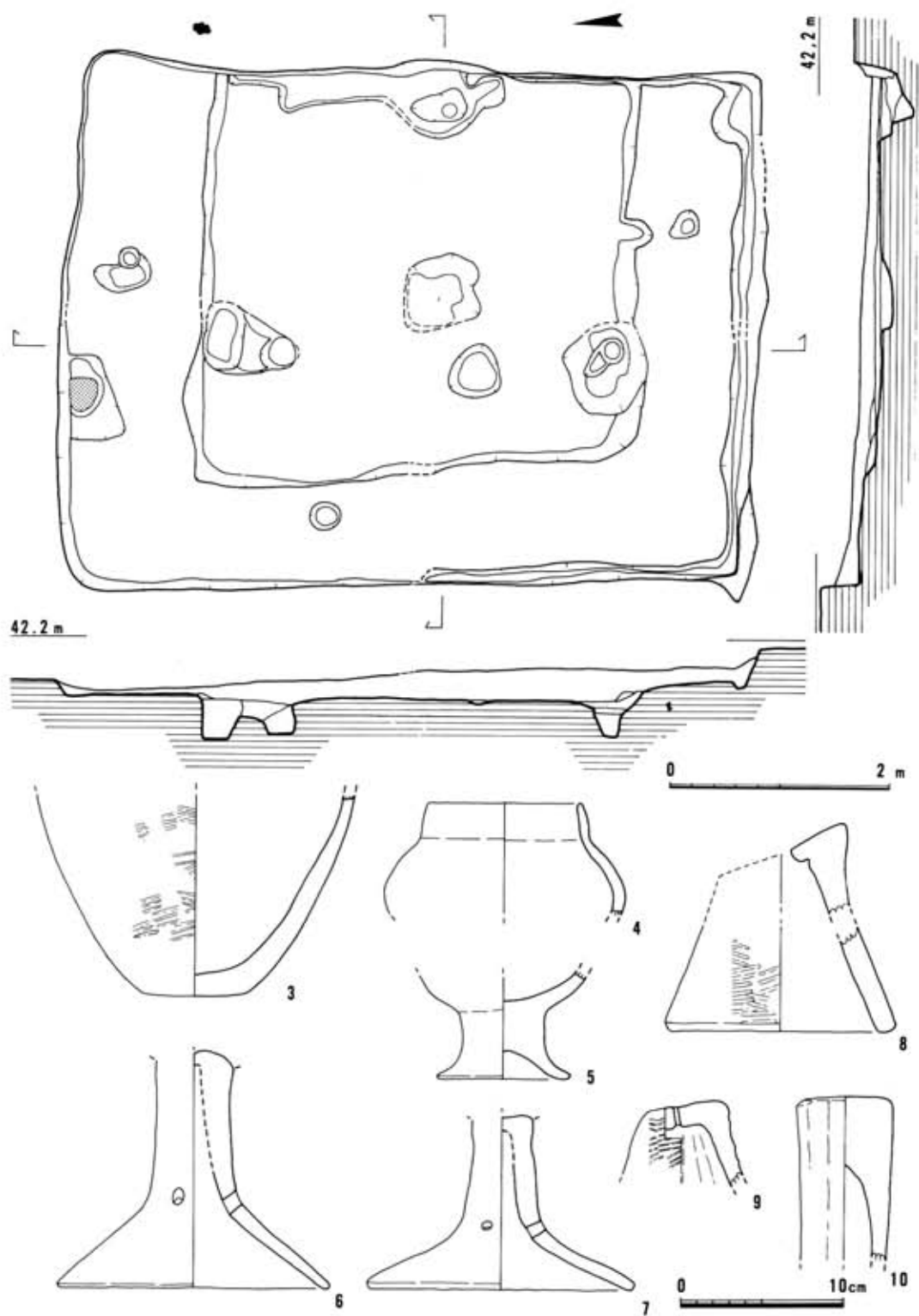


图7 SH102(1 : 60), 出土遺物(1 : 4)

貼り付けの屋内高床部（いわゆるベッド状遺構）が東西2辺に設けられており、床面からの高さは0.05～0.16mである。中央の土坑は炭化物を僅かに含み、炉の可能性もある。また南壁際中央には深さ0.2mの不整形な壁際土坑がある。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は3.6mである。遺物は埋土中から弥生土器が、壁際土坑中から砥石1点が、また床面で器種不明の鉄器片が1点出土した。土器はほとんどが小破片で、多くは流入によるものであろう。

1は鉢の口縁部から体部にかけての破片である。2は大型の砥石で長軸の一方を欠損する。石材は目の細かい泥岩と思われ、使用面は4面に及ぶ。

SH102（図7・8、写真図版4-2）

調査区北東部のBH20・BH21区画に位置する。平面は長方形で、主軸はN8°E、長軸6.4m、短軸4.8m、現存壁高0.16～0.3mである。削り出しの屋内高床部が東側を除く3辺に設けられており、床面からの高さは0.05～0.1mである。東壁際中央に壁際土坑、中央に炭化物を僅かに含む土坑、北辺に焼土の充填する土坑があり、炉と思われる。支柱穴は長軸に2箇所、主軸よりやや西に振れ、柱間は3.6mである。遺物は埋土中及び床面から弥生土器が、床面から鉄鎌1点が出土した。

3は甕の底部破片で、SH101の検出段階で出土した破片と接合した。4は鉢で、口縁部は僅かに内傾しながら立ち上がる。5

は台付鉢の脚部である。6・7は高杯の脚部でいずれも3方に円形の透かしを穿つ。8・9はいわゆる杵形支脚で、上面はやや傾斜し中央に孔を穿つ。10は中空の筒状の支脚と思われる。11は鉄鎌で、着柄部は折り返しにより作られており、先端部は欠損する。

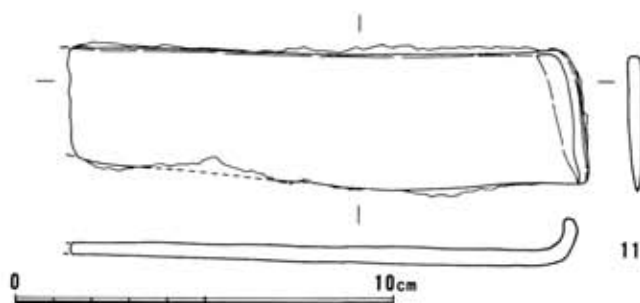


図8 SH102出土鉄器（1：2）

SH113（図9）

調査区北部中央のBH21・BH22区画に位置する。SH115と重複し、これより新しい。遺存状態が悪く東辺は壁の立ち上がりが不明であるため平面形も不確実であるが、1辺約4mの方形の可能性が高い。南北棟とみた場合、主軸はN25°W、長軸4.2m、短軸3.5m以上、現存壁高0.05mである。炉や屋内高床部は確認されなかった。支柱穴は4箇所、梁行柱間1.8～1.9m、桁行柱間1.9～2.0mである。遺物は小穴中から土器細片と黒曜岩剥片が少量出土したが、この住居に伴うものかどうかは不明である。なお時期の決定できる土器や構造上の明確な特徴に欠けるため便宜的に弥生時代の節で説明したが、4本柱で平面方形と推定されることから古墳時代の所産である可能性も強い。

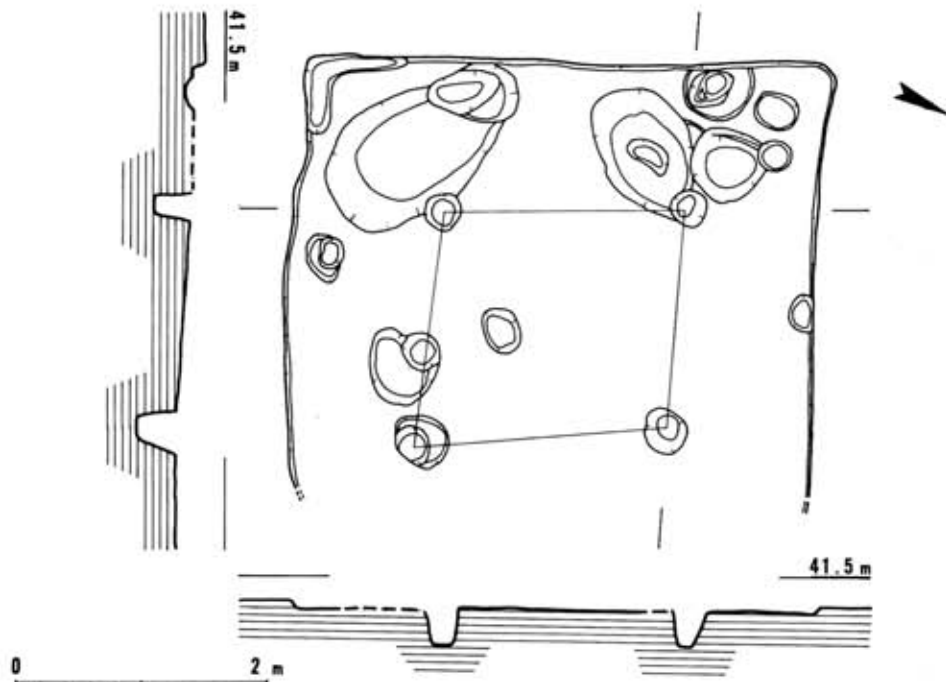


図9 SH113(1:60)

SH114 (図10, 写真図版4-3・4)

調査区北部中央のBH22・BI22区画に位置する。一部が調査予定区外であったが、拡張して完掘した。SH115と重複し、これより新しい。平面は円形で、径6.1~6.3mである。床面はほぼ水平で、現存壁高は北へ向かって低くなる地形のため北側が0.1m、南側が0.3mである。中央に炭化物を含む土坑があり、その西北部に炉と思われる焼けた硬化面がある。支柱穴は6箇所、柱間は1.8~2.6mである。壁溝がほぼ1周している他、間仕切りないし排水のためと思われる小溝が3条ある。また南側の壁際に踏み石か台石かであろう大型の礫が平坦な面を上にして据えてあった。遺物は埋土中及び床面から弥生土器と黒曜岩剥片が出土した。

12はく字状を成す甕の口縁部で、頸部で強く折れて直線的に外上方に伸び、口縁部上面は内傾する。13~15は甕の底部で、安定した平底から直線的に立ち上がる。13は中央部土坑脇の床面直上で出土した。16は鉢で、底部から大きく直線的に開き、一旦緩やかに内湾した後、真つすぐ立ち上がる。17は器台で、口縁部を欠く。

SH115 (図11, 写真図版4-4)

調査区北部中央のBH22区画に位置する。SH113・SH114と重複し、どちらよりも古い。削平が著しいため不確実ではあるが、径約7mの円形に復元できる。現存壁高は0.05mである。支柱穴は6箇所、柱間は1.8~2.2mである。支柱穴のうち2箇所はSH114内にあり、中心部と思われる土坑がSH114の壁際で確認された。遺物は埋土からはほとんど無く、支柱穴やその

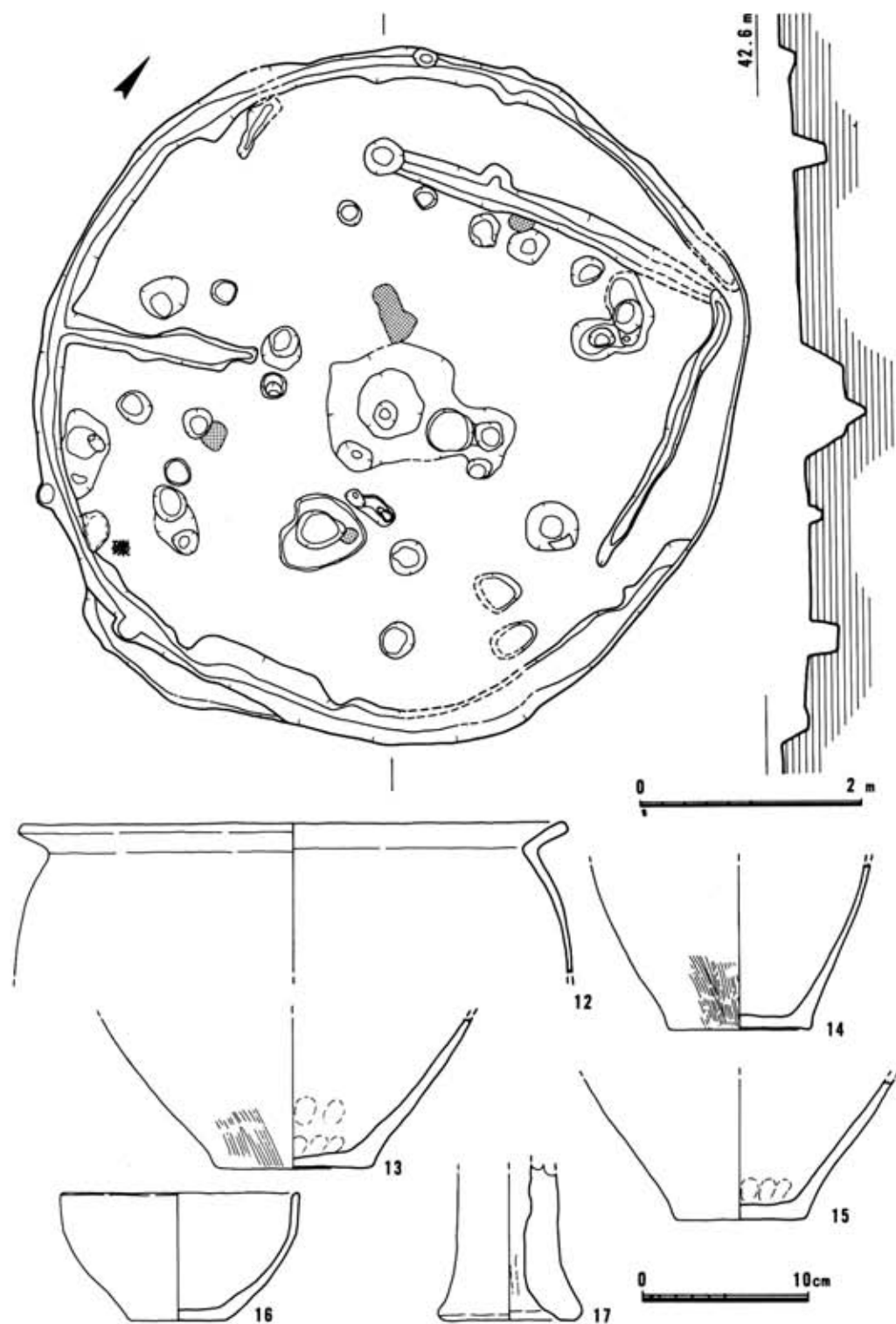


图10 SH114(1 : 60), 出土遺物(1 : 4)

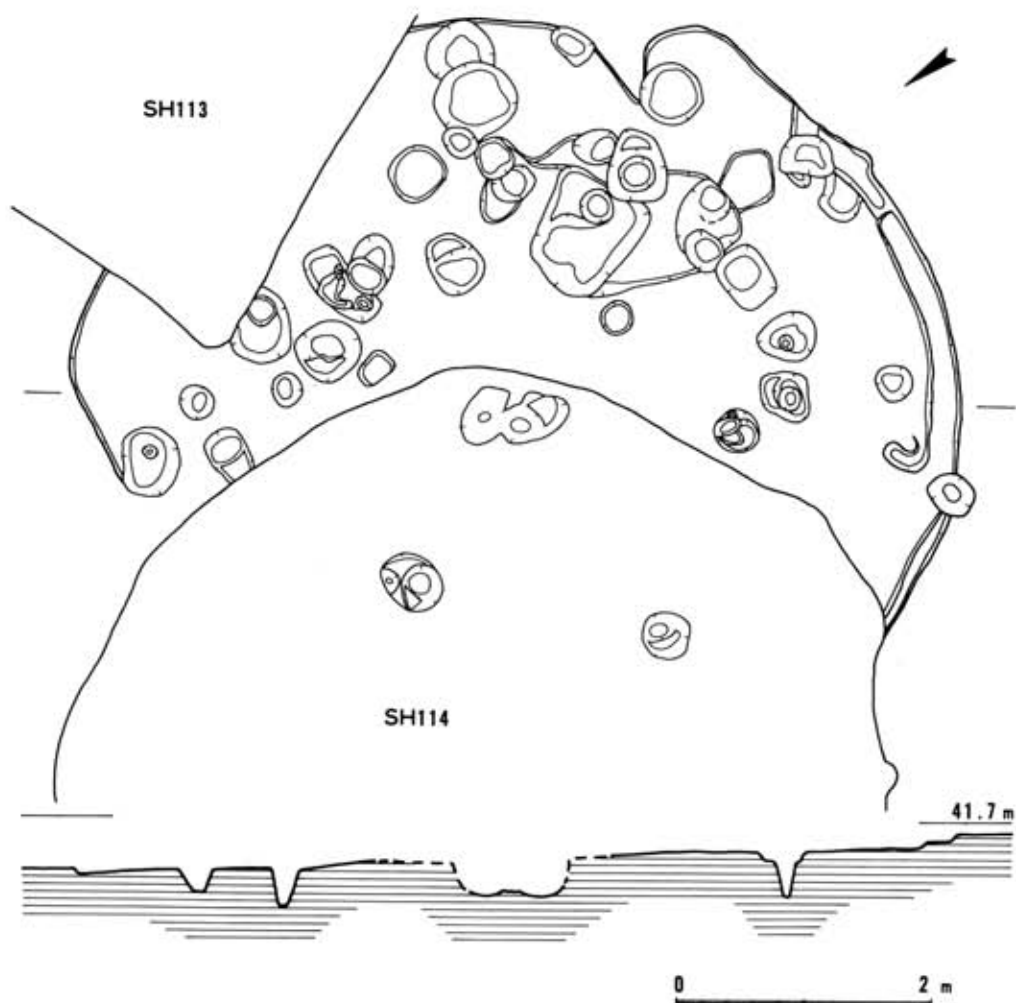


図11 SH115(1:60)

他の小穴から弥生土器・黒曜岩剥片が少量出土したのみである。土器は細片で時期の解るものは無い。

SH121 (図12, 写真図版4-5)

調査区中央部北寄りのBG 2 2 区画に位置する。SH120と重複し、これより古い。遺構検出の段階では西側にもう1棟の竪穴建物が重複するものと考え、これにSH122の遺構番号を与えていたが、土層の観察では2棟の重複とは認められず、完掘した状況を踏まえSH121の張り出しと判断した。したがって、遺構番号SH122は欠番とする。平面は長方形で、長軸6.0m、短軸4.1m、現存壁高0.3m、主軸はN23°Eである。床は厚さ0.05~0.1mの貼床が施されている。床面に間仕切りないし排水のためと思われる小溝が確認された。貼り付けの屋内高床部が南北2辺に設けられており、床面からの高さは0.1mである。中央に土坑、東壁際に不整形な深さ

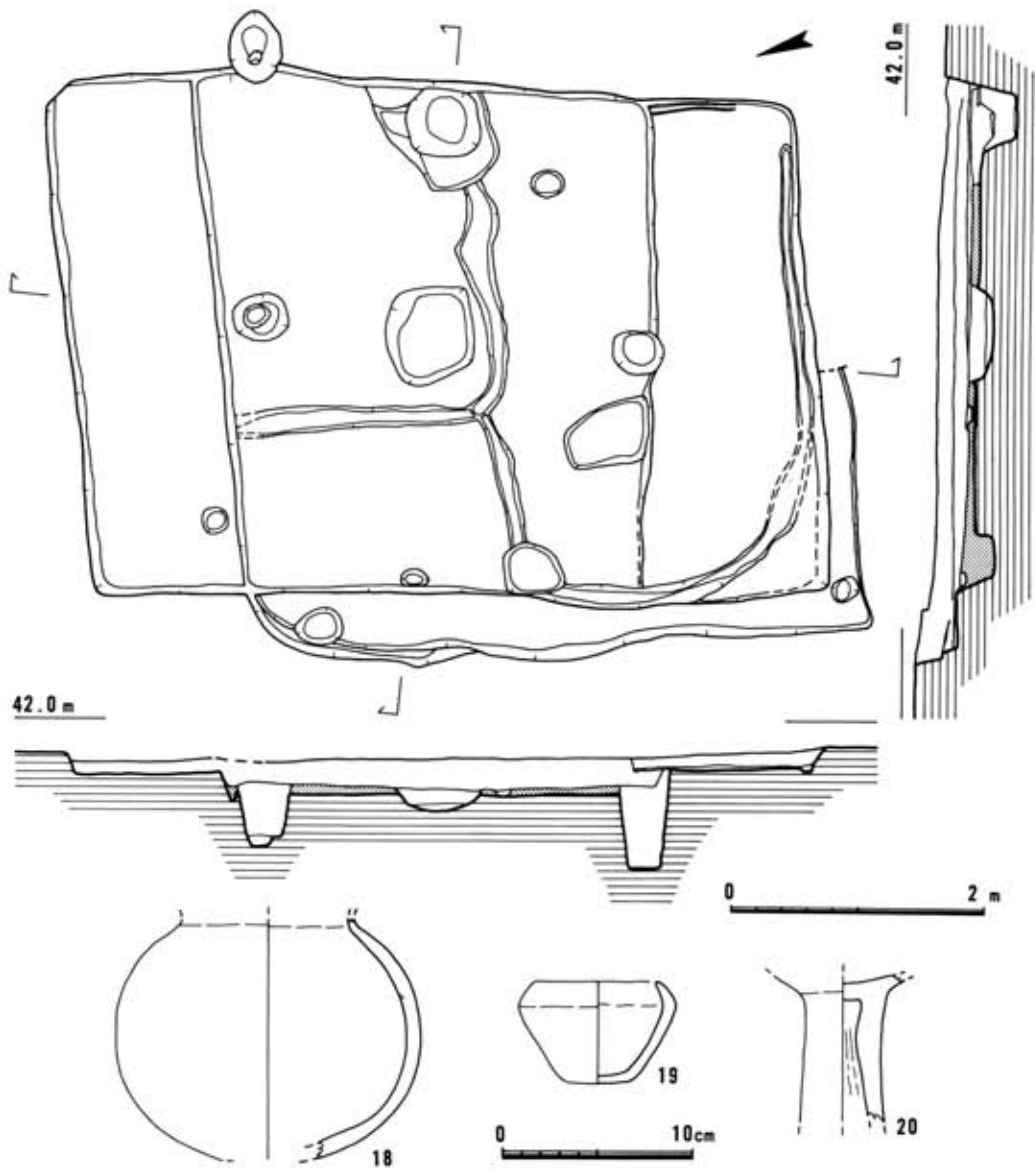


図12 SH121(1:60), 出土遺物(1:4)

0.35mの壁際土坑がある。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は3.0mである。遺物は埋土中及び床面から弥生土器、砥石、黒曜岩剥片少量が出土した。

18は球形の壺の体部で、底部は丸底に近いようである。19は小型の鉢で、口縁部を僅かに欠失する以外は完存である。体部上位で屈曲して先細りの口縁部へ続く。20は高杯の脚部で、全体の形状は明らかでない。

SH123 (図13・14, 写真図版4-6)

調査区中央部北寄りのBG 22・BF 2 2・BG 23・BF 2 3区画に位置する。SH121・SH120の西南に接するが直接の重複関係にはない。平面は隅丸長方形で、長軸3.8m、短軸3.4m、現

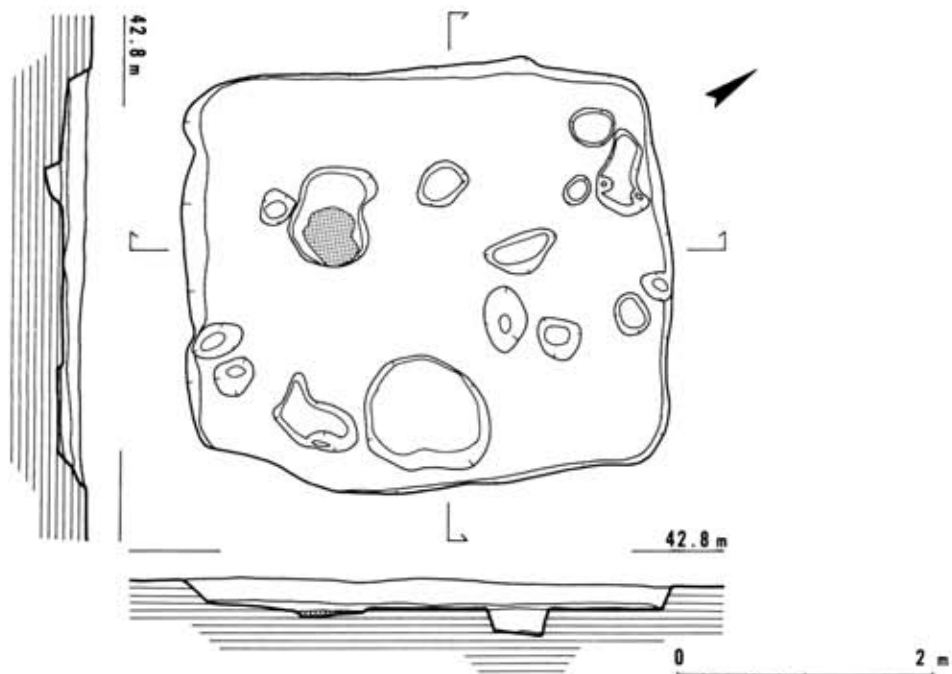


図13 SH123(1:60)

存壁高0.1~0.3mである。やや小型で主柱穴も特定できなかったが、床面は平坦で壁の立ち上がりも明瞭であり、焼土を含む土坑を伴うことや遺物の出土状況とも併せて竪穴建物と判断した。遺物は埋土中と床面から、弥生土器多数が拳大~幼児頭大の礫とともに出土した。

21は完形の小型の甕、22は大型の甕で、頸部に断面三角の突帯を巡らせる。23は口縁部が直行する壺で、底部は丸底である。24は高杯で、杯部は直線的に開いた後、中程で一旦折れて僅かに外反しながら口縁部に至る。脚部は中程まで直線的に伸び、中程から大きく開いて底部となる。25は口縁部が大きく開く器台である。26はほぼ完形の鉢で、不安定な底部から一旦くびれて僅かに内湾しながら立ち上がる。

SH124 (図15~17, 写真図版4-7)

調査区北西端部のBG24区画に位置し、一部BG23区画に及ぶ。SH157と重複し、これより新しい。本遺構は、1978年度確認調査時における平原遺跡31-1区の1号試掘坑1号住居跡である。平面は長方形で、長軸6.8m、短軸5.3m、主軸はN6°Eである。現存壁高は東壁が0.4mで、西側はほとんど残っていない。削り出しの屋内高床部が東側を除く3辺に設けられており、床面からの高さは0.05~0.1mである。主柱穴は長軸に2箇所、柱間は3.5mである。中央部に焼土を含む浅い土坑が、その西南に焼けた硬化面がある。東壁際中央に壁際土坑があり、ここから幅0.4m、深さ0.2m程の溝が北西角に向かって伸び、更に調査区外へ続いている。壁溝はほぼ全周している。遺物は埋土と床面から弥生土器がまとまって出土した。

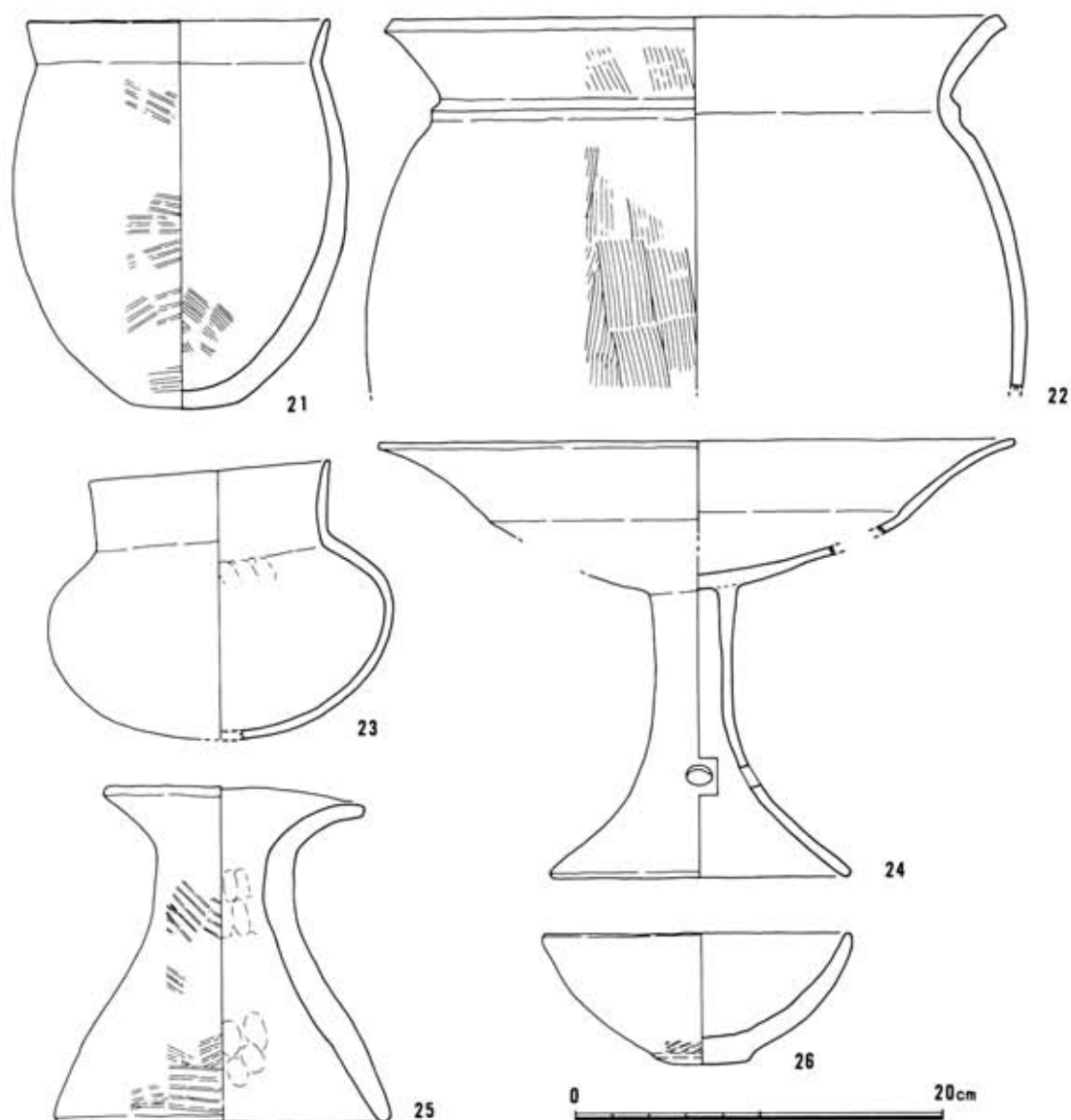


図14 SH123出土遺物(1:4)

27は大型の甕で、頸部に断面三角形の突帯を、胴部下半に断面コ字形の刻目突帯を巡らせる。口縁端部は僅かに内傾した面を成す。28~30は甕で、底部の解るものは丸底に近い。31は穿孔を1箇所もつ特異な器種で、蓋と判断した。32はいわゆる杏形支脚である。33は中央部の土坑から出土した複合口縁壺で、上部と下部とが直接接合しなかったため器高と正確な形状は知り得ない。口縁部は鋭く折れて短く直線的に伸び、底部は凸レンズ状である。34・35はゆるやかにくびれる器台である。

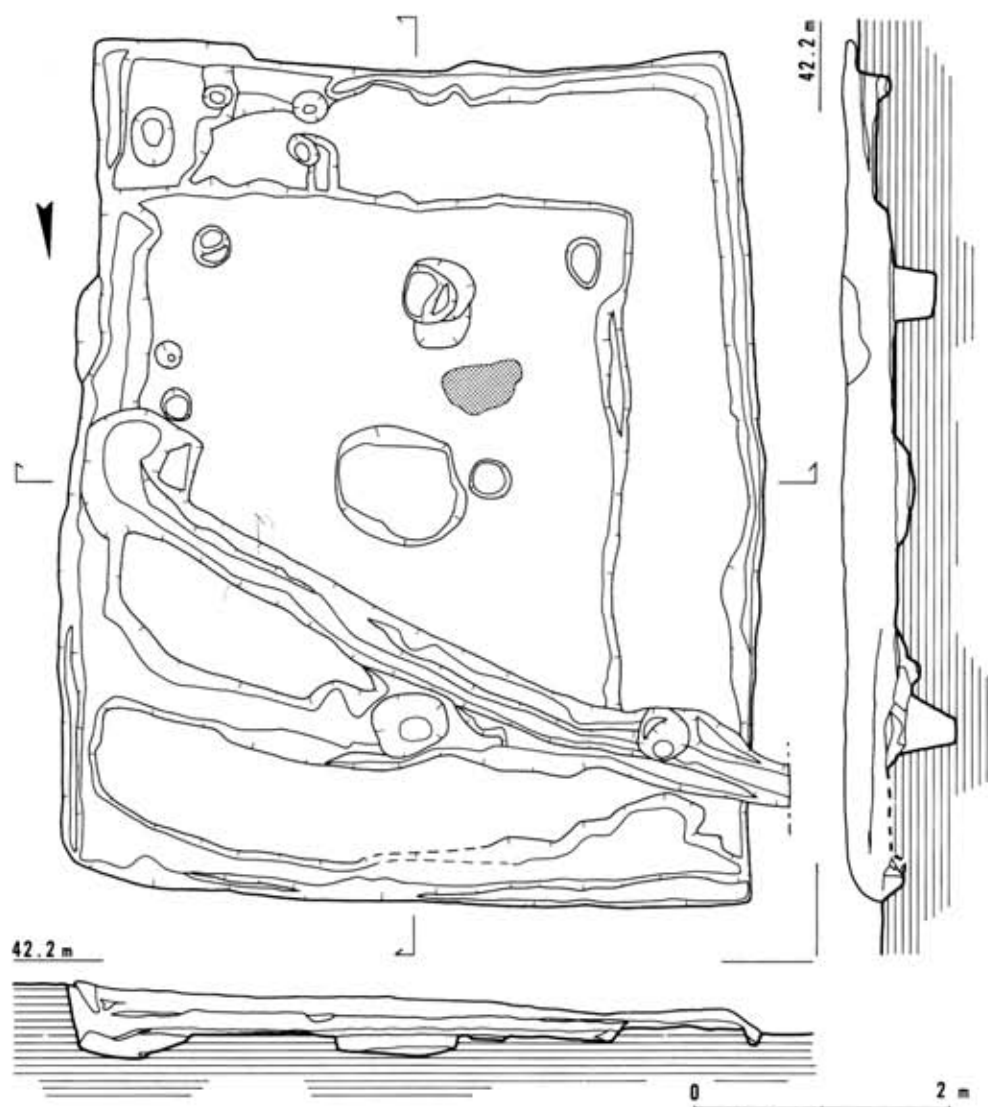


図15 SH124(1:60)

SH127 (図18・19, 写真図版4-8)

調査区中央部やや東よりのBG 2 1区画に位置する。SD144と重複し、これより新しい。削平が著しく、東壁は全く残っていない。平面は長方形で、長軸4.5m以上、短軸3.5m、現存壁高0.1m、主軸はN85°Eである。屋内高床部は西辺のみ痕跡が確認され、床面からの高さは0.05mである。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は2.9mである。遺存状況の比較的よい北辺から西辺にかけて壁溝が巡る。遺物は床面から弥生土器が個体毎にややまとまって出土し、支柱穴からは底部破片が出土した。

36は甕、37-39も底部のみの破片であり不確実だが甕と思われる。38は西側の支柱穴から出土した。40は大型で浅い丸底の鉢、41は広口の壺とすべきか。42は複合口縁壺で、屈曲部に刻

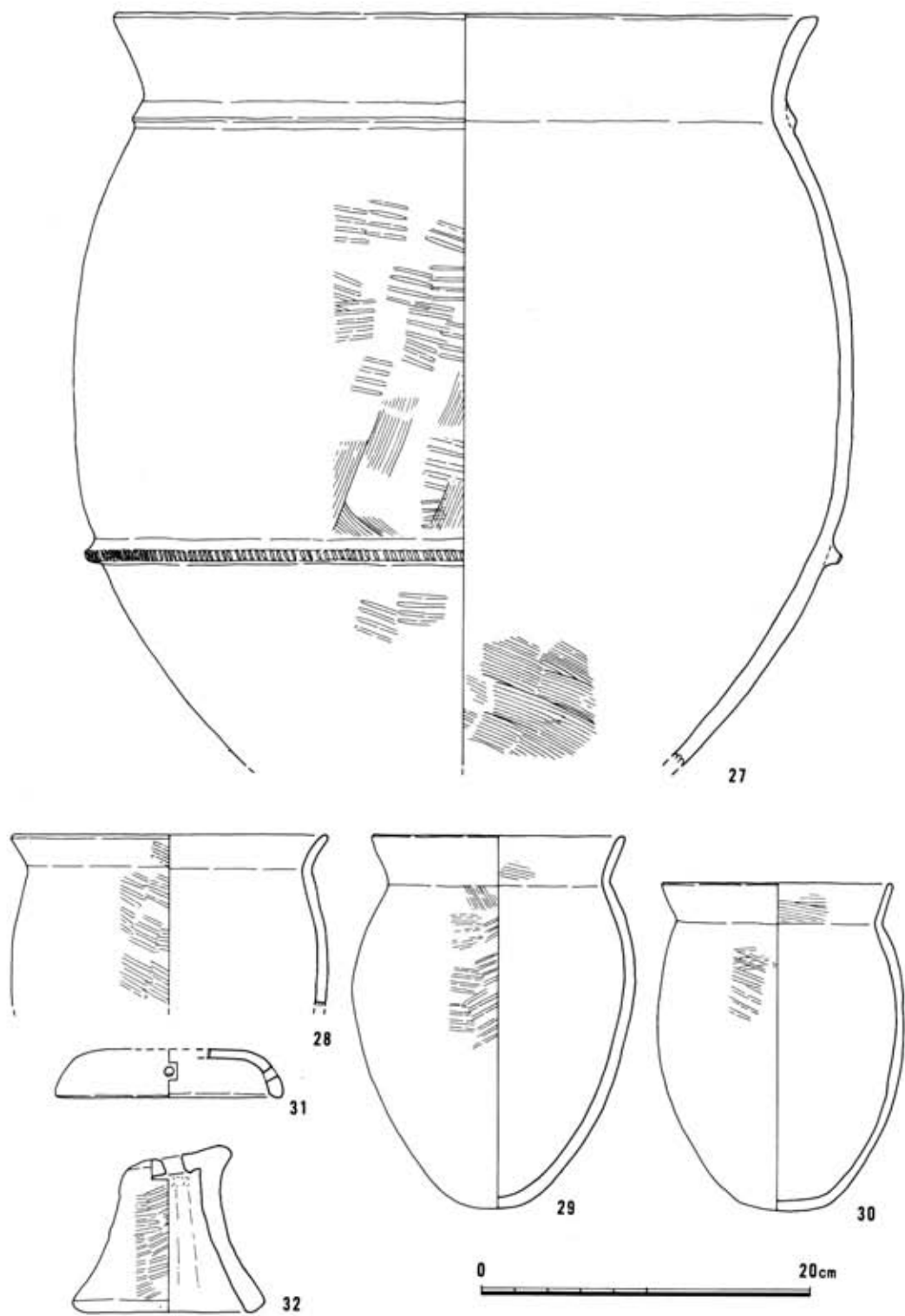


图16 SH124出土遺物 1 (1 : 4)

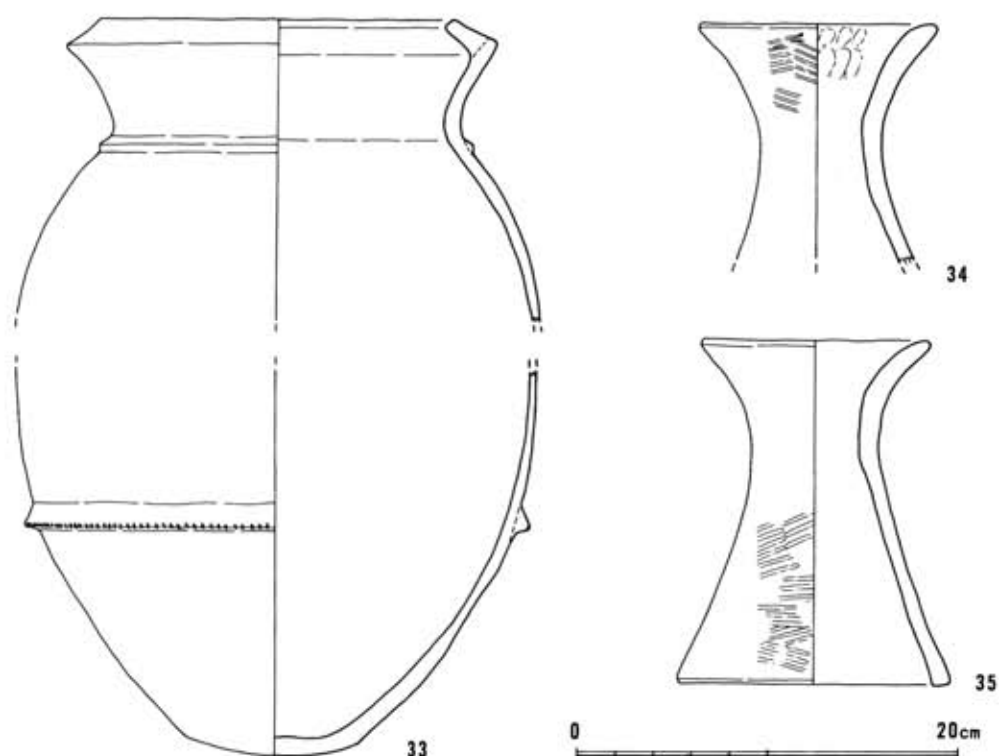


図17 SH124出土遺物 2 (1 : 4)

目を施す。43は杓形支脚で、上面の突出は平たく大きい。44は高杯の杯部、45は脚部で4箇所に穿孔を持つ。

SH128 (図20~22, 写真図版5-1・2)

調査区東端やや北よりのBF20・BG20区画に位置する。SK160・SD144と重複し、これより新しい。平面は長方形で、長軸6.5m、短軸5.7m以上、現存壁高0.4m、主軸はN5°Eである。1978年度確認調査時の31-1区3号試掘坑によって北壁が一部削平されている。削り出しの屋内高床部が南辺と北西角に設けられており、床面からの高さは0.05~0.1mである。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は2.6mである。遺物は埋土中及び床面上から多数の弥生土器が出土し、特に南東の屋内高床部上では数個体の甕と複合口縁壺が据え置かれたような状態であった(写真図版5-2)。

46~49は中型の甕、50は小型の甕で、底部の解る46・50は不安定な平底である。51は中型の甕の底部に穿孔を施している。52はほぼ完形の複合口縁壺で、底部は丸みを帯びてはいるが平底である。53・54は高杯で、いずれも脚部に3箇所の穿孔を持つ。55はやや大型の直口口縁の、56は強く屈曲して外反する口縁の、57は緩やかに外反する口縁で平底の、鉢である。58は台付鉢の脚部であろう。59~62は器台、63・64は杓形支脚である。

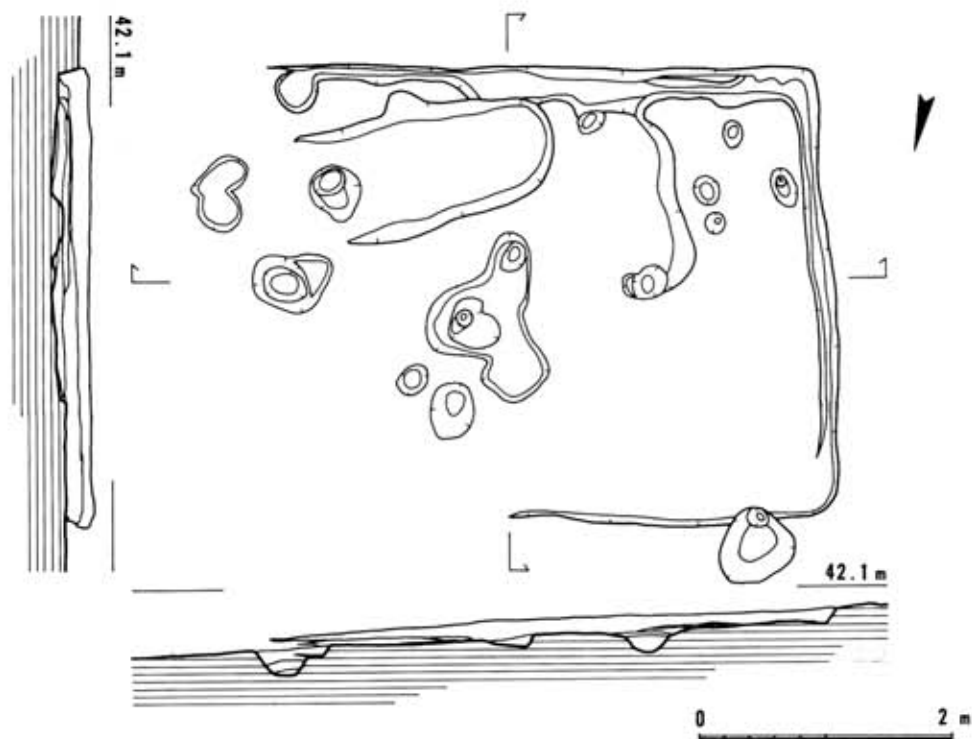


図18 SH127(1:60)

SH131 (図23, 写真図版5-3)

調査区中央やや西よりのBF23区画に位置する。SD172と重複し、これより新しい。平面は隅丸長方形で、主軸はN5°Wである。長軸3.9m、短軸2.9mと小型で、南端中央部にそれらしき小穴が1箇所ある以外は支柱穴と思われるものはない。床面は平坦で、現存壁高は0.07mである。遺物は弥生土器片少量、砥石状の不明石器と石鏃が1点ずつ、黒曜岩剥片が埋土中と床面から出土した。

65~68は甕の口縁部で、いずれも断面三角形の特徴を示す。69・70は厚手で上底の甕の底部である。71は床面の南西隅から完形で出土した、黒色の緻密な泥岩製の磨製石製品である。良く磨きあげられた方柱状の一端が、鋭くはないが、あたかも片刃石斧の刃部の様に作り出されており、図の裏面側には、断面半円形の溝が作り出されている。実用品とすれば砥石とみるのが穏当なところであろうが、その特異な形状は柱状片刃石斧を連想させる。管見では周辺での類例を知らない。72は讃岐岩質安山岩製の石鏃で、先端部と片方の脚部を欠く。風化度や形態の特徴は、土器の時期とも矛盾のないものである。

SH132 (図24~26, 写真図版5-4)

調査区西側中央のBE23・BF23・BE24・BF24区画に位置する。平面は長方形で、長軸5.1m、短軸3.4m、現存壁高0.07~0.2m、主軸はN45°Wである。削り出しの屋内高床

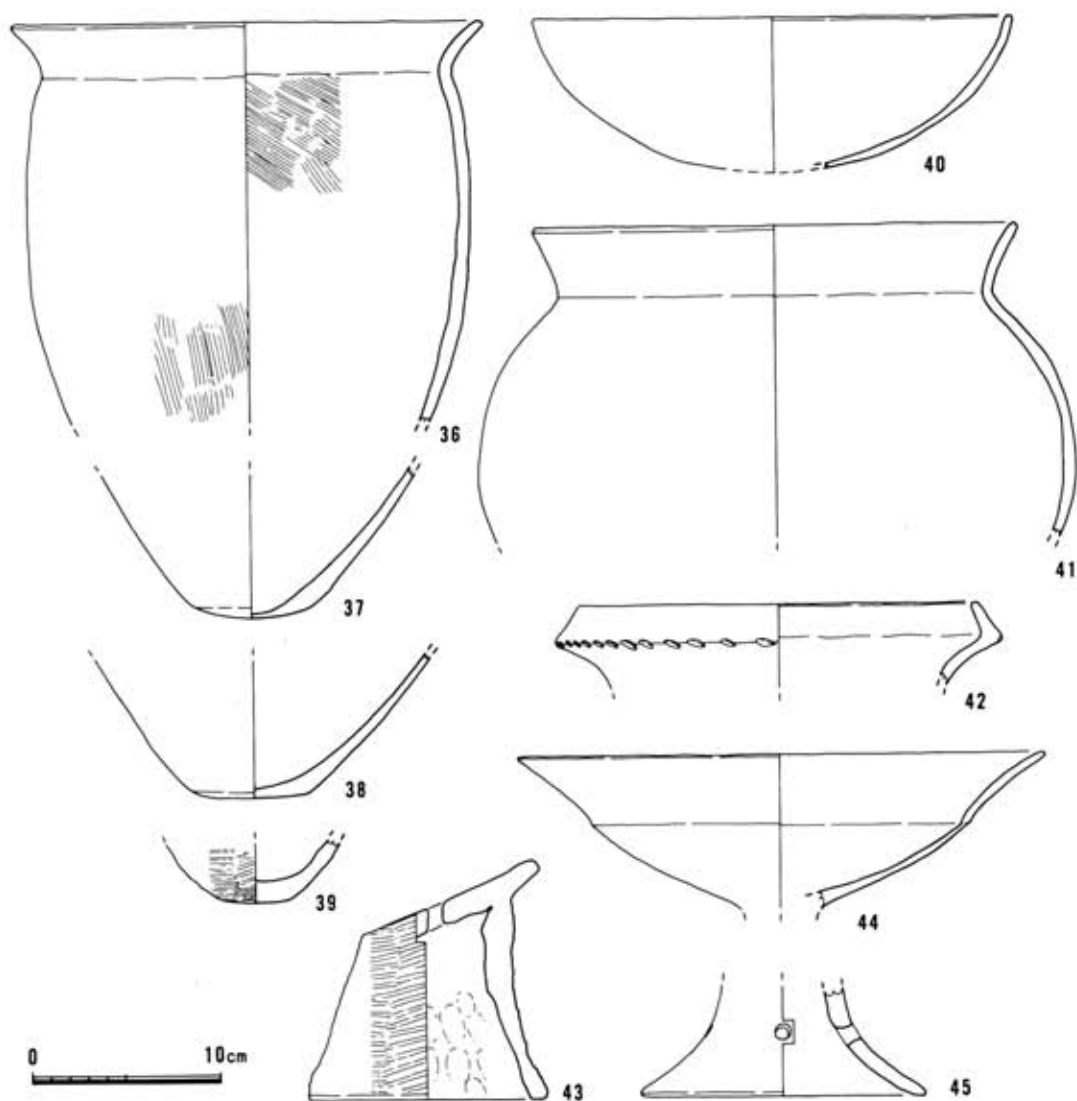


図19 SH127出土遺物(1 : 4)

部が長軸側の2辺に設けられており、床面からの高さは0.1mである。中央部に焼土と炭化物を含む長円形の土坑があり、炉と思われる。東側の壁際には深さ0.3mほどの壁際土坑がある。主柱穴は長軸に2箇所で、柱間は2.3mである。埋土は上部が褐色土、下部は灰状の粘質土で多量の土器が包含されていた。遺物は弥生土器以外に、黒曜岩剥片、砥石が出土した。

73は大型の甕で、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。74~77は中型の甕で、78はやや小型の台付甕である。79は口縁が外反する大型の壺、80は胴部球形の広口壺である。81は口縁部が外反する丸底に近い鉢、82はいわゆる手捏ねではないが、小型のやや歪な鉢である。85・86は口縁部上面が平坦で内側に短く突出する形態の、87・88はこれよりやや大型で直線的に外反す

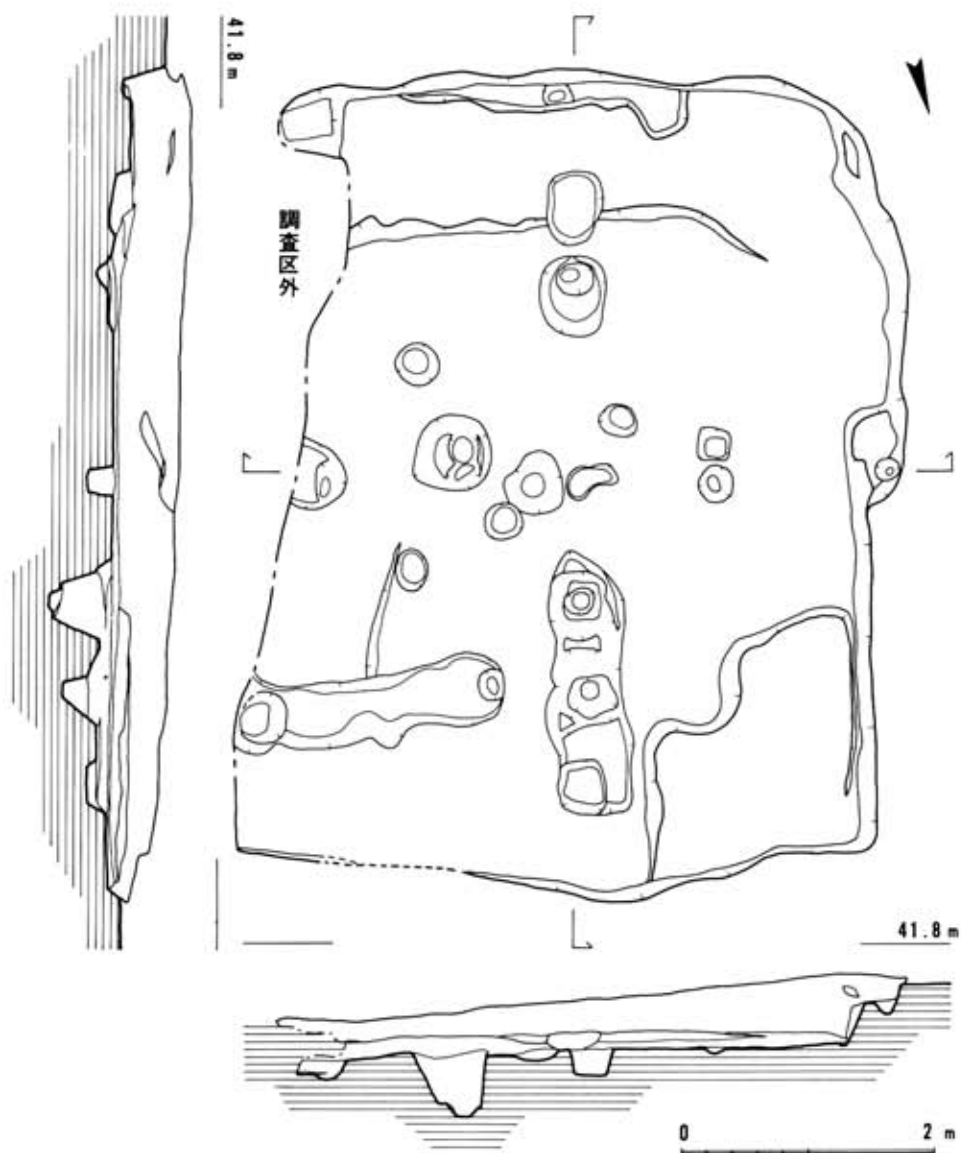


図20 SH128(1:60)

る形態の器台である。89は鉢の可能性も考えたが、内面の調整や細部の作りなどから支脚と判断した。91は杏形支脚で、90もやや華奢で丁寧な作りが異質な感じを受けるが、類品である。

SH133 (図27, 写真図版5-5)

調査区西端中央のBF24区画に位置する。西側が調査予定区外にかかっていたため拡張して完掘したが、全体に削平が著しいうえに地形が西側に低くなっており、西辺は確認できなかった。平面は長方形で、長軸5.6m、短軸3.3m以上、現存壁高0.3m、主軸はN5°Eである。削り出しの屋内高床部が長軸側の南北2辺で確認でき、床面からの高さは0.1mである。中央部に

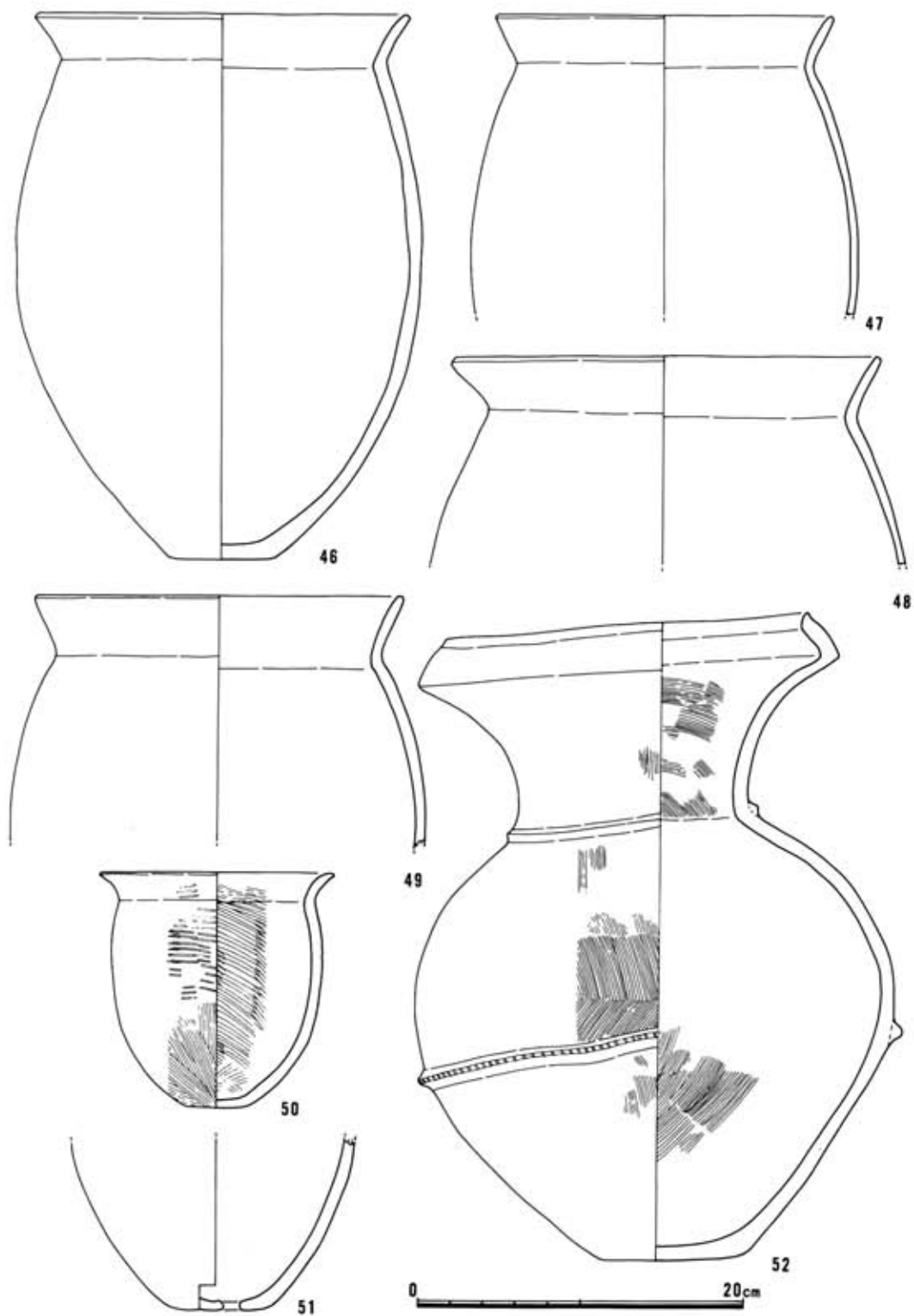


图21 SH128出土遺物1(1:4)

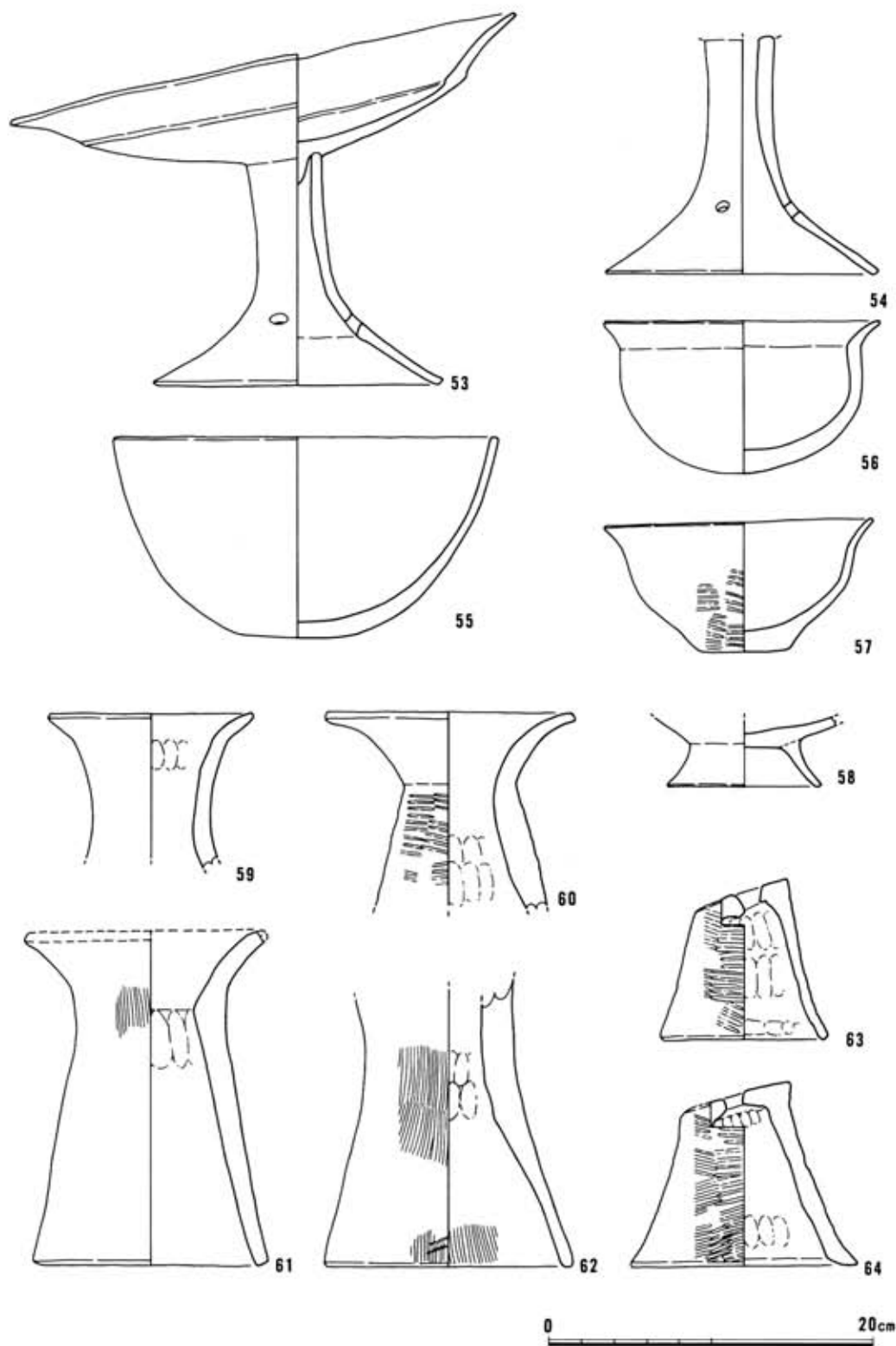


图22 SH128出土遗物 2 (1 : 4)

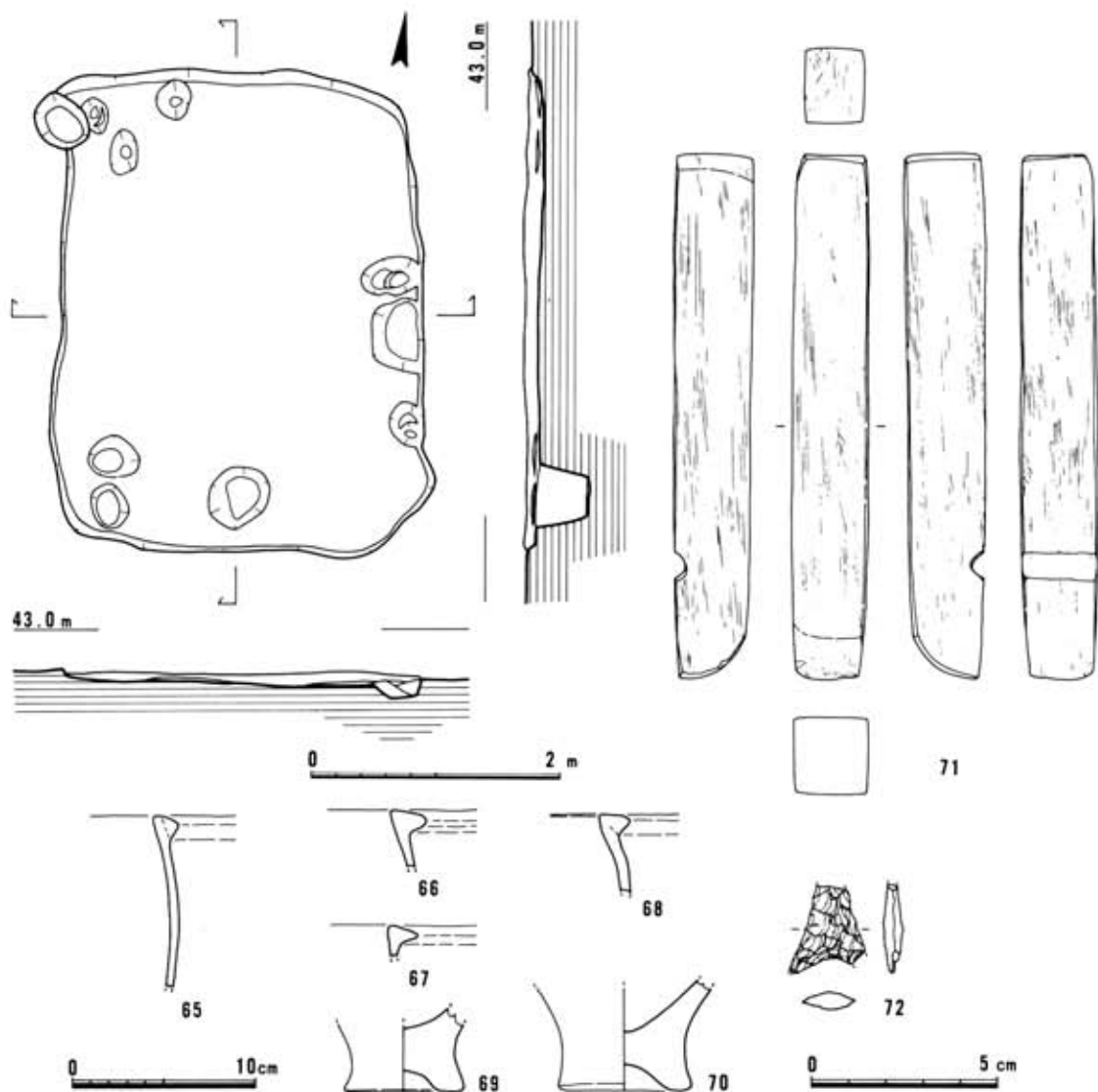


図23 SH131(1:60), 出土遺物(65~70は1:4, 71・72は1:2)

炭化物を含む炉と思われる土坑が、東側の壁際中央に壁際土坑がある。主柱穴は長軸に2箇所、柱間は3.1mである。遺物は弥生土器小片の他、混入と考えられる石鏃1点が出土した。

92は複合口縁壺の口縁部破片である。93は完形の黒曜岩製石鏃で、表面は摩滅しており形態からも縄紋時代の所産と判断される。

SH134 (図28)

調査区西側中央のBE23・BF23区画に位置する。平面は長軸3.3m、短軸3.2mのほぼ方形で、北東隅に1.3×0.8mの張り出しがある。現存壁高0.05~0.1mで、主軸はN58°Eである。床面は平坦で、中央やや北よりに焼土塊がある。主柱穴は確定できなかった。遺物は小破片の

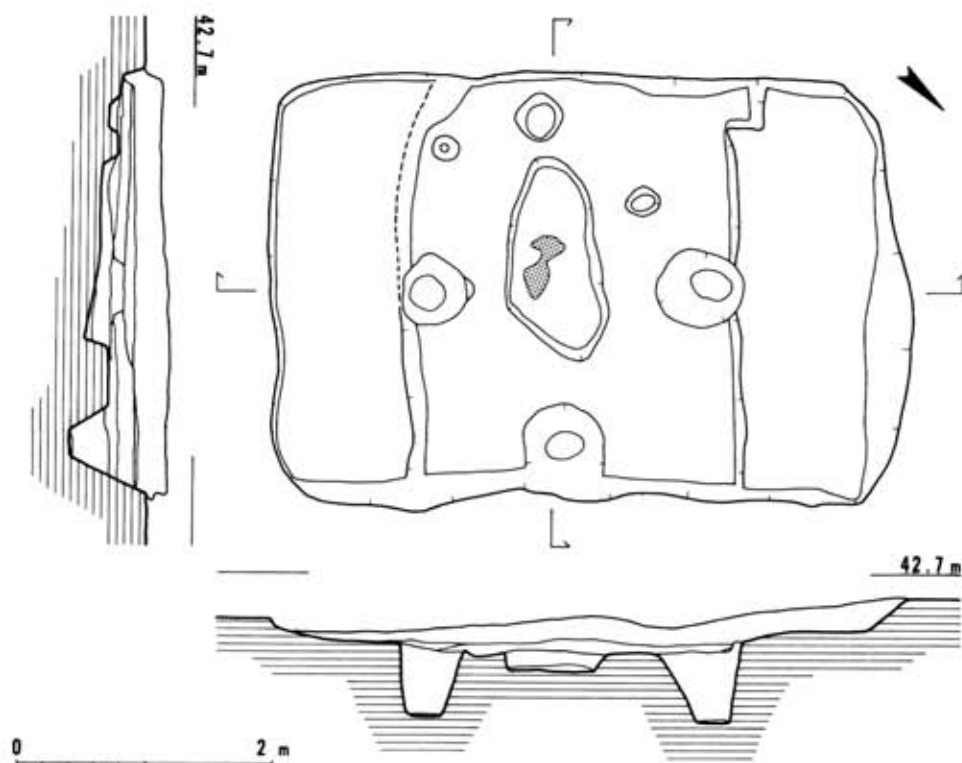


図24 SH132(1:60)

みで、弥生土器片、須恵器片、黒曜岩剥片が少量出土した。便宜的に弥生時代の節で説明したが、古墳時代の可能性がある。

SH135 (図29, 写真図版5-6)

調査区中央東よりのBE 2 1区画に位置する。SK155と重複しこれより新しい。平面は方形で、一辺4.2m、現存壁高0.08~0.2m、主軸はN82°Eである。西辺に貼り付けの屋内高床部があり、西壁から0.6mほど離れて帯状に残る。床面からの高さは0.15mである。西壁から0.6m東側を除く3辺に壁溝がある。中央部東よりに炉と思われる焼土を含む土坑がある。柱穴と思しき小穴が5~6箇所あるが、支柱穴は特定できなかった。遺物は弥生土器片、黒曜岩剥片が少量出土した。

94は中型の甕で、く字形に外反する口縁部から胴部上半にかけての破片である。

SH136 (図30, 写真図版5-7)

調査区中央南よりのBE 2 1・BE 2 2区画に位置する。平面は方形に近い長方形で、長軸5.2m、短軸4.7m、現存壁高0.05~0.1m、主軸はN14°Eである。南西端に貼り付けの屋内高床部があり、床面からの高さ0.05mである。支柱穴は長軸方向に2箇所、柱間は2.6mである。西辺から南辺西側にかけて壁溝が、東側の壁際中央に壁際土坑がある。遺物は埋土中から弥生

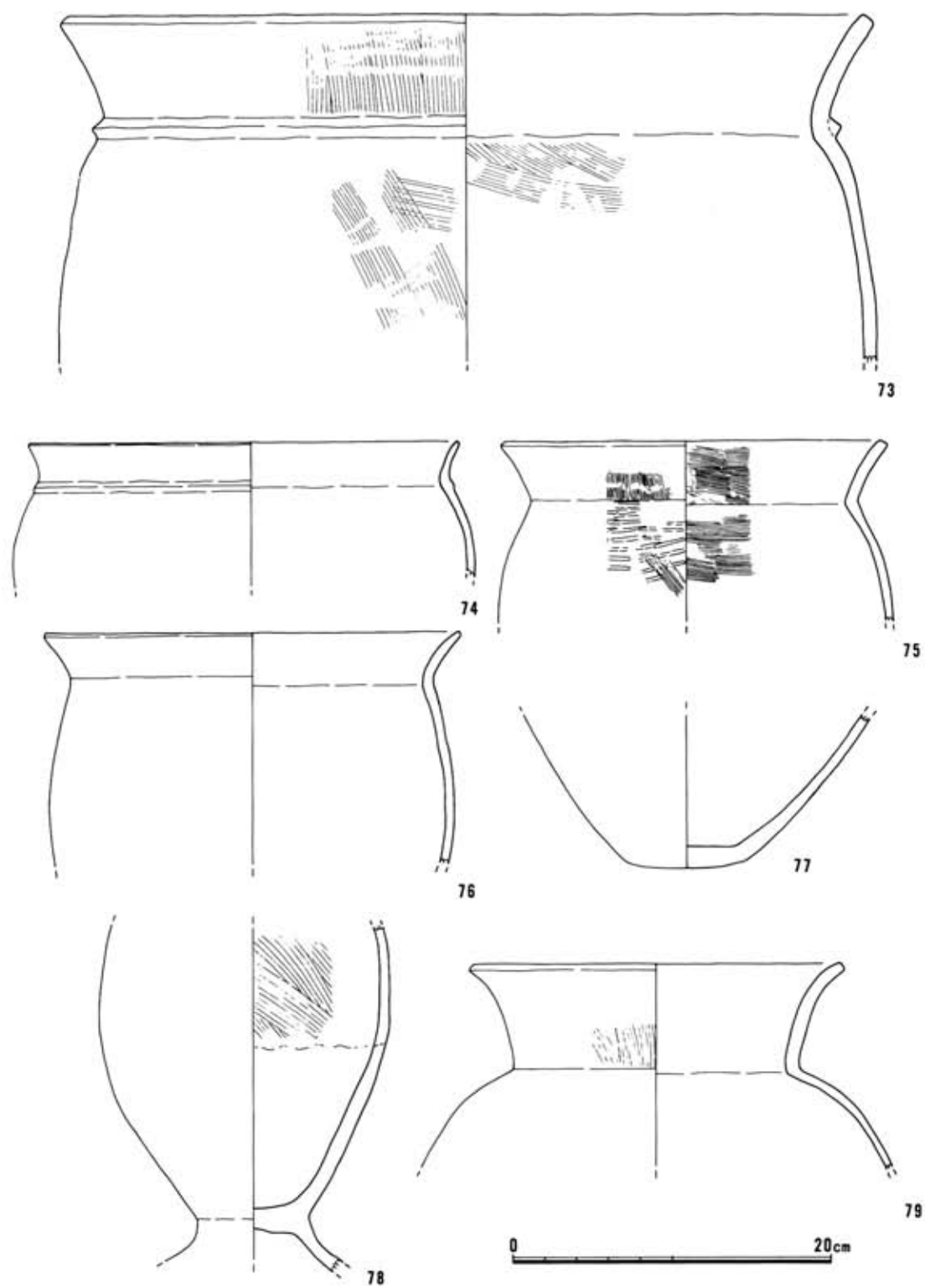


图25 SH132出土遺物 1 (1 : 4)

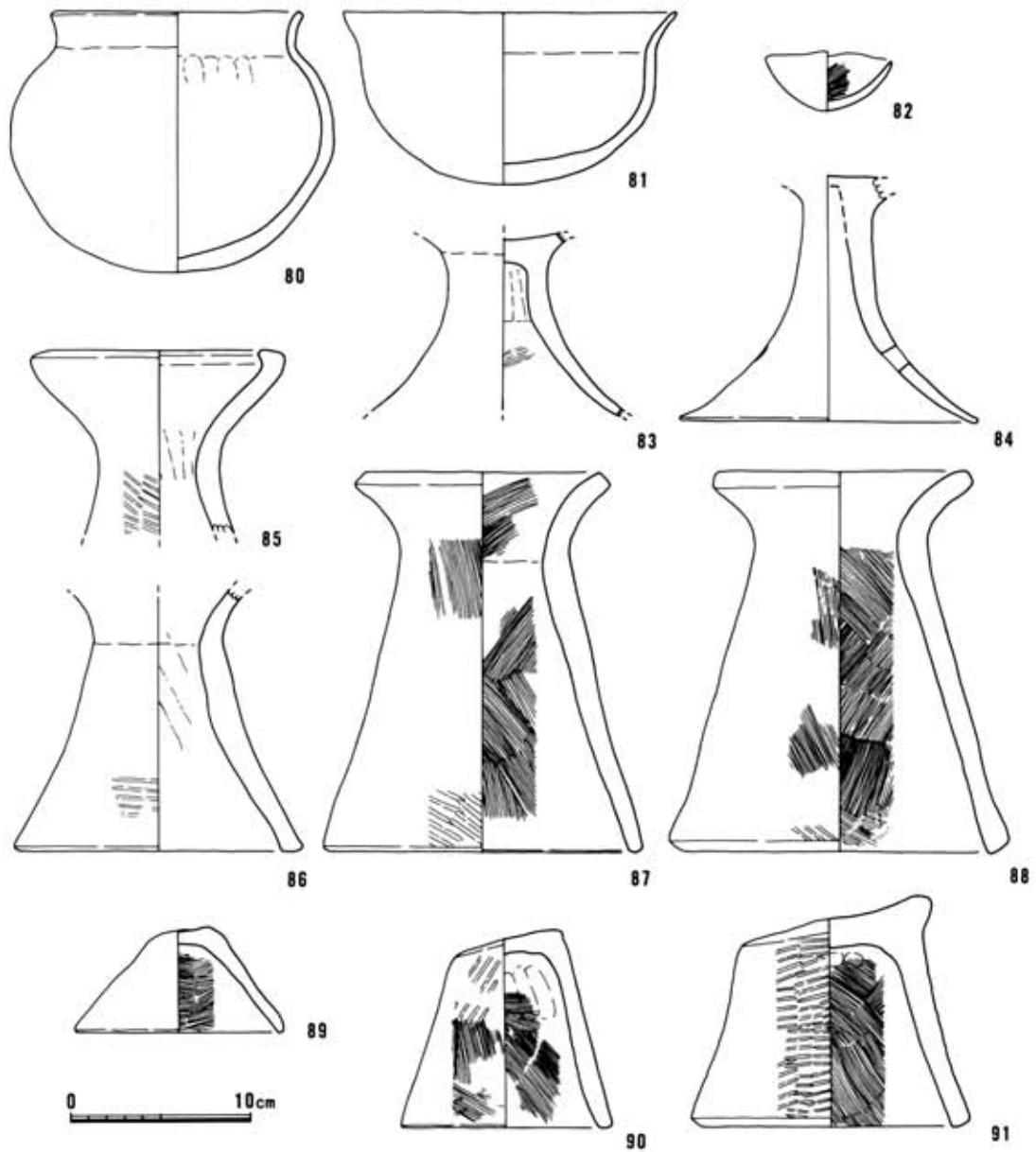


図26 SH132出土遺物2 (1:4)

土器の他、混入と思われる須恵器破片が出土した。

95は口縁部が直行する深みのある鉢、96は杏形支脚で底部を1/3程欠く以外はほぼ完形である。

SH137 (図31, 写真図版5-8)

調査区南側中央のBD22・BD23区画に位置する。SH161と一部重複し、これより新しい。平面は長方形で、長軸7.4m、短軸6.0m、現存壁高0.15~0.3m、主軸はN5°Eである。

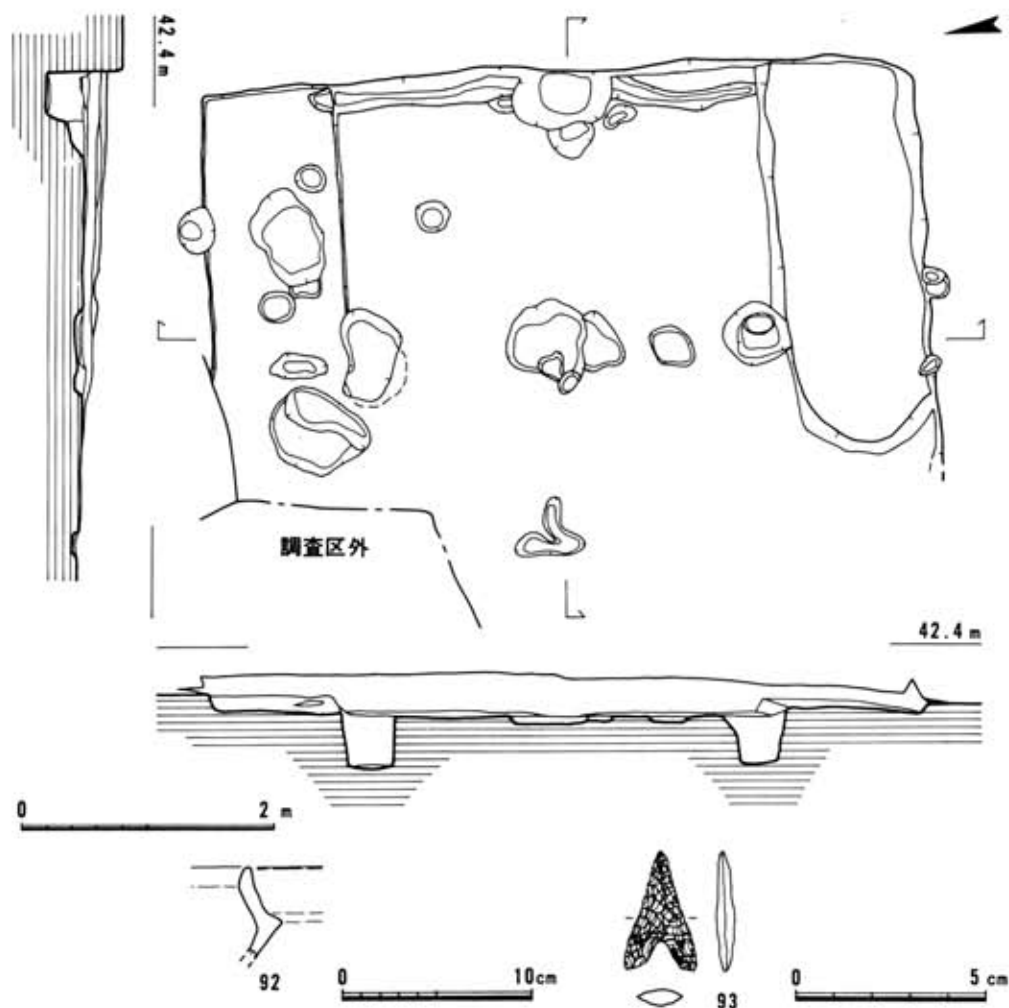


図27 SH133(1:60), 出土遺物(92は1:4, 93は1:2)

東側を除く3辺に削り出しの屋内高床部があり、床面からの高さ0.1~0.15mである。南側をのぞく3辺と北側の高床部とに壁溝が巡っている。支柱穴は4箇所、建物の主軸よりやや西に振れる。柱間は梁行2.1m、桁行2.9mである。中央部に炭化物を含む土坑がある。遺物は弥生土器、黒曜岩剥片が埋土中から少量出土した。

97・98はく字形に外反する甕の口縁部である。99は蓋としたが、遺存状態も悪く確実ではない。100はやや尖り気味の丸底の鉢で、南東隅の壁溝から出土した。

SH138 (図32, 写真図版6-1)

調査区東端のBD21・BE21区画に位置する。東側1/3程が削平のため全体の規模が明確でないが、径5.5m程の円形になると考えられる。現存壁高は0.15mである。支柱穴は6箇所、柱間は1.5~1.9mである。床面は東へゆるやかに傾斜している。遺物は埋土中より弥生土器、黒曜岩剥片が少量出土した。

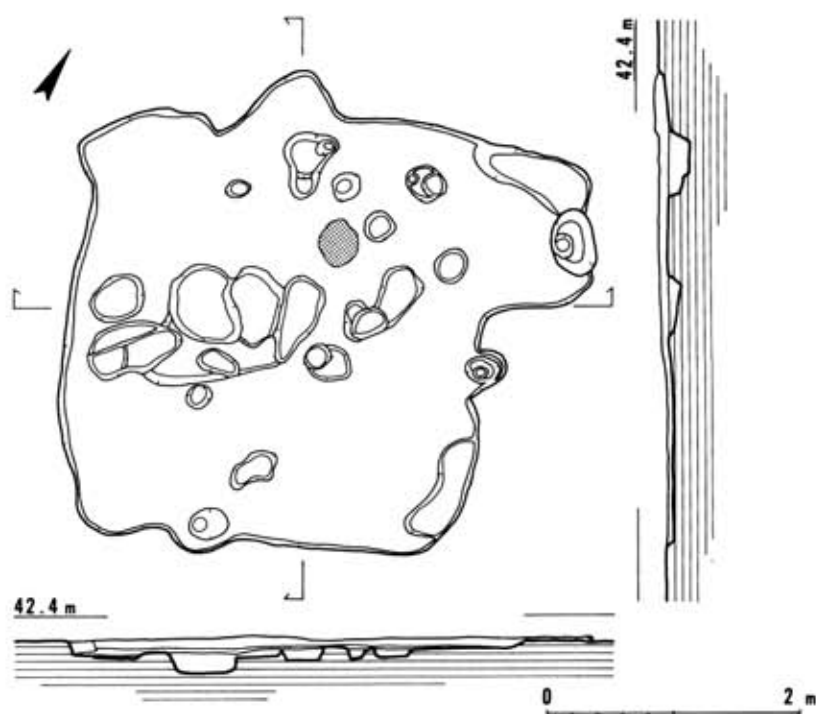


図28 SH134(1:60)

101は甕の底部で、支柱穴の一つから出土した。非常に厚みのある上底で、胴部下半から直線的にすぼまった後、強くくびれて台状を成す。

SH141 (図33)

調査区東端BE20区画に位置する。SH158・SH142と重複し、いずれよりも新しい。東側は崖落ちで削平されており、全体は不明である。長軸5m以上、短軸5.5m、現存壁高0.4m、主軸はN60°Eである。西辺と北辺に削り出しの屋内高床部があり、床面からの高さは0.15mである。支柱穴は1箇所確認され、削平された東側にもう1箇所あったものと推定される。南と北の壁際に土坑があり、南側の土坑から西辺屋内高床部に沿って北側の土坑まで溝が伸びている。中央には炉と見られる焼土を含む土坑がある。遺物は埋土中と北側土坑より弥生土器片、黒曜岩剥片が出土した。

102～104は甕で、102はやや内傾するL字形口縁、103は口縁端部がやや肥厚し肩が丸みを帯びる。104は僅かに上底気味の平底である。105は小型の甕ないし鉢で、口縁部と底部は直接接合しないため図上で復元した。106は高杯の脚部、107は内湾気味に立ち上がる鉢である。

SH142 (図34)

調査区東端中央のBE20区画に位置する。SH141と重複し、これより古い。崖落ちで大部分が削平されているため、全体の規模や形状は不明である。壁の立ち上がりは明瞭で、平面で

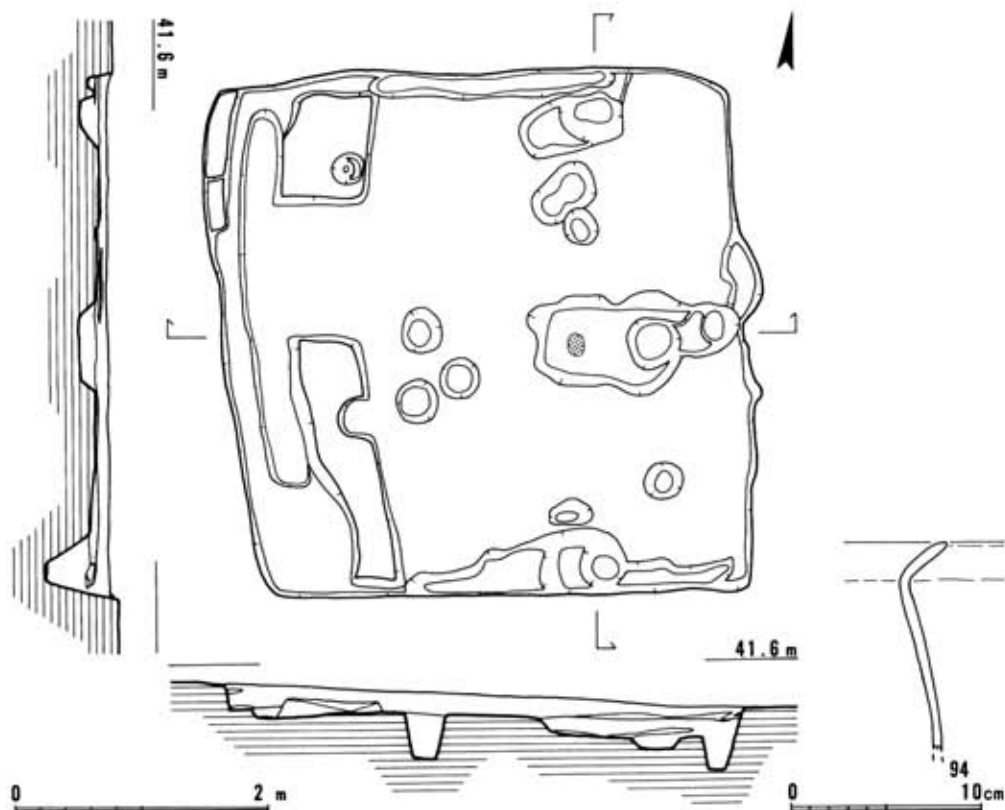


図29 SH135(1:60), 出土遺物(1:4)

は角の一つが認められることから、方形ないし長方形の堅穴建物と判断した。現存壁高0.2mである。深さ1.2m、径0.9mの小穴が1箇所あり、支柱穴と推定される。遺物は土器細片が少量出土したのみである。

SH154 (図35)

調査区西端南よりのBE23区画に位置する。西側が一部調査区外にかかる。調査段階では土坑として記録していたが、可能性を重視して堅穴建物と報告しておく。平面は長方形か方形と考えられるが、遺存状態が悪く明確には検出できなかった。現存壁高は残りの良い部分で0.2~0.3mである。2つの遺構が重複していることも考えられる。遺物は弥生土器片、黒曜岩剥片が埋土中より少量出土した。

108はL字形口縁の中型甕、109・110は小型の甕ないし鉢である。111は平底の、112は厚みのある上底の甕の底部、113は壺の底部である。

SH157 (図36)

調査区西端中央のBG23・24区画に位置する。SH124と重複しこれより古い。調査区外にかかるため全体は明らかでないが、平面は径7m程の円形と推定される。現存壁高0.2mで、

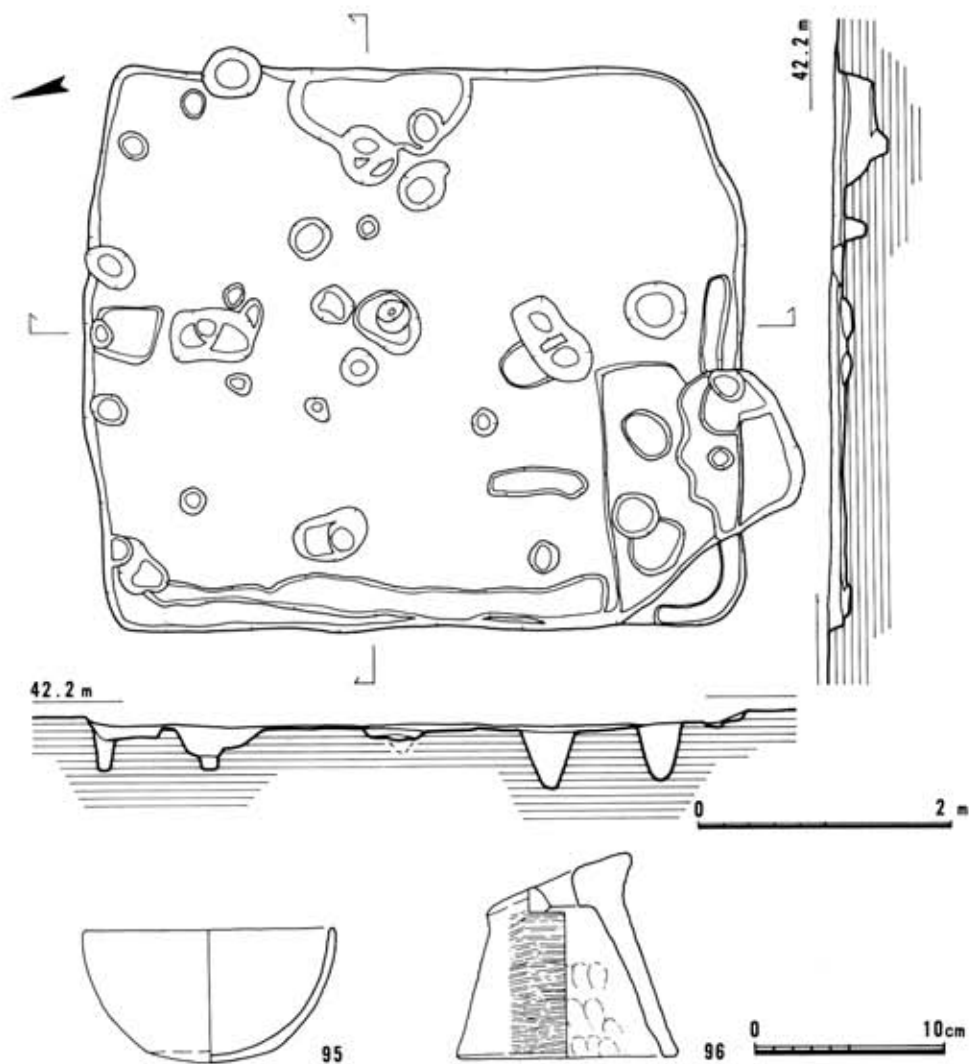


図30 SH136(1:60), 出土遺物(1:4)

確認された範囲には壁溝が巡る。主柱穴らしきものは1箇所のみ確認し、中心部と思われる土坑をSH124の北側高床部で検出した。遺物は弥生土器小破片が少量出土しただけである。

SH158 (図37)

調査区東端のBE20・BF20区画に位置する。SH141と重複しこれより古い。北東側が調査区外にかかる。検出されたのが一部のため全体の規模や形状は明確でないが、平面は円形で、径5m程と考えられる。現存壁高0.2mで、主柱穴などは確認できなかった。遺物は埋土中より弥生土器小破片が数点出土したのみである。

114は口縁部が短く外反する鉢と思われる破片で、摩耗が著しく本遺構の時期を示すものであるかどうか不確定である。

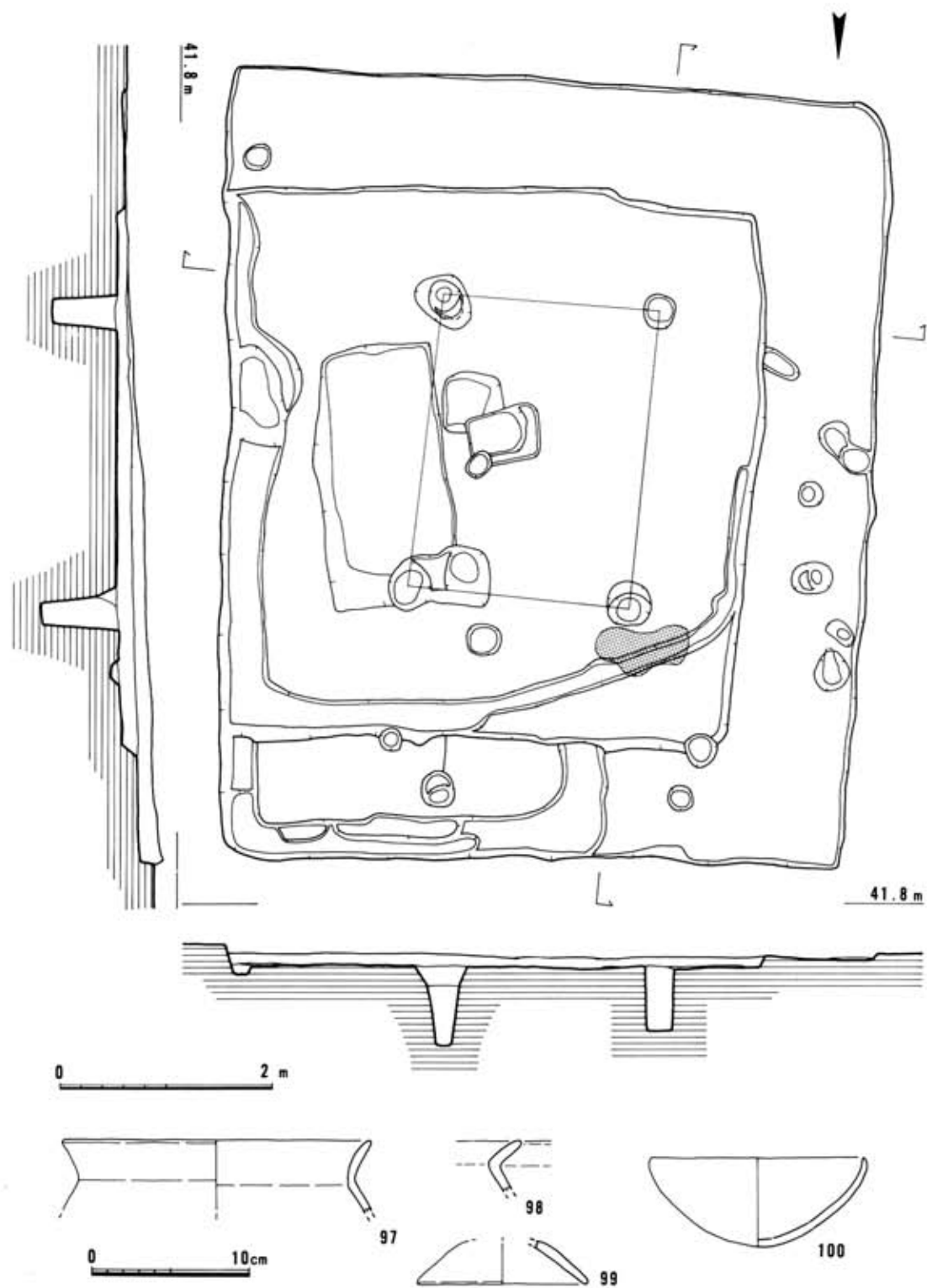


图31 SH137(1:60), 出土遗物(1:4)

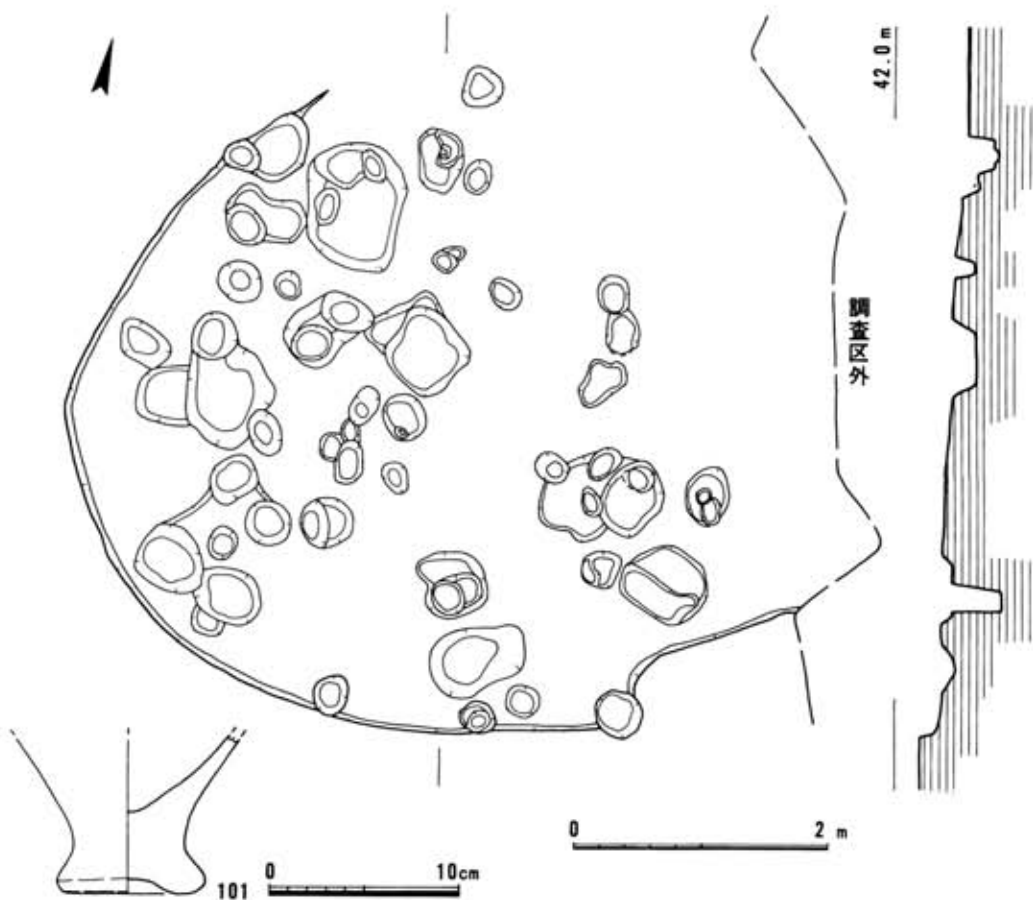


図32 SH138(1:60), 出土遺物(1:4)

SH161 (図38)

調査区西南のBD 2 3区画に位置する。周辺の遺構との関係では、SH169・SK159より新しく、SH137より古い。平面は長方形で、主軸はN10°E、長軸7.0m、短軸4.6m、現存壁高0.3~0.5mである。南北2辺に削り出しの屋内高床部があり、床面からの高さ0.15mである。西南部分1/4程は攪乱をうけ破壊されている。支柱穴は3箇所確認し、削平された部分にもう1箇所想定して4本柱構造と考える。柱間は梁行2.9m、桁行3.3mである。東壁際中央に深さ0.4mの壁際土坑があり、ここから北側高床部と床面との境にかけて壁溝が認められる。遺物は埋土中から弥生土器が少量出土した。

115・116はく字形を成す甕の口縁部、117は高杯の脚部である。

SH162 (図39)

調査区中央南よりのBE 2 2区画に位置する。平面は長方形で、主軸はN89°W、長軸7.5m、短軸は西側で4.0m、東側で4.5mと西側が少し狭い。現存壁高0.1mである。西端でSD172と、

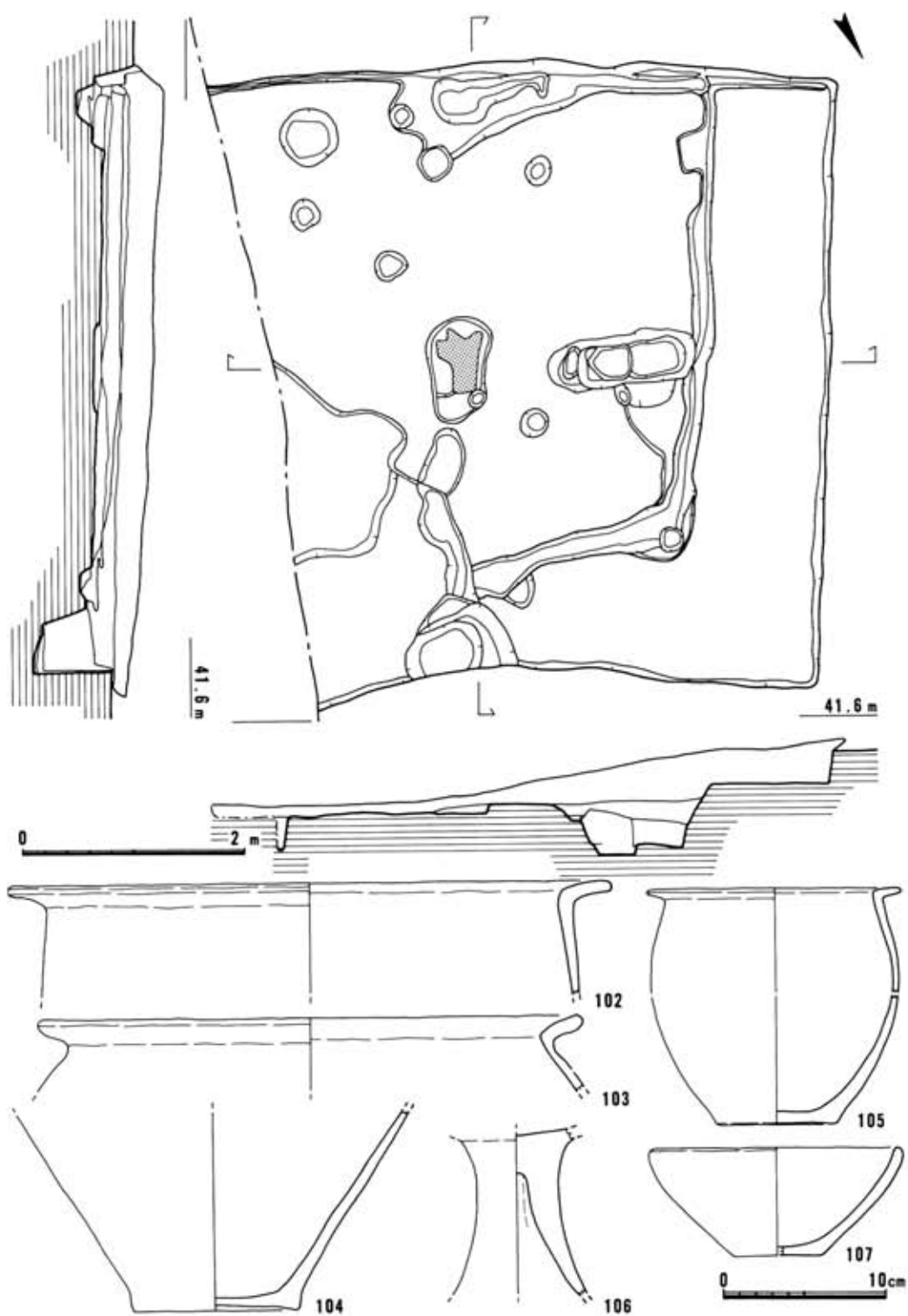


图33 SH141(1:60), 出土遗物(1:4)

東南隅でSH136と重複し、いずれよりも古い。東側に幅0.2~0.4mの高床部が帯状にあり、床面からの高さ0.1mである。支柱穴は4箇所、柱間は梁行1.9m、桁行1.7~2.1mである。炉とみられる土坑が東西に2箇所並び、どちらも焼土を伴うことなどから、住居の拡張も考えられる。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

118は断面コ字形の甕の口縁部、119は甕の底部で上底である。

SH164 (図40)

調査区南よりのBD21・BD22区画に位置する。SH165と重複しこれより古い。南側は削平をうけ遺存しない。平面は長方形で、主軸はN10°E、長軸5.5m以上、短軸4.8m、現存壁高0.2mである。北辺と西辺に屋内高床部が残っており、床面からの高さ0.2mである。東側を除く

3辺に削り出しの屋内高床部があったのであろう。比較的遺存状態の良い北側には壁溝が確認できる。中央に焼土を伴う土坑があり、炉と考えられる。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は3.0mである。遺物は弥生土器が埋土中より少量出土した。

120はく字形の甕の口縁部、121は台付鉢の脚部、122は高杯の脚部と思われる。

SH165 (図版41, 写真図版6-2)

調査区東端南よりのBC21・BD21区画に位置する。SH164と重複しこれより古い。東側が一部調査区外にかかり全体の規模は明確ではないが、長軸5.0m、短軸3.8m以上の長方形と考えられる。現存壁高は0.3m、主軸はN20°Eである。屋内高床部が北辺と南西角にあり、床面からの高さ0.12mである。南西角に壁溝が、中央に炭化物を含む土坑が、西壁際中央に深さ0.15mの壁際土坑がある。支柱穴は長軸に2箇所、柱間は2.5mである。遺物は埋土中及び床面から弥生土器、黒曜岩剥片が少量出土した。

125はく字形を成す甕の口縁部である。

SH169 (図42)

調査区西端南よりのBD23区画に位置する。SH161・SK159と重複し、SH161より古い。検出段階ではSK159の方が新しいと判断したが、出土遺物の検討の結果、逆の場合も考えられる。出土遺物が乏しく新旧関係の確定は慎重を要する。西側が調査区外にかかるため全体の規模や形状はつかめなかったが、遺構の残存状況から平面は長方形ないし方形と考えられる。現

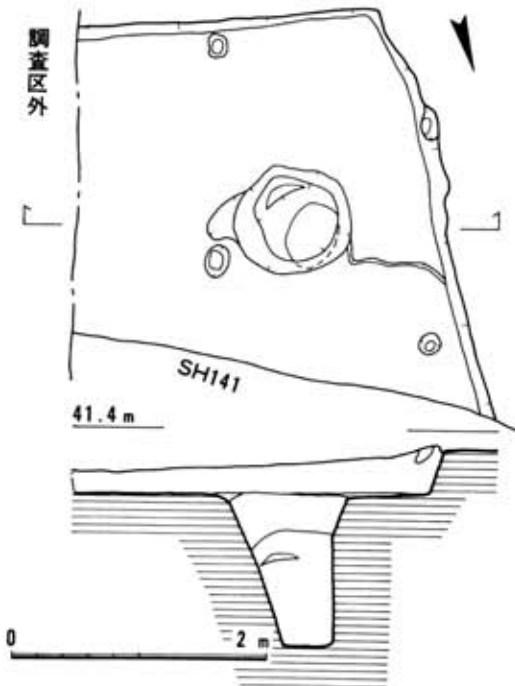


図34 SH142(1:60)

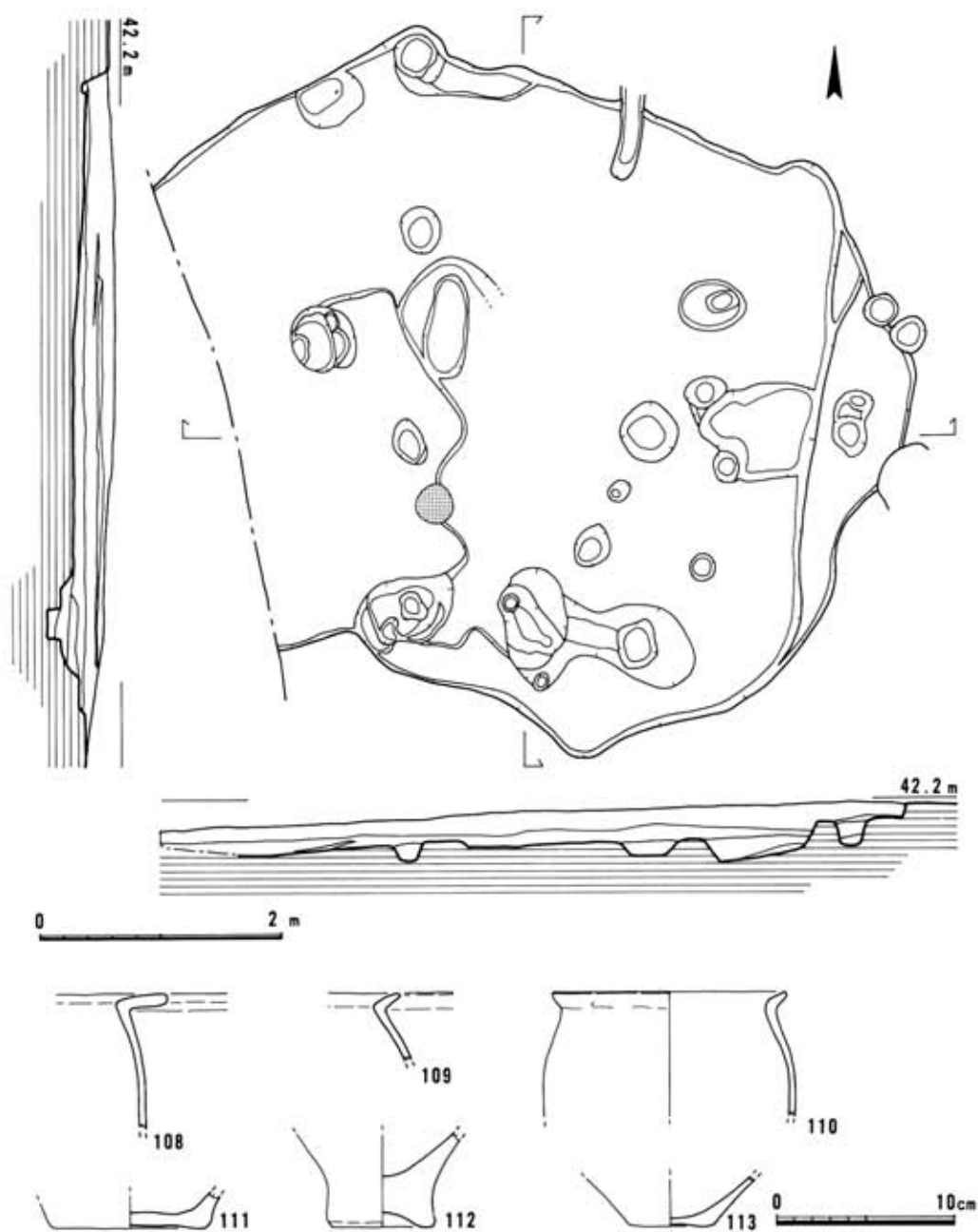


図35 SH154(1:60), 出土遺物(1:4)

存壁高は0.3mである。東辺に深さ0.2mの土坑がある他は小穴が3箇所確認されたのみで、支柱穴は特定できなかった。遺物は弥生土器の小破片が少量出土しただけである。

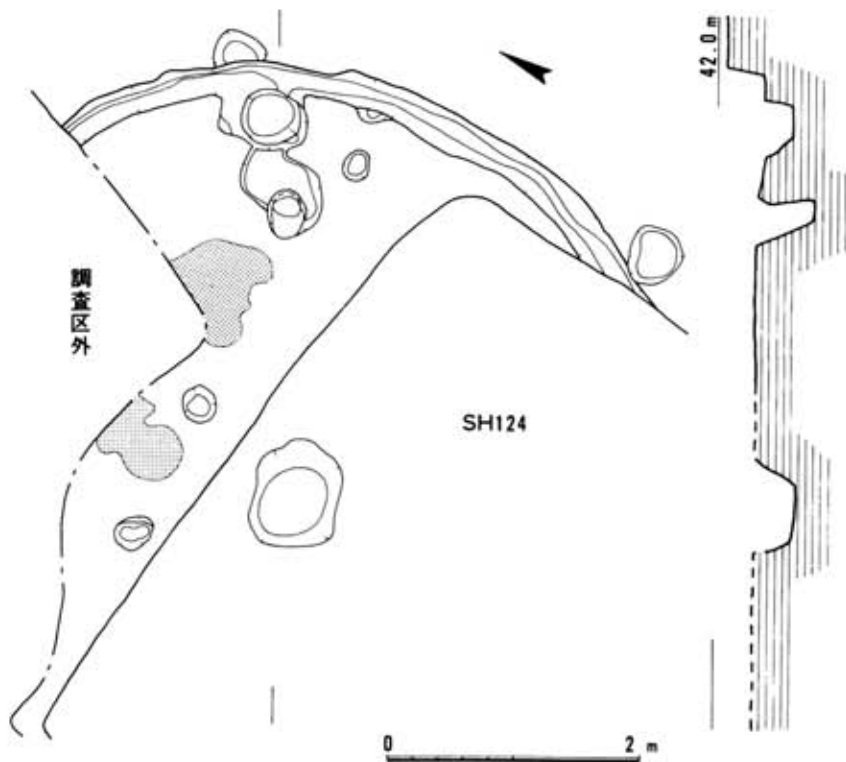


図36 SH157(1 : 60)

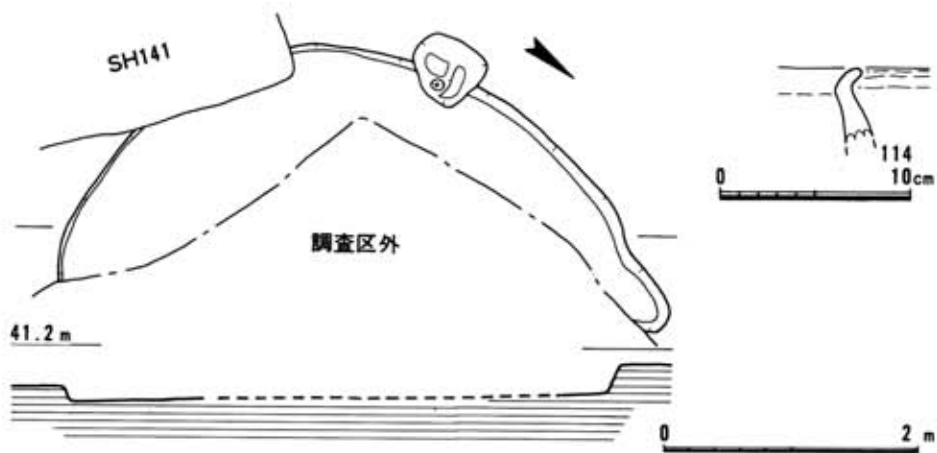


図37 SH158(1 : 60), 出土遺物(1 : 4)

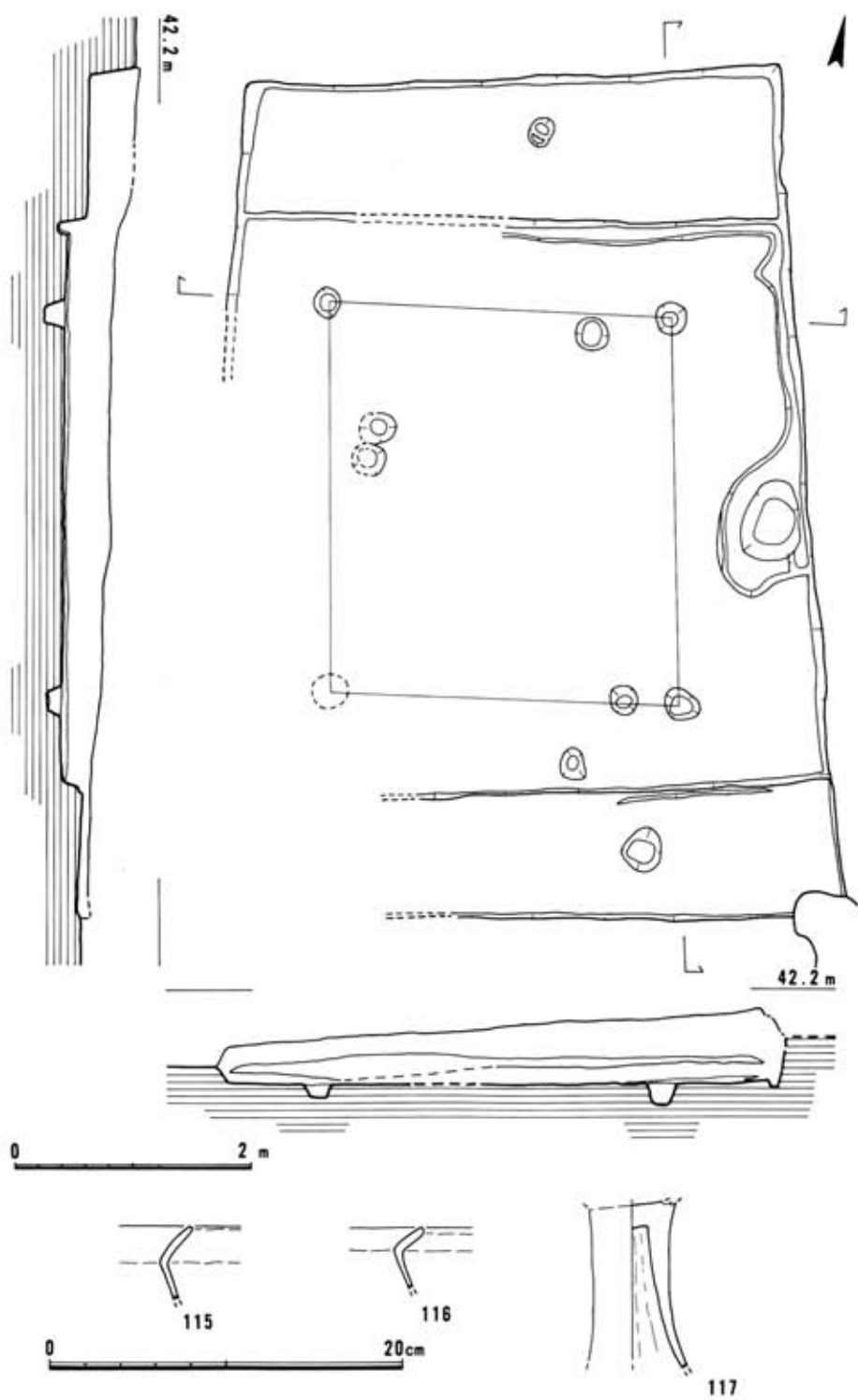


图38 SH161(1:60), 出土遗物(1:4)

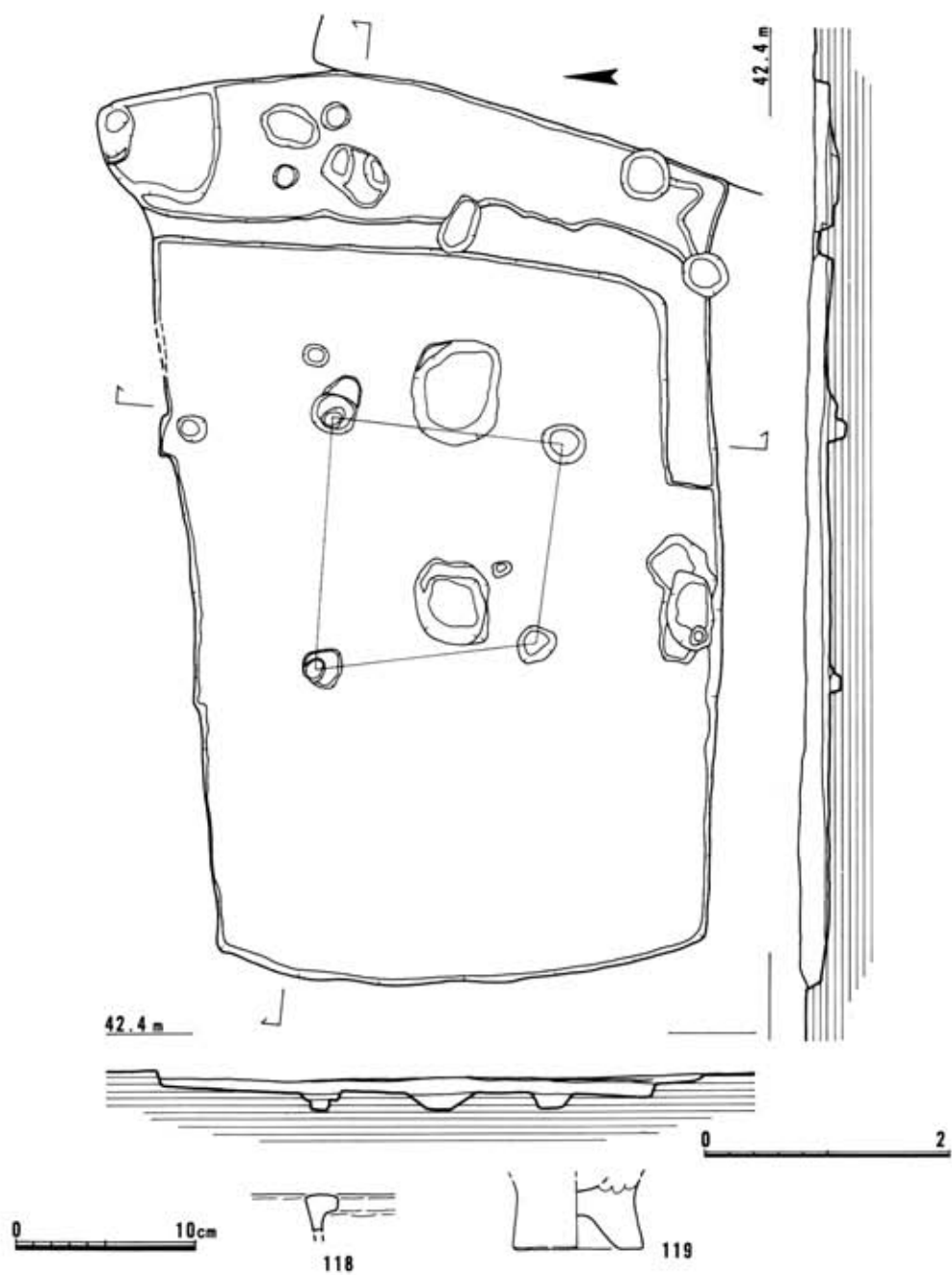


図39 SH162(1 : 60), 出土遺物(1 : 4)

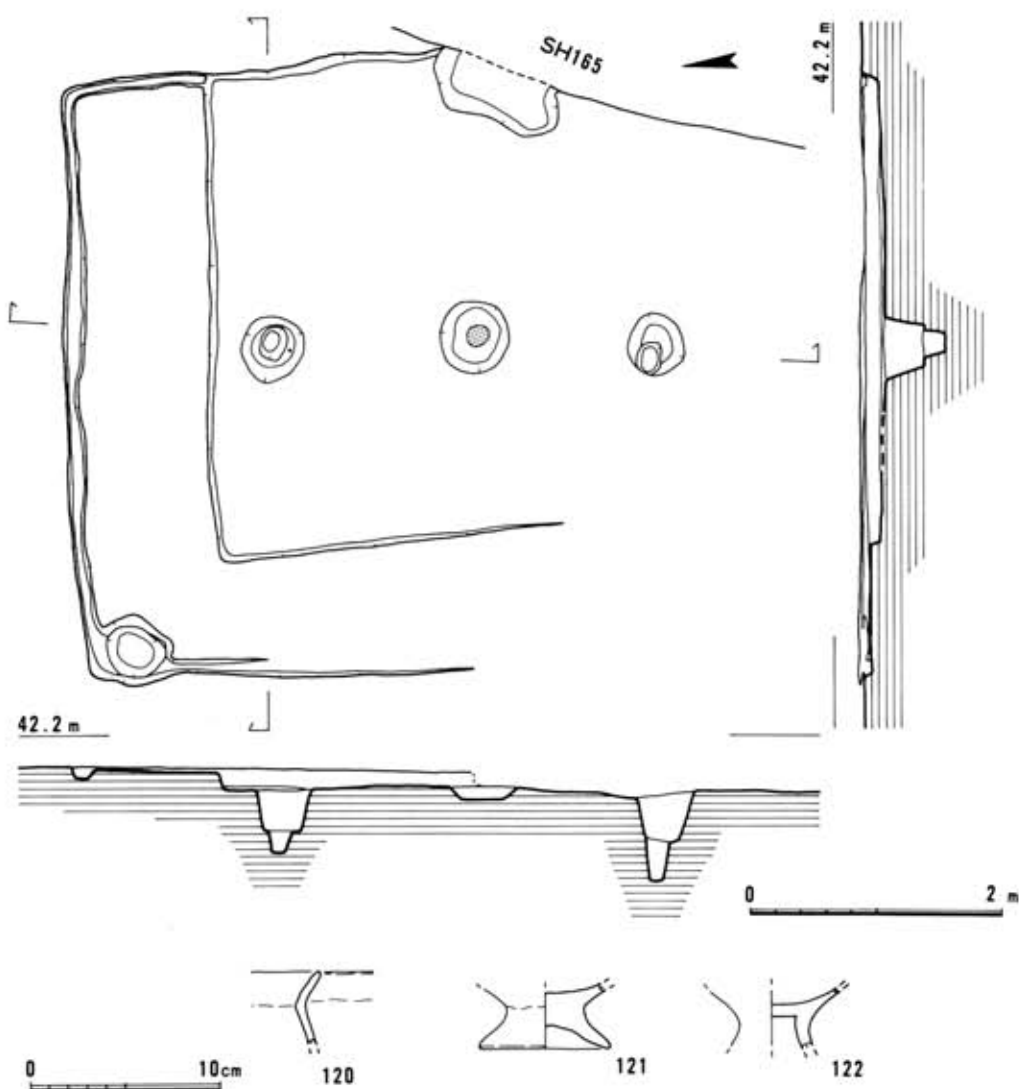


図40 SH164(1:60), 出土遺物(1:4)

SH171 (図43~45, 写真図版6-3)

調査区はほぼ中央のBF21・BF22・BG21・BG22区画に位置する。本遺構は遺存状態の悪さから検出段階では竖穴建物と認識できておらず、小穴の密集部として掘り下げ、遺物の出土したもののみに小穴の番号を付していたが、配置図の作成段階において大型の竖穴建物であることを確認したものである。南側部分の壁がわずかに残存するのみで全体の形状、規模などの細部については不明瞭であるが、平面は径9~10m程の円形と考えられる。現存壁高0.05~0.1mで、中央に長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.6m程の長円形の土坑がある。柱穴と思われる小穴が密集し、建て替えや拡張が行われたことを想定させるが、検討が不十分で支柱穴

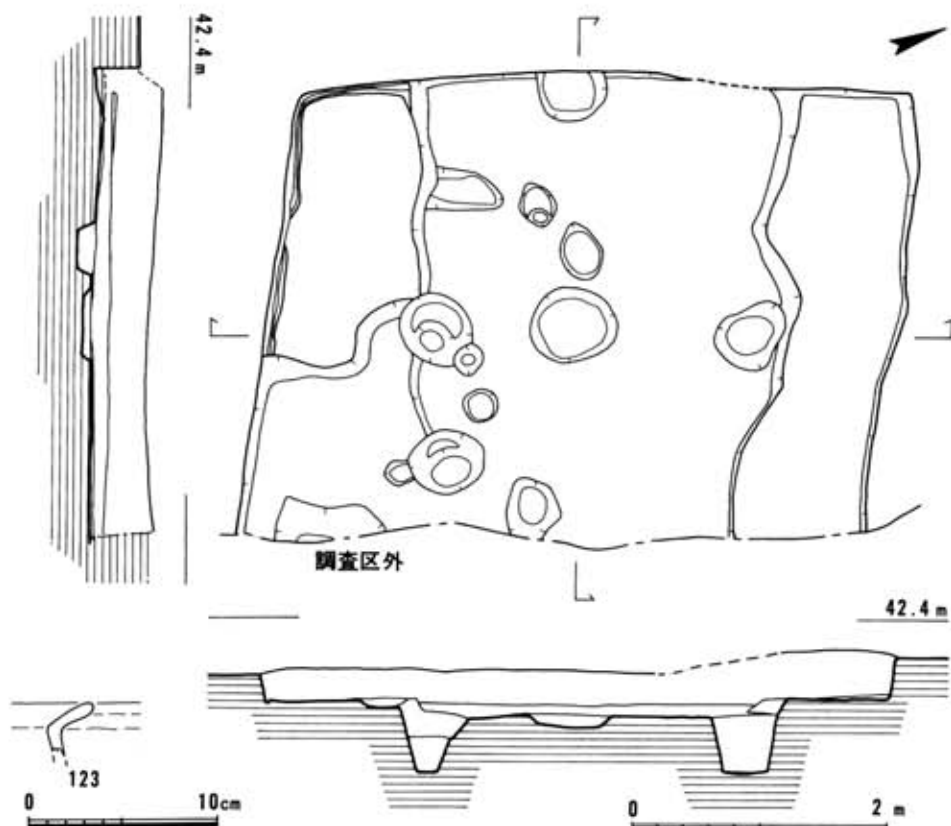


図41 SH165(1:60), 出土遺物(1:4)

の位置や数さえ明確には捉えきれていない。遺物は小穴中から弥生土器、青銅器鑄型片、石斧類、石製穂摘具、黒曜岩剥片、土製紡錘車が出土した。

141はP-98から出土した青銅器の鑄型片と思われる資料である。図の表面と裏面に炭素の付着によるかと思われる黒化が観察され、表面側が裏面側より顕著である。両面鑄型と考えられるが、小破片で、図の側面側が砥石として転用されていることもあり、鑄造された製品は特定できない。石材は鑑定のお機を得ていないが、平原遺跡3区出土の細形銅戈鑄型や安永田遺跡の鑄型に使用された石英長石斑岩と類似しており、同一石材の可能性が高い。

124~135は中型甕の口縁部で、ほとんどが小破片であり、124のみが器形を知り得る程度の破片である。124はP-197出土で、口縁部がやや発達した形態で、胴部の張りは弱い。125・126はP-82出土で、口縁部は断面三角形である。125は摩耗のため不確実ながら、刻目らしき痕跡が観察される。127~129はP-98出土で鑄型共伴、130はP-125出土、131はP-140出土、132はP-162出土、133~135はP-128出土で、いずれも断面三角形の特徴を持つ。P-87出土の136とP-137出土の137は甕の底部で、どちらも厚みのある上底である。138は僅かに上底気味の壺ないし鉢の底部で、P-126出土である。139はP-141出土の小型の鉢で、ほぼ完存である。

140は蓋のつまみ部で、P-95出土。

142・143はいわゆる大型蛤刃石斧で、どちらも刃部を欠損する。142はP-130、143はP-138出土である。144は抉入片刃石斧の体部破片と思われ、P-96出土である。145・146は小型柱状片刃石斧である。145はほぼ完存でP-164出土、146はP-85出土で、基部側の一部と刃部を僅かに欠損し、研ぎ直しのためか非常に短い。147は完形の小型偏平片刃石斧で、P-211出土である。148はP-96出土の石製穂摘具で、1/3程の破片である。背部は直線的、刃部は外湾する両刃である。P-98出土の149と接合する。以上の石材はいずれも鑑定を受けていないが、142～144は玄武岩、145～149は泥岩であろう。150はP-115出土の土製紡錘車である。

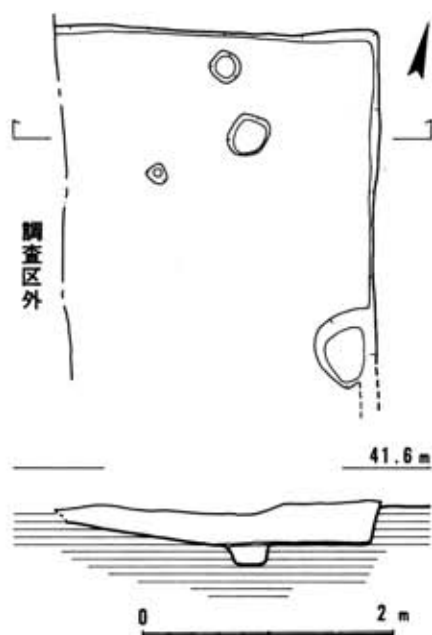


図42 SH169(1:60)

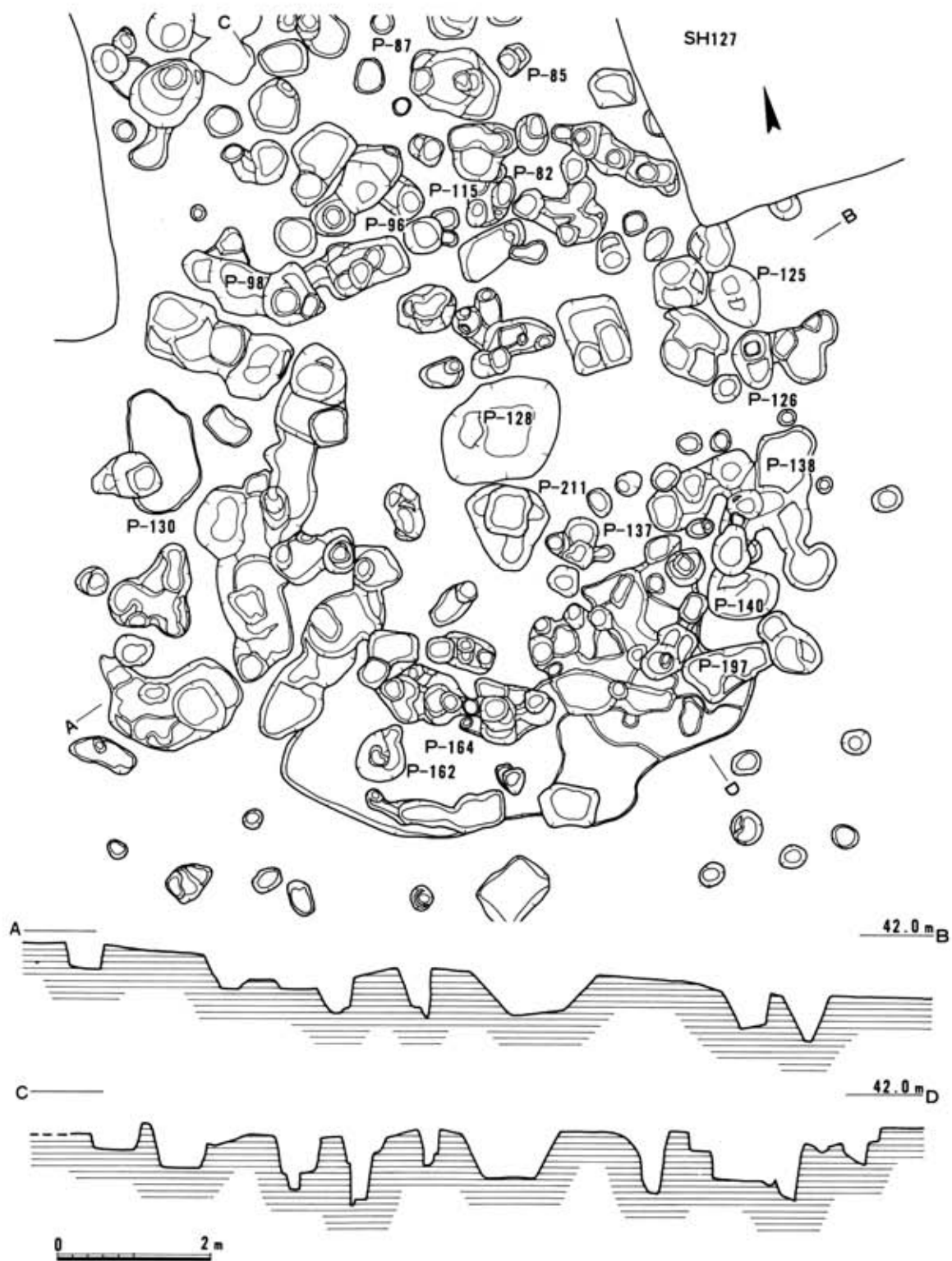


图43 SH171(1 : 80)

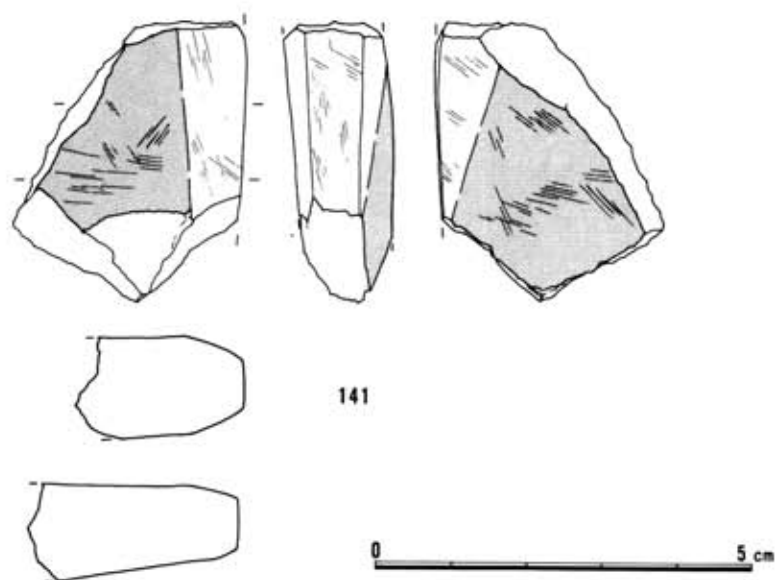
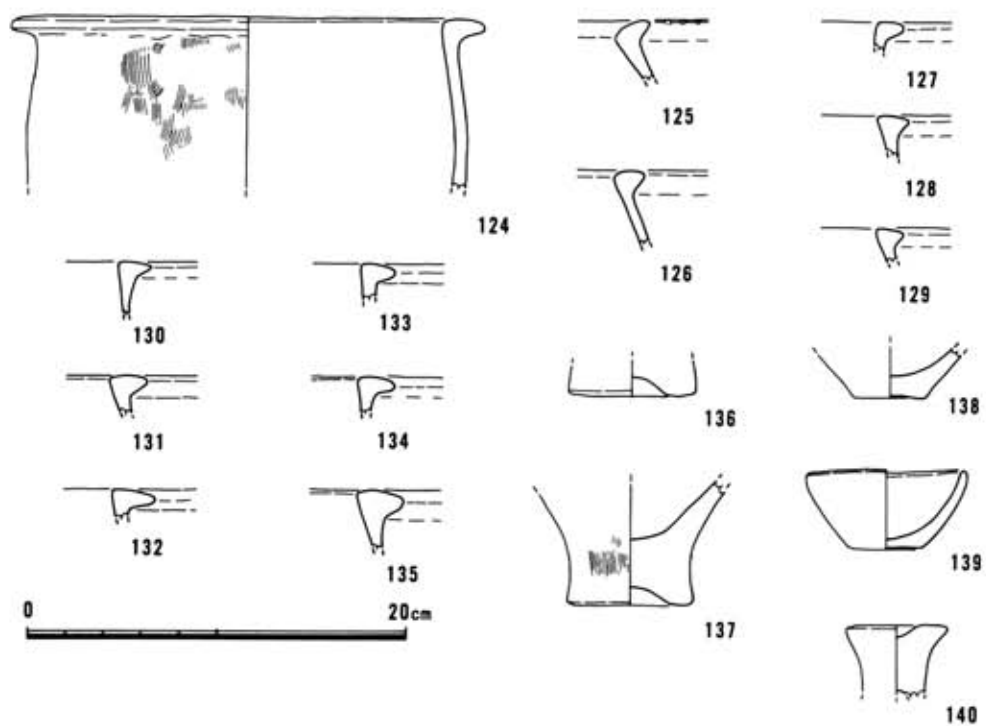


図44 SH171出土遺物 1 (124~140は 1 : 4, 141は 1 : 1)

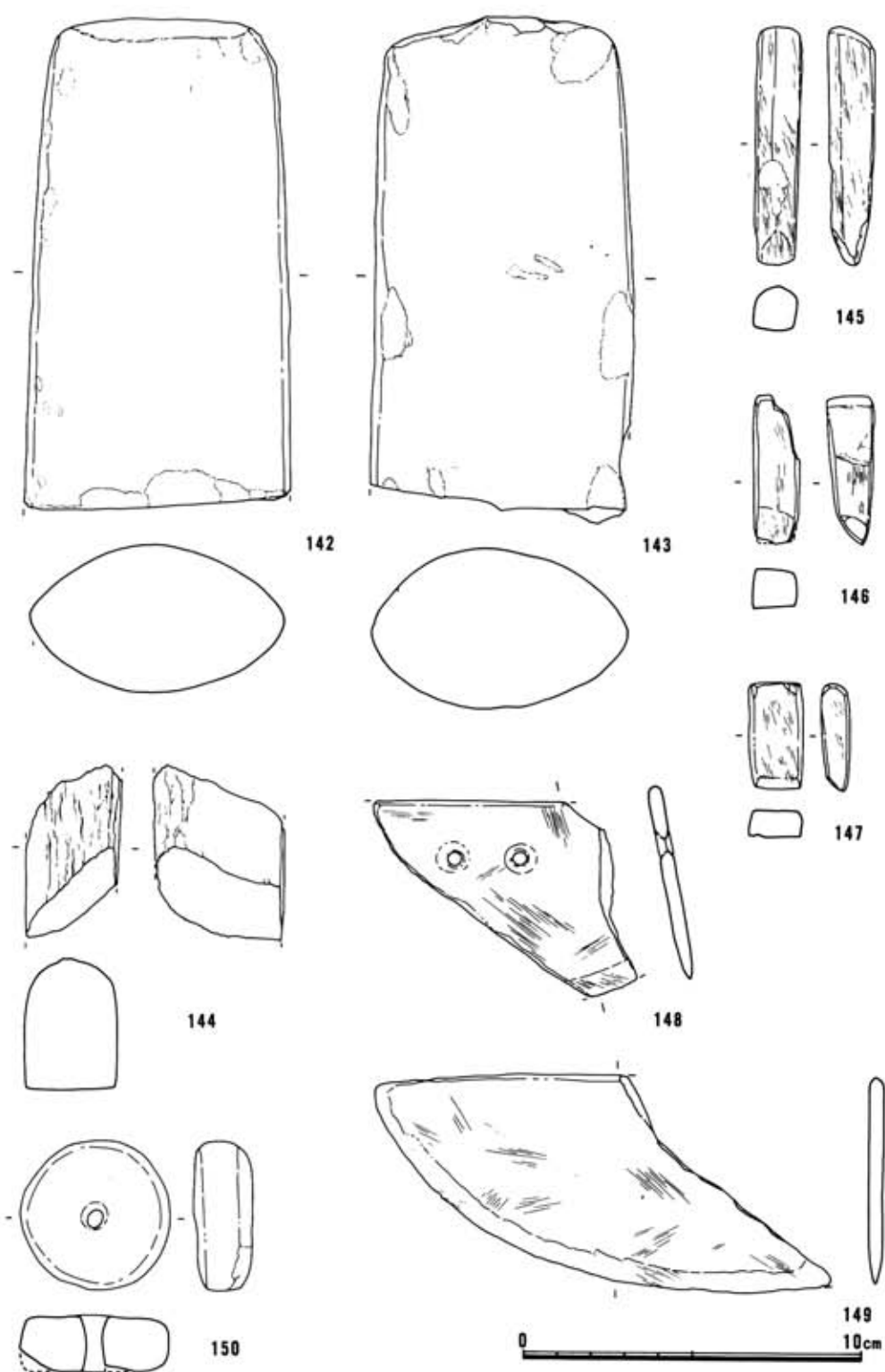


图45 SH171出土遺物2(1:2)

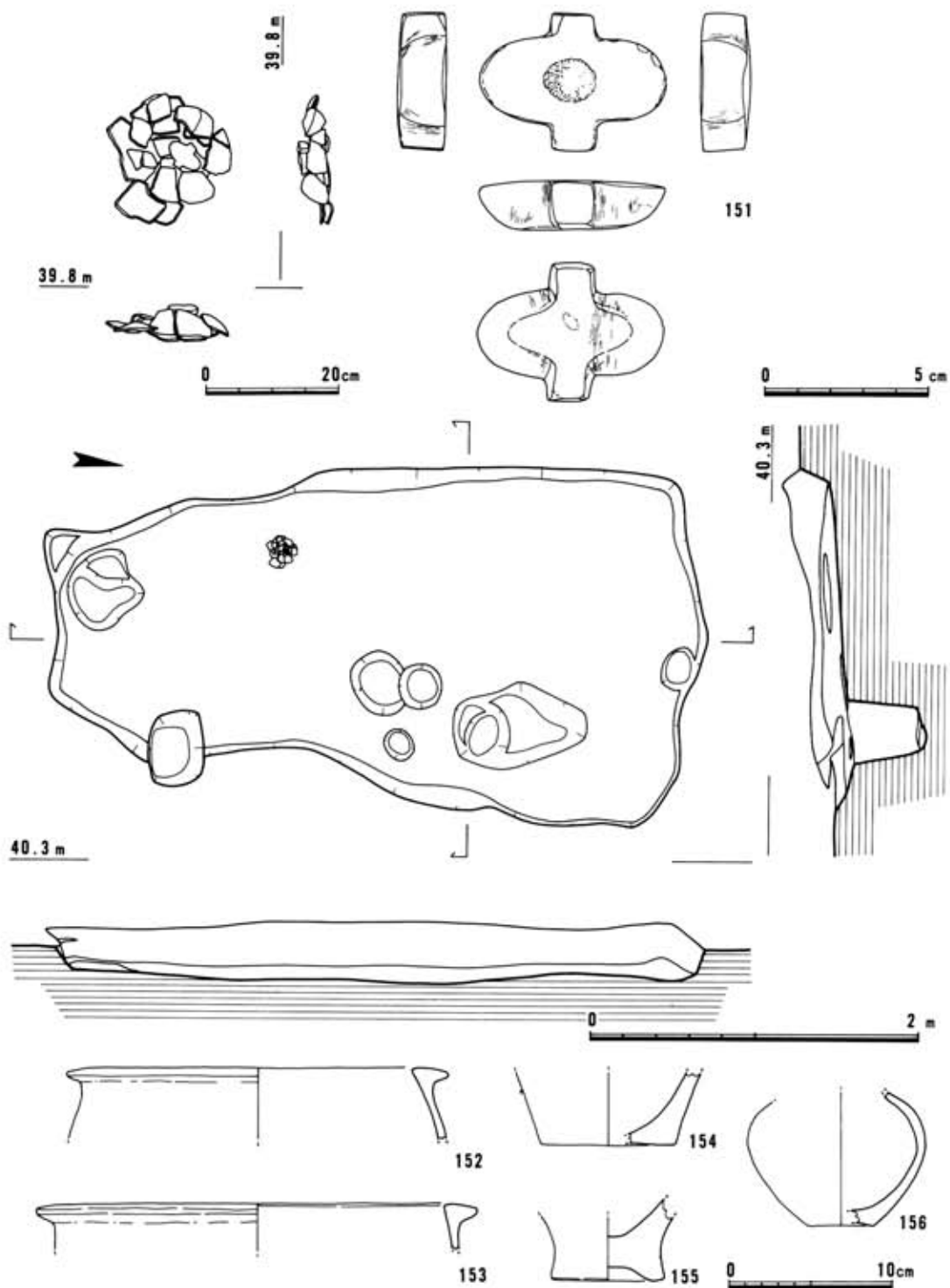


图46 SK103(1 : 40), 把頭飾出土狀況(1 : 10), 把頭飾(1 : 2), 出土土器(1 : 4)

(2) 土坑

SK103 (図46, 写真図版6-5)

調査区北東隅のB I 1 9区画に位置する。長軸4.0m、短軸1.1~2.2m、深さ0.3mの南北に長い不整形であるが、現地形が東に向かってややきつく下がる傾斜を示し、西辺は直線的で壁の立ち上がりが明瞭であることからすると、本来は隅丸の方形ないし長方形といった規格的な平面形態をとるものであった可能性もある。底面は東に向かって少し傾斜するものの比較的平坦で、数箇所に小穴がある。遺物は埋土中より弥生土器、黒曜岩剥片が出土した他、底面からはやや浮いた位置で小型の壺1個体と共に石製剣把頭飾が出土した。出土状態をやや子細に述べると、小型の壺は口縁部を欠き正位置で上から押し潰されたような感じで十数の破片となって1個体分まとまっており、剣把頭飾は平坦面を上にして土器片群の上部ほぼ中央にあった。このような状況から、調査時の所見としては、壺のなかに収められていたかどうかは不明であ

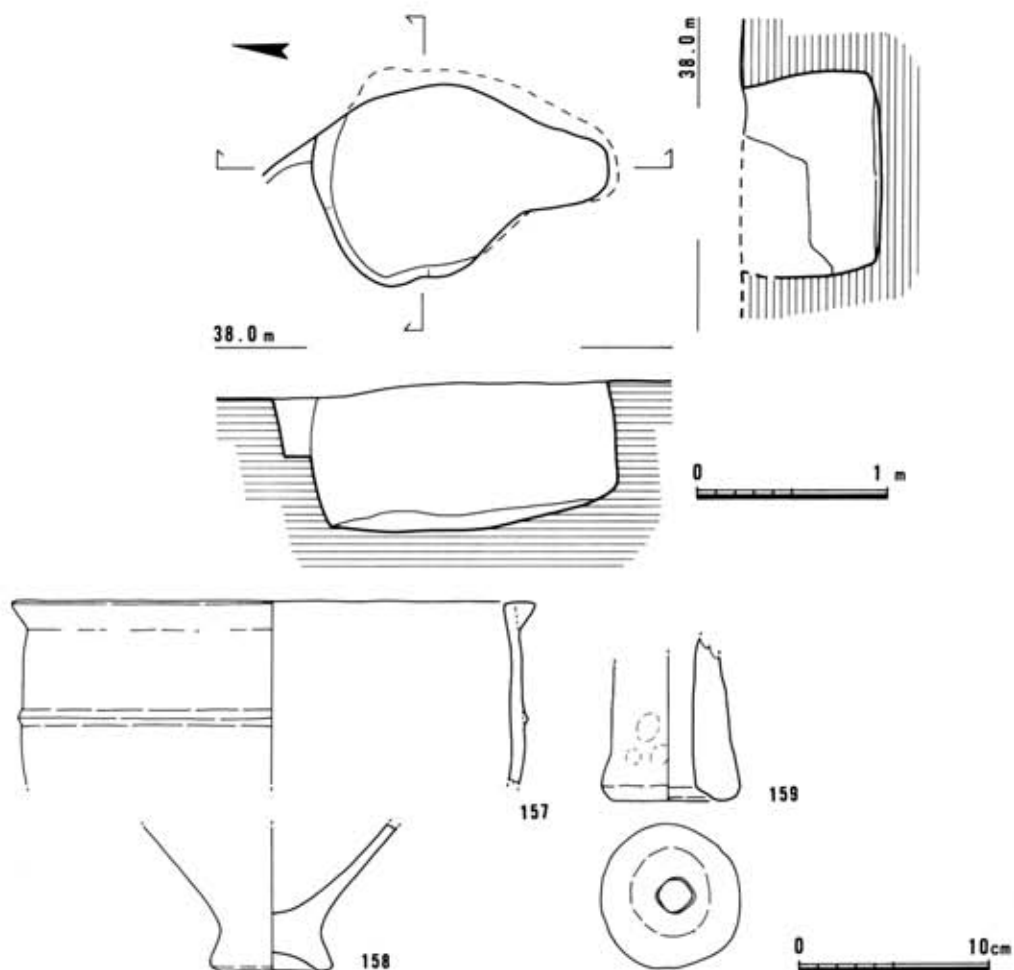


図47 SK104(1:40), 出土遺物(1:4)

るが、両者は同時に遺棄されたものと判断した。

151は十字形の石製剣把頭飾である。泥岩製で全面が丁寧に磨かれており、調査時の傷以外は完存である。把とのあたりを良くするためであろうか、上部の平坦面中央を研磨後に敲打によって僅かにくぼませている。また底面側の突出部両脇には、研磨による線状痕とは感じの異なる、長軸に直交する擦痕が観察され、着柄時の緊縛痕の可能性が有る。152・153は甕の口縁部で、断面はやや発達した三角形を示す。154は平底の、155は上底の甕の底部である。156は剣把頭飾と共伴した小型の壺である。底部は僅かに上底をなし、やや肩の張る器形で、口縁部の形態は欠損により不明である。器面は摩耗が著しく調整は明らかでないが、内外面とも丁寧なナデないシミガキのようである。

SK104 (図47, 写真図版6-6)

調査区北東隅のB I 1 9区画に位置し、SK103に近接する。平面は長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形で、深さ0.7mである。底面は平坦で、壁は上方へ迫り出しながら立ち上がり、特に東壁から南壁にかけて顕著である。西側は別の小穴と重複し遺存状態が悪く、断面は復元して図示した。いわゆる袋状土坑であり、1区ではこれ1基のみであった。遺物は弥生土器、黒曜岩剥片が埋土中から出土し、底面には白色の粘土塊が認められた。

157は甕の口縁部で、口縁部には上面が平坦な断面三角形の突帯を、胴部上位には小さめの突帯を巡らせる。158は厚手で上底の甕の底部である。159は支脚と思われ、中空部分は断面方形である。

SK105 (図48)

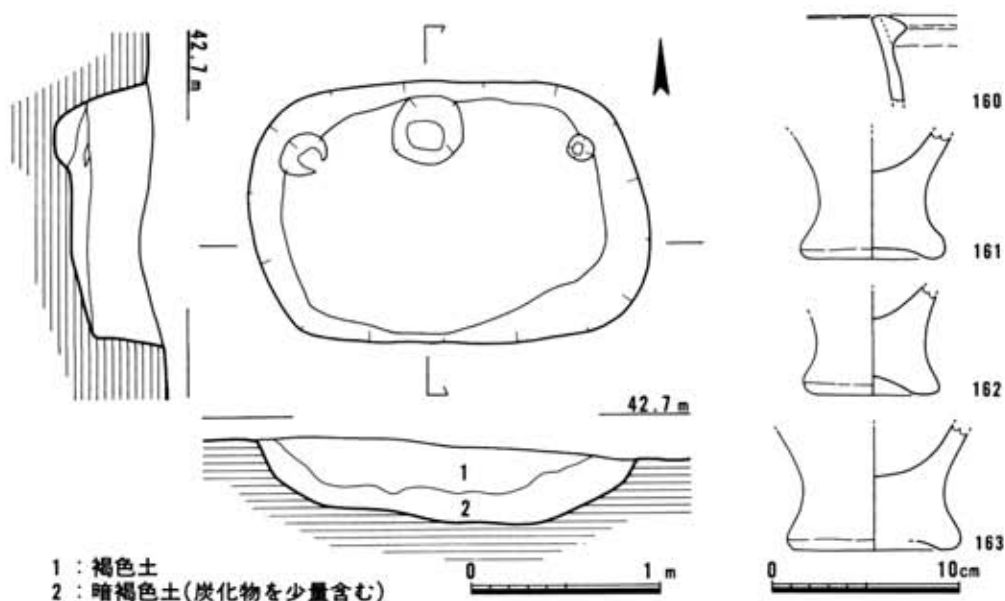


図48 SK105(1:40), 出土遺物(1:4)

調査区北東のBH20区画に位置する。平面は東西に長い隅丸長方形で、長軸2.1m、短軸1.4m、深さ0.3mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩やかな凹面をなす。埋土はレンズ状堆積で、上下2層にしか分層できなかった。遺物は弥生土器が下層を中心に出土した。

160は断面三角形の甕の口縁部、161~163はいずれも厚手でやや上底の甕の底部である。

SK107 (図49)

調査区北東のB120・BH20区画に位置する。SH101・SH102・SK108・SK109と重複し、いずれよりも古い。全体の規模や形状は明確ではないが、現状から長軸約4m、短軸約2.5mの不整な楕円形と推定される。現存壁高は0.1mと浅い。遺物は弥生土器小片、黒曜岩碎片、石剣が埋土中から出土した。

164は泥岩製の小型の石剣で、先端部を欠損するが、全体に丁寧な作りである。

SK116 (図50・51, 写真図版6-7)

調査区北側中央のBG22・BH22区画に位置し、SH114・SH115の南に接する。平面は長径2.6m、短径2.4mのやや不整な円形である。底面はほぼ平坦で、深さは0.4mである。埋土の観察からは数段階の埋没過程が認められ単純な自然堆積ではないようであるが、出土遺物には顕著な時期差を見いだせなかった。埋土中から弥生土器多数の他、石製穂摘具、砥石が出土し、土器にはほぼ完形に復元できるものもあったが、完存状態のものは認められなかった。

165・166は広口壺の口縁部、167・168やや上底をなす壺の底部である。169~171はいずれも

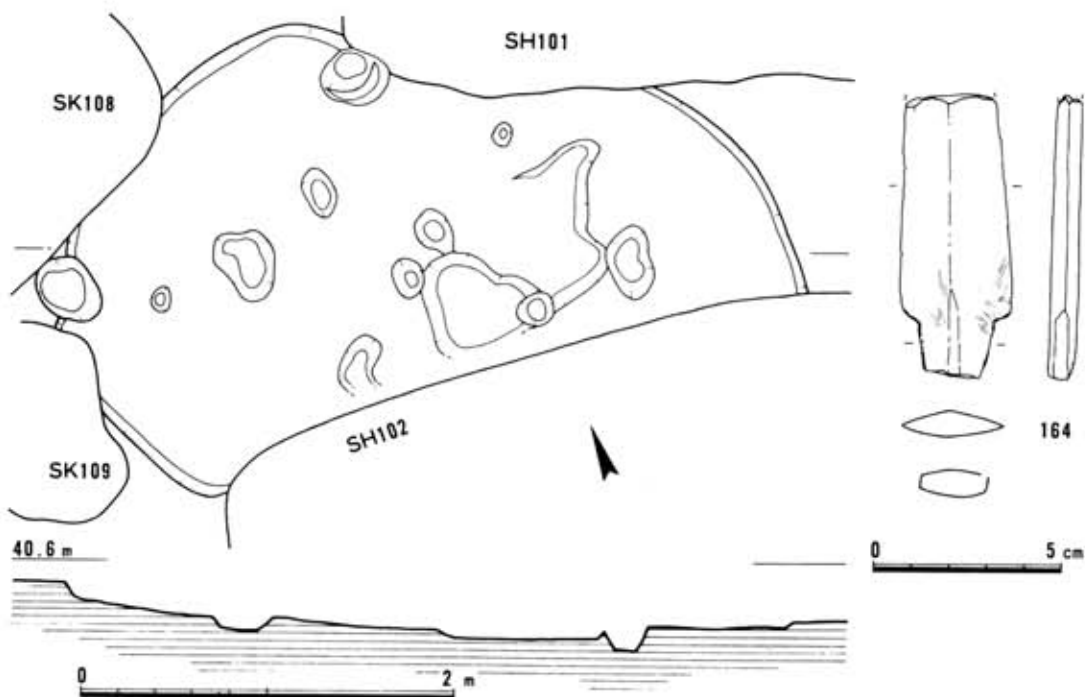


図49 SK107(1:40), 出土遺物(1:2)

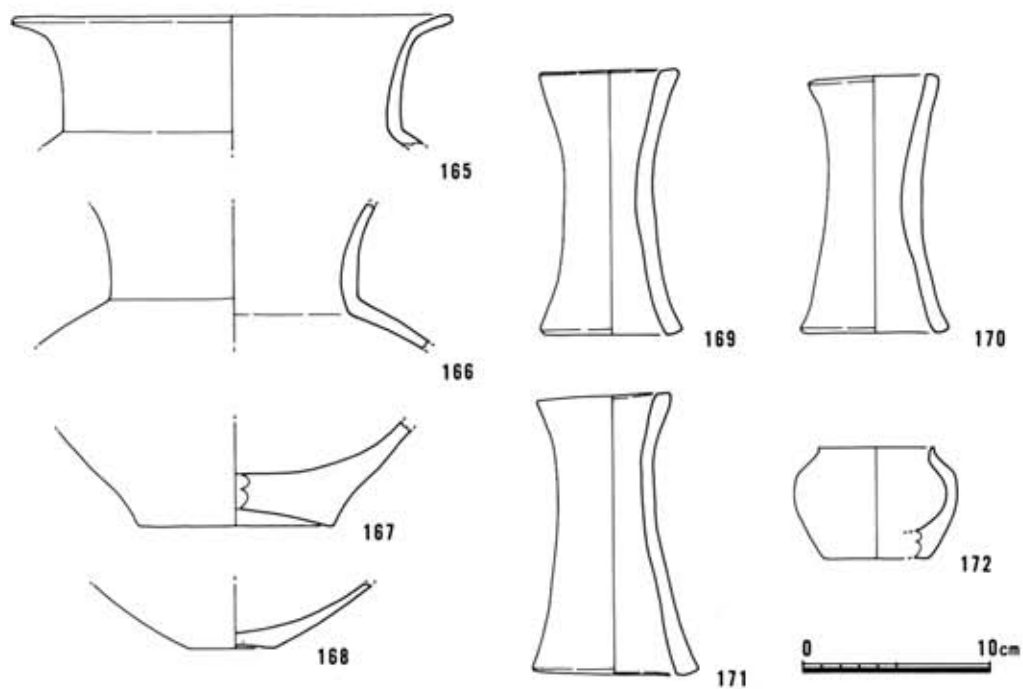
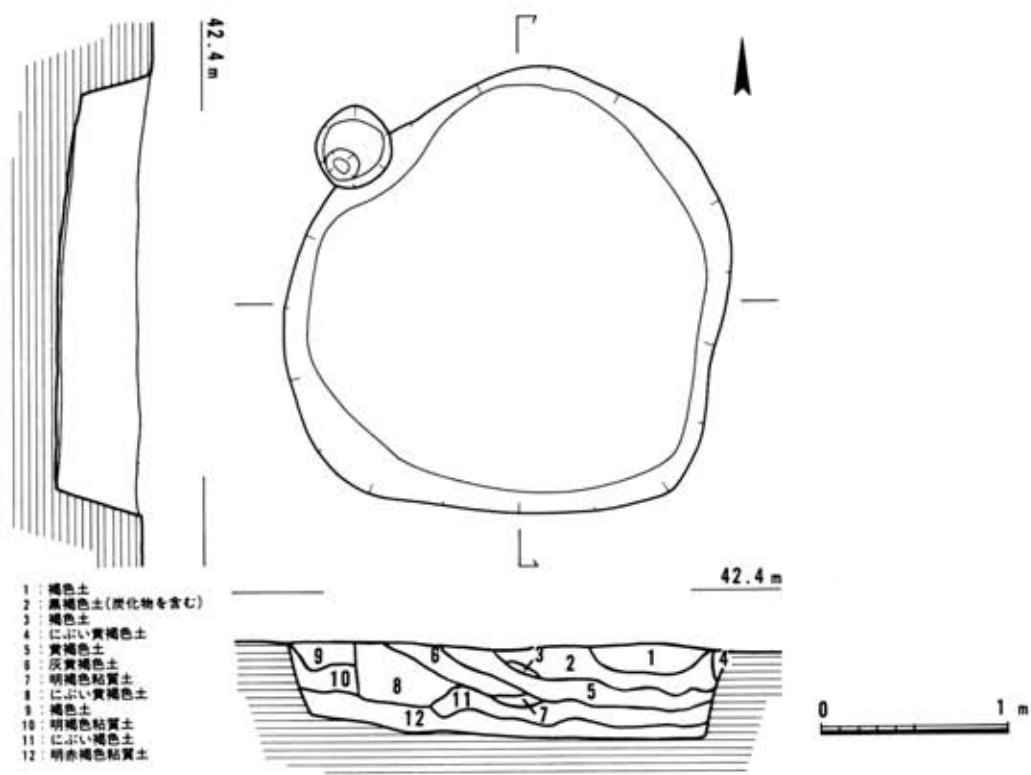


図50 SK116(1:40), 出土遺物1(1:4)

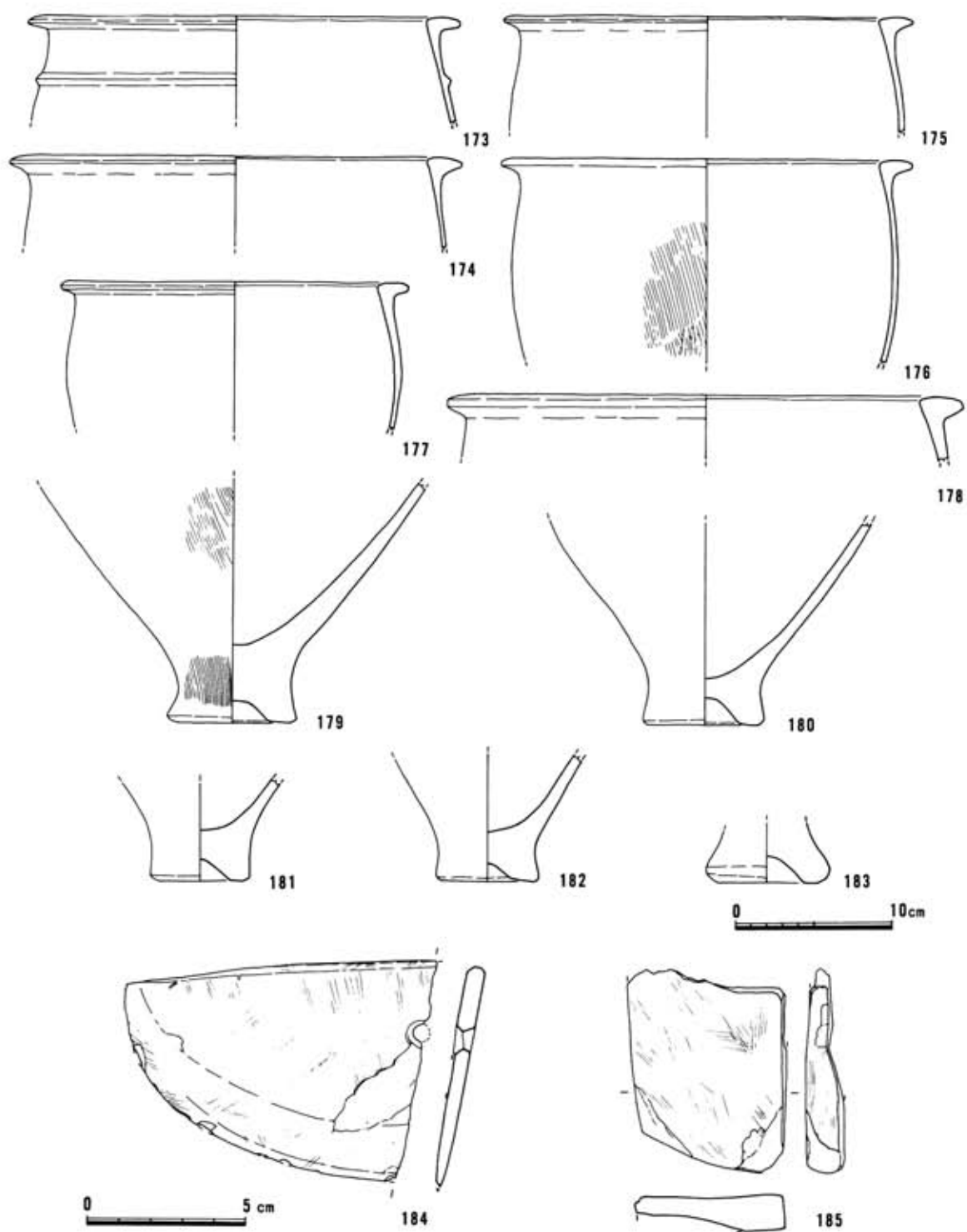


図51 SK116出土遺物 2 (173~183は 1 : 4, 184・185は 1 : 2)

ほぼ完形に復元できる器台である。172は小型の鉢で、肩が張り口縁部が内傾する特異な器形である。173～178は甕の口縁部で、173は胴部上位に小さな突帯を1条巡らせる。177はやや小型、178はやや大型の甕である。179～183は甕の底部で、いずれも厚手の上底をなす。184は泥岩製の石製穂摘具で、半分以上を欠損する。背部は直線的、刃部は外湾する両刃で、遺存状態から判断すると、研ぎ直しによる形態変化があまり進んでいない段階で破損し廃棄されたものであろう。185は砥石で、4面以上を使用している。

SK118 (図52)

調査区北側中央やや西よりのBG22・BG23区画に位置する。SK117と重複し、これより新しい。平面は長軸1.1m、短軸0.8mの楕円形である。深さは南西側が0.5m、北東側は0.3mと、南西側が一段低くなっている。埋土中から弥生土器、黒曜岩剥片が出土した。

186・187は甕の口縁部、188は甕の底部である。189は鉢の口縁部で断面三角形をなす。190は壺の底部で、僅かに上底気味である。

SK119 (図53・54, 写真図版6-8)

調査区北側西よりのBG23・BH23区画に位置する。平面は長軸3.5m、短軸1.4mの東西に長い不整形である。深さ0.45mで、底面は西に向かってやや上がっており、西端は一段高くなっている。短軸方向の断面は逆台形である。埋土中から弥生土器多数と小型柱状片刃石斧、石製穂摘具、砥石、黒曜岩剥片が出土したが、土器はいずれも破片であった。

191～202は甕の口縁部である。191・192・198は胴部上位に小さな突帯を、199は摩耗のため不確実ながら胴部上位に1条の沈線を巡らせる。197は口縁部の突帯に刻目を施し、196は胴部がやや張る、など多様である。203～206は厚手の甕の底部で、不明瞭な205を除きいずれも上底である。207～209は中型の、210は小型の壺の底部で、いずれも僅かに上底気味である。211は口縁部を欠く小型の壺である。212は断面が不整な五角形をなす支脚である。213は泥岩製の小

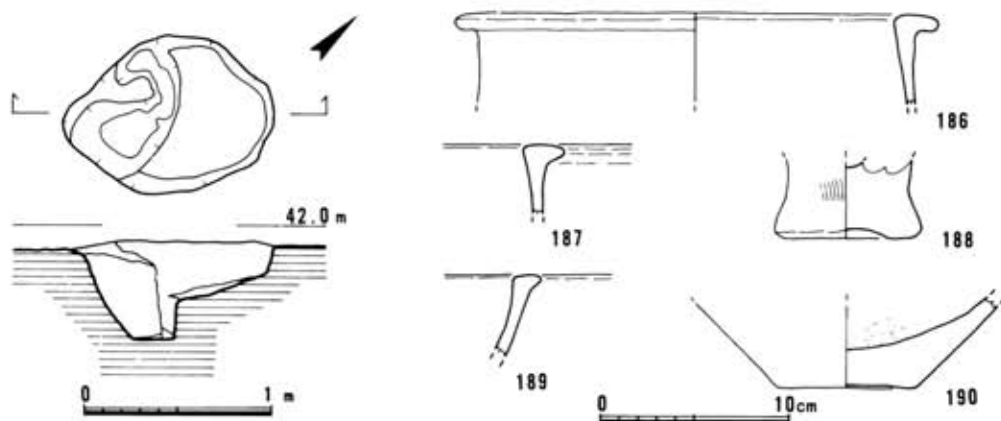


図52 SK118(1:40), 出土遺物(1:4)

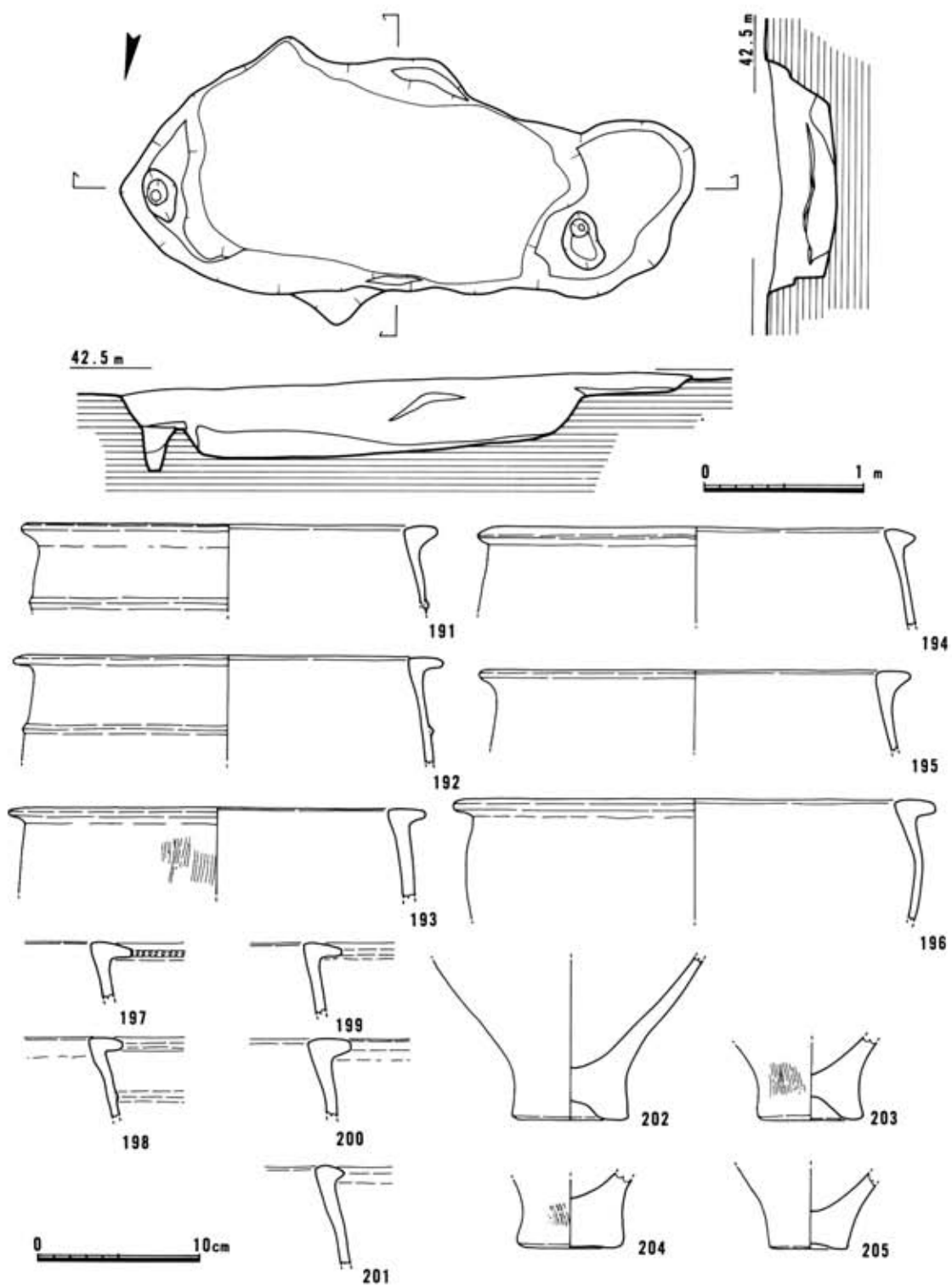


图53 SK119(1:40), 出土遺物1(1:4)

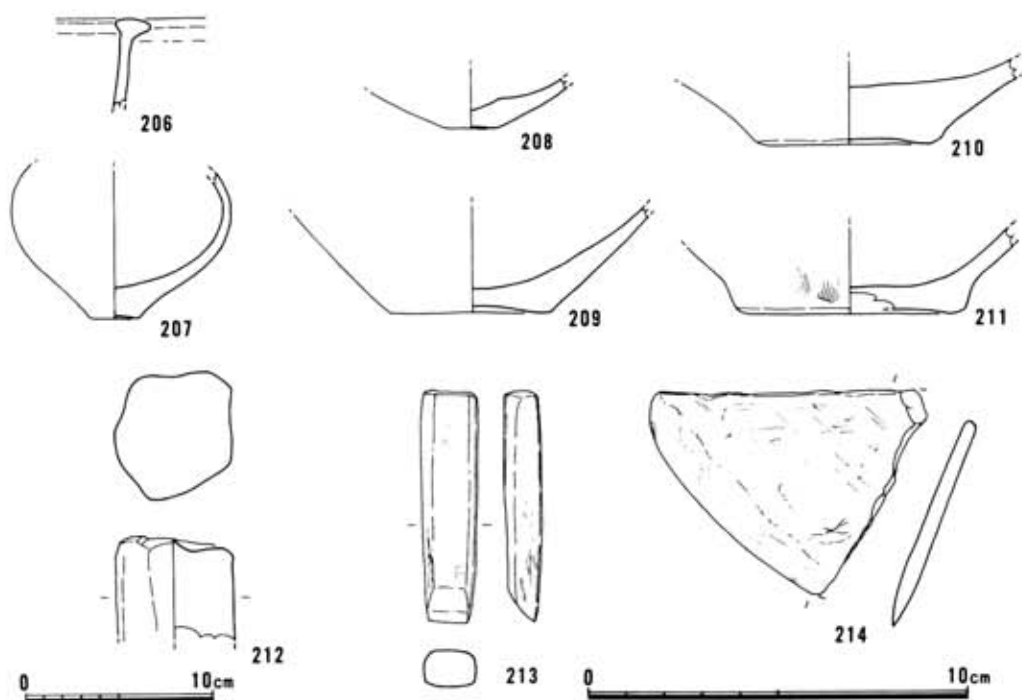


図54 SK119出土遺物 2 (206~212は 1 : 4, 213・214は 1 : 2)

型柱状片刃石斧で、完存品である。214は泥岩製の石製穂摘具で、2/3程を欠損する。背部は直線的、刃部は両刃で外湾刃であろう。

S K 126 (図55)

調査区中央北よりのBG 2 1・BG 2 1区画に位置する。SK125と重複し、これより古い。平面は北西角が不明であるが一辺約1.4mの隅丸方形と考えられる。深さ0.14~0.3m、底面は平坦で、南西側は一段低くなっている。埋土中から弥生土器小片、石剣破片、砥石、黒曜岩剥片が出土した。

215は甕の口縁部、216は器台の口縁部と思われる。217は泥岩製かと思われる石剣の破片である。鎬は明瞭で、全体に丁寧に研磨されている。218は砥石で使用面は4面である。

S K 129 (図56)

調査区北東のBG 2 0・BH 2 0区画に位置する。平面はやや不整な隅丸長方形で、長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.3~0.6mである。壁の立ち上がりは北側と西側が急で、東側と南側は緩やかである。底面はレンズ状で中央が深くなる。埋土中から弥生土器、黒曜岩剥片が少量出土した。

219は底面よりやや浮いた状態で出土した小型の鉢で、完存である。これ以外の土器はいずれも小破片であった。220・221は断面三角形の甕の口縁部、222~224は甕の底部である。

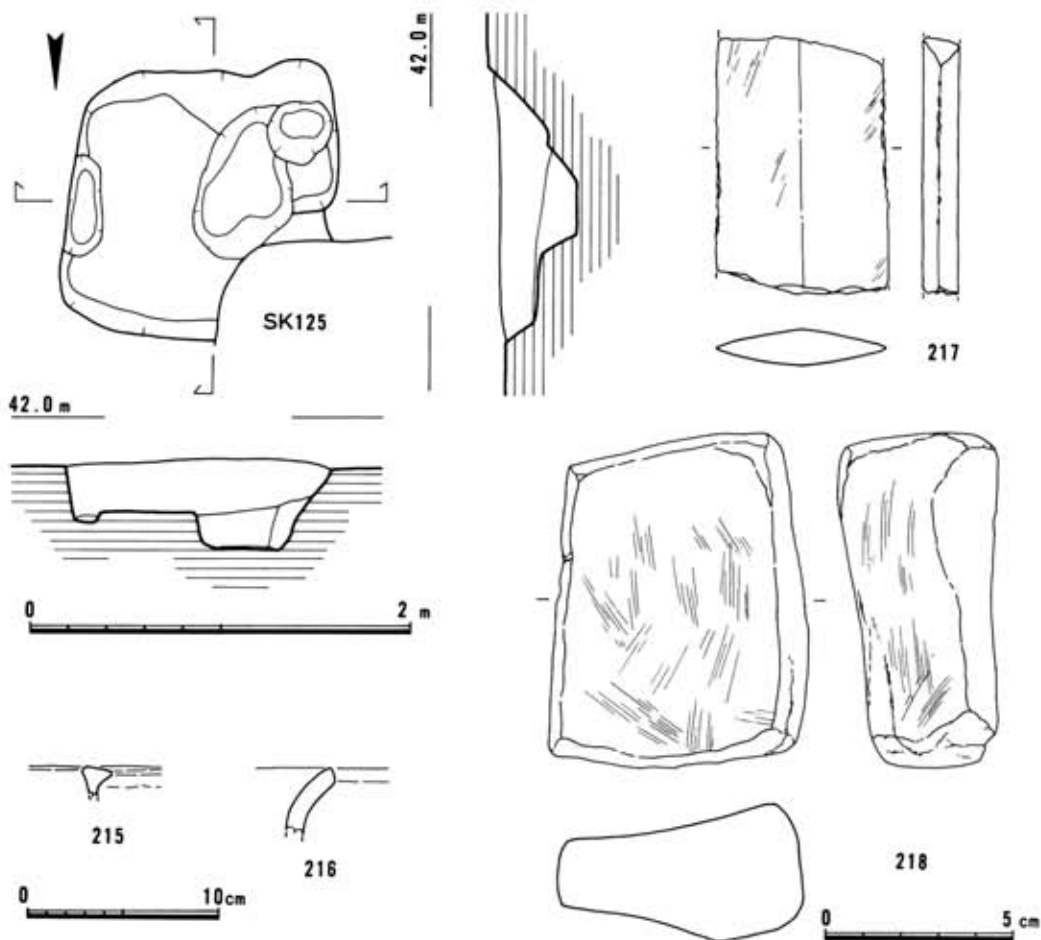


図55 SK126(1:40), 出土遺物(215・216は1:4, 217・218は1:2)

SK130 (図57)

調査区中央北東よりのBG20区画に位置する。平面はやや不整な隅丸長方形で、長軸1.9m、短軸1.3mである。深さ0.4~0.5mで、底面はほぼ平坦である。埋土中から弥生土器、黒曜岩剥片、土製紡錘車、円盤形土製品が出土した。

225は土製紡錘車、226はこれとほぼ同一の形態・大きさであるが、無孔であるため円盤形土製品と報告しておく。227・228は口縁部断面三角形の甕で、227は胴部が全く張らず直線的に口縁部に続く。229は甕か鉢か断定し難いが、いわゆる如意形の口縁部である。230は厚手で上底の甕の底部である。

SK140 (図58)

調査区中央南よりのBE21区画に位置する。平面は南西部の残存状況が悪いが、本来は一辺3.3m程の隅丸の不整な方形であったと考えられる。底面は平坦で、深さは0.1mである。埋土中から弥生土器と黒曜岩剥片が出土した。

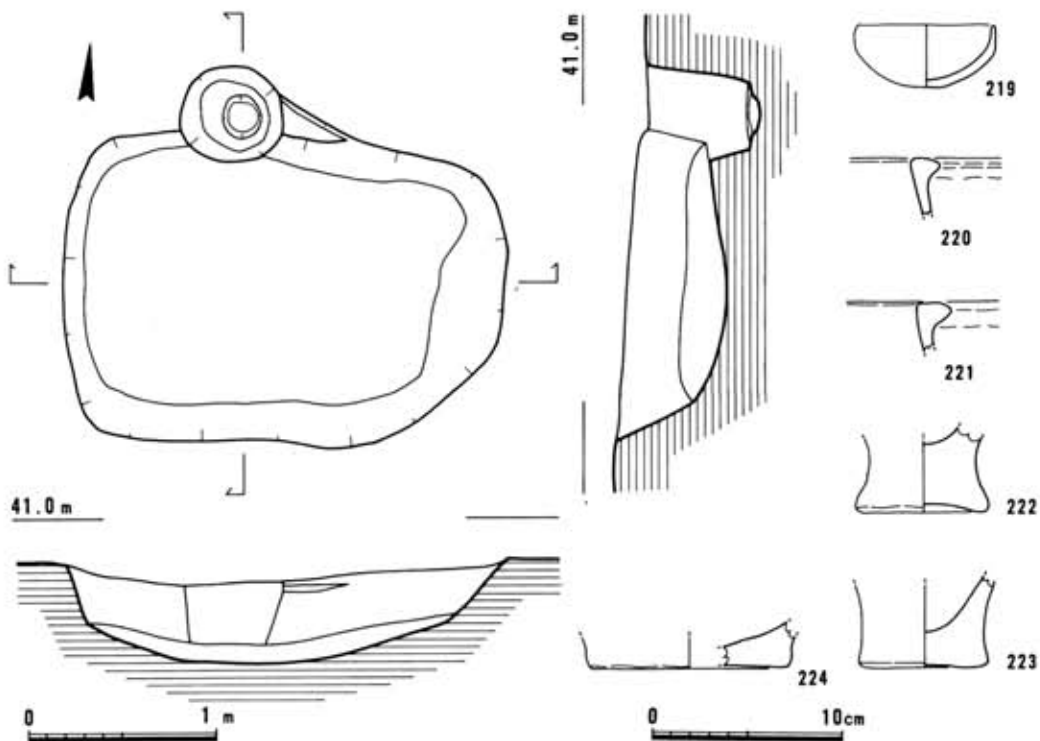


図56 SK129(1:40), 出土遺物(1:4)

231・232は甕の口縁部で、く字形に折れて短く伸びる。233はなで肩の広口壺で、口縁部は外反し、胴部上位に突帯を巡らせる。234は内湾気味に直行する鉢の口縁部である。235は平底の底部で、立ち上がりから判断すると甕の可能性が高い。

SK143 (図59)

調査区中央北東よりのBG21区画に位置する。平面は長軸2.0m、短軸1.6m、深さ0.5mの端整な隅丸長方形である。四方の壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり、底面はきわめて平坦である。全体に規格的な感じが強い。弥生土器が底面近くに集中して出土したが、量的には多くなく、いずれも破片であった。

236は甕の底部で、厚手の上底である。237は外反しながら大きく開く大型の壺かと思われる口縁部で、端部に向かって器壁が厚みを増す。238は上底気味の平底をなす壺の底部である。

SK151 (図60)

調査区中央北東よりのBG21区画に位置する。平面は歪な隅丸方形で、長軸1.6m、短軸1.3mである。深さは0.1~0.2mで、底面は平坦である。埋土中から弥生土器と黒曜岩剥片が少量出土した。

239はL字形に強く折れる甕の口縁部で、上面は内傾する。240は平底の甕の底部である。

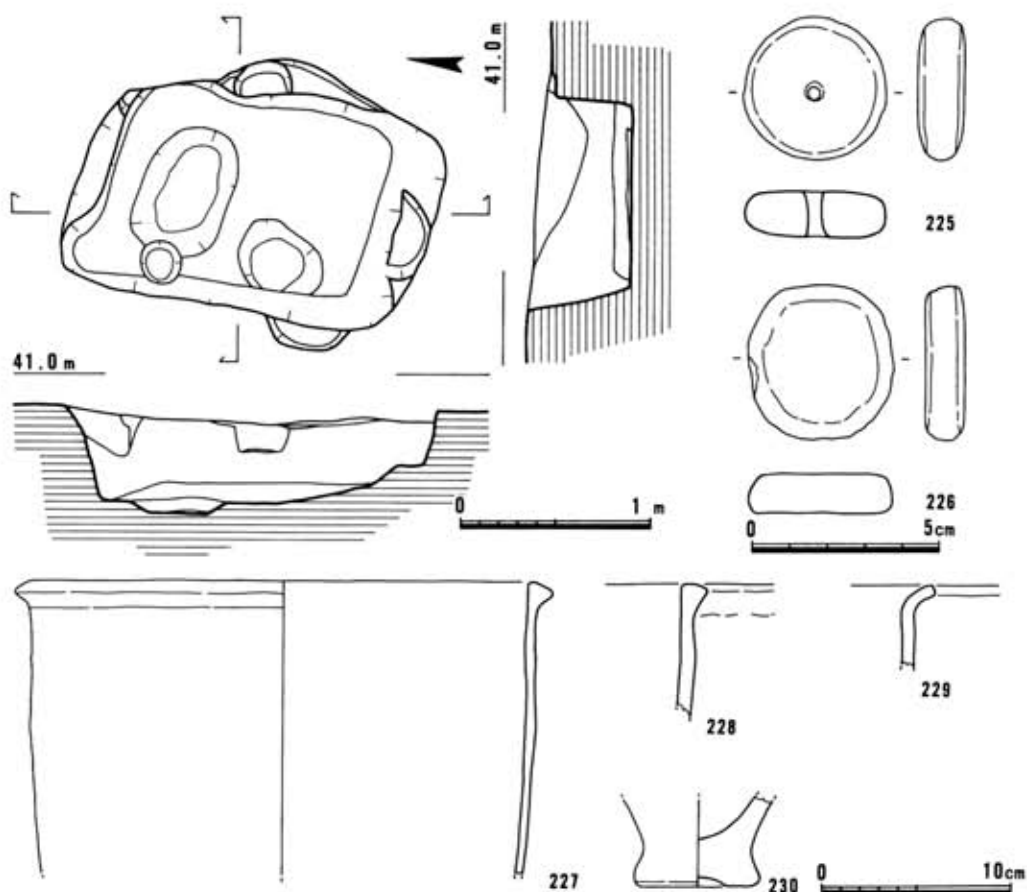


図57 SK130(1:40), 出土遺物(225・226は1:2、227~230は1:4)

SK152 (図61)

調査区西端のBF24区画に位置する。SK156と重複し、これより古い。長軸3.3m、短軸0.6m、深さ0.2~0.6mの東西に細長い土坑で、当初は溝としていたため調査時の記録類では「SD152」と註記している。底面は中央部が0.6mと最も深く、東西両側に向かって階段状に高くなっている。試掘調査31-1区1号試掘坑の南端で検出された「隅丸方形の土坑」と同一遺構である。埋土中から弥生土器が出土した。

SK156 (図62)

調査区西端のBF24区画に位置する。SK152と重複し、これより新しい。長軸1.8m以上、短軸0.8m、深さ0.4mの東西に細長い土坑で、西側は調査区外へ続く。形態や規模、底面が階段状である点などSK152と類似性が強い。埋土中から弥生土器が出土した。

248・249は甕の底部で、いずれも厚手の上底である。249は底部外面がくびれ高台状をなす、やや特異な形態である。

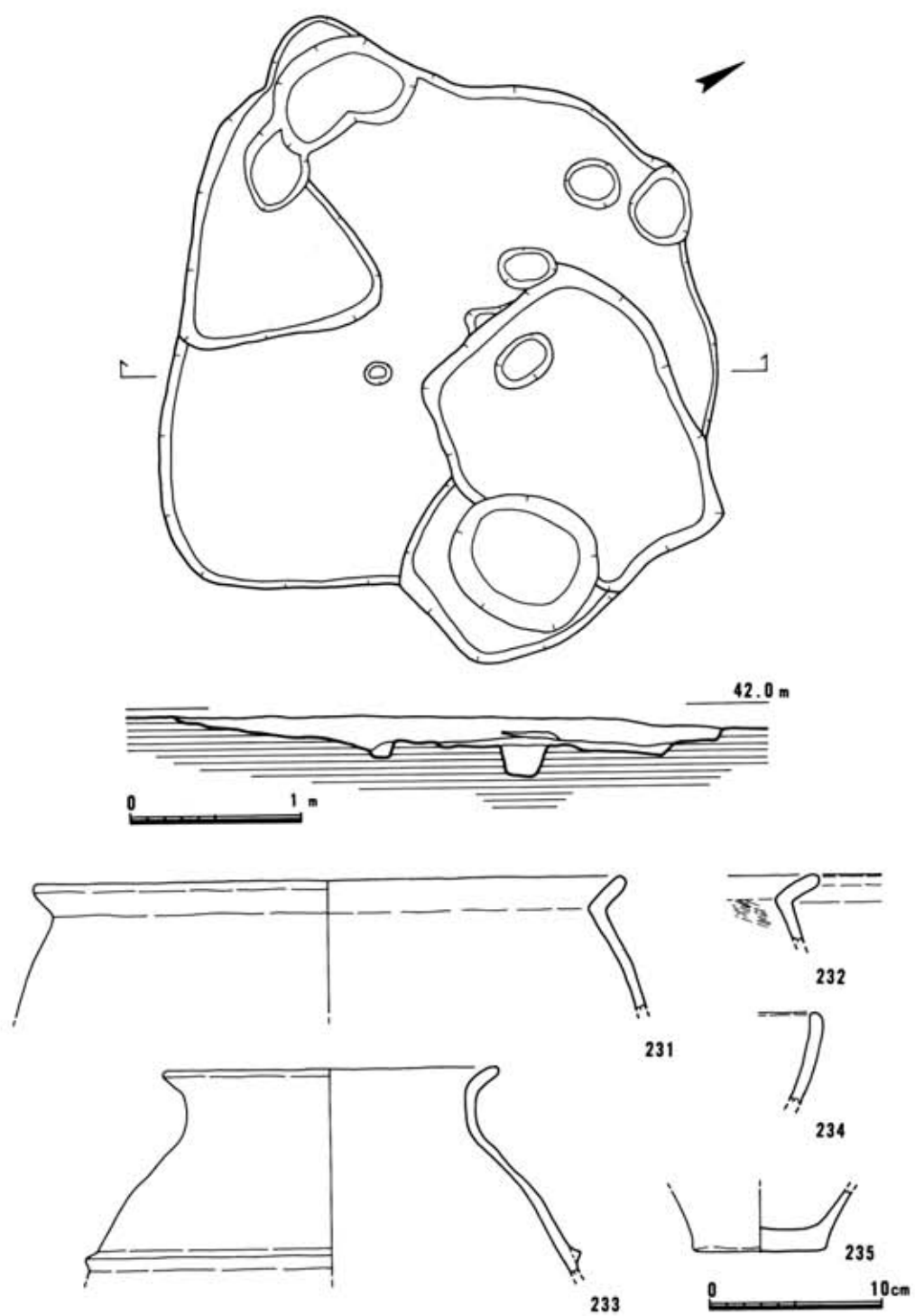


图58 SK140(1:40), 出土遗物(1:4)

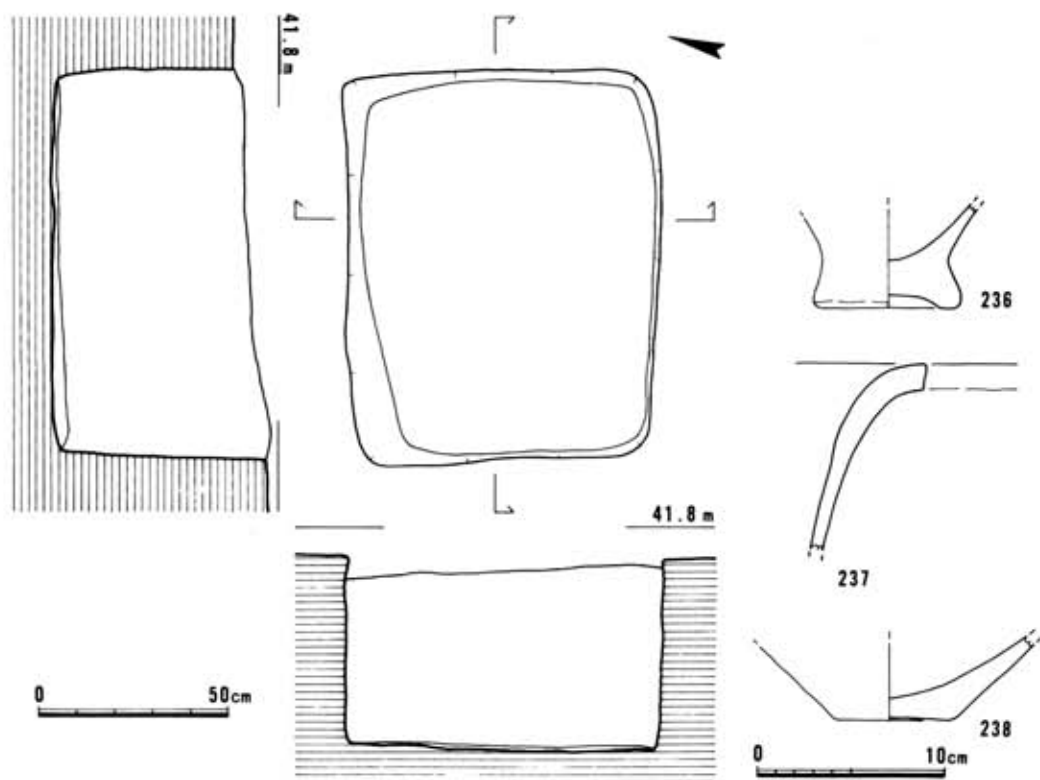


图59 SK143(1:20), 出土遗物(1:4)

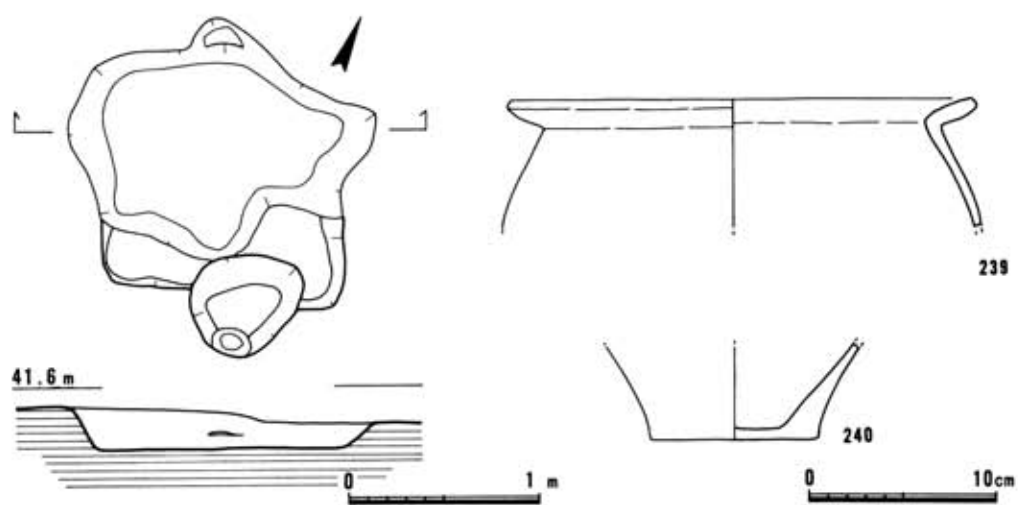


图60 SK151(1:40), 出土遗物(1:4)

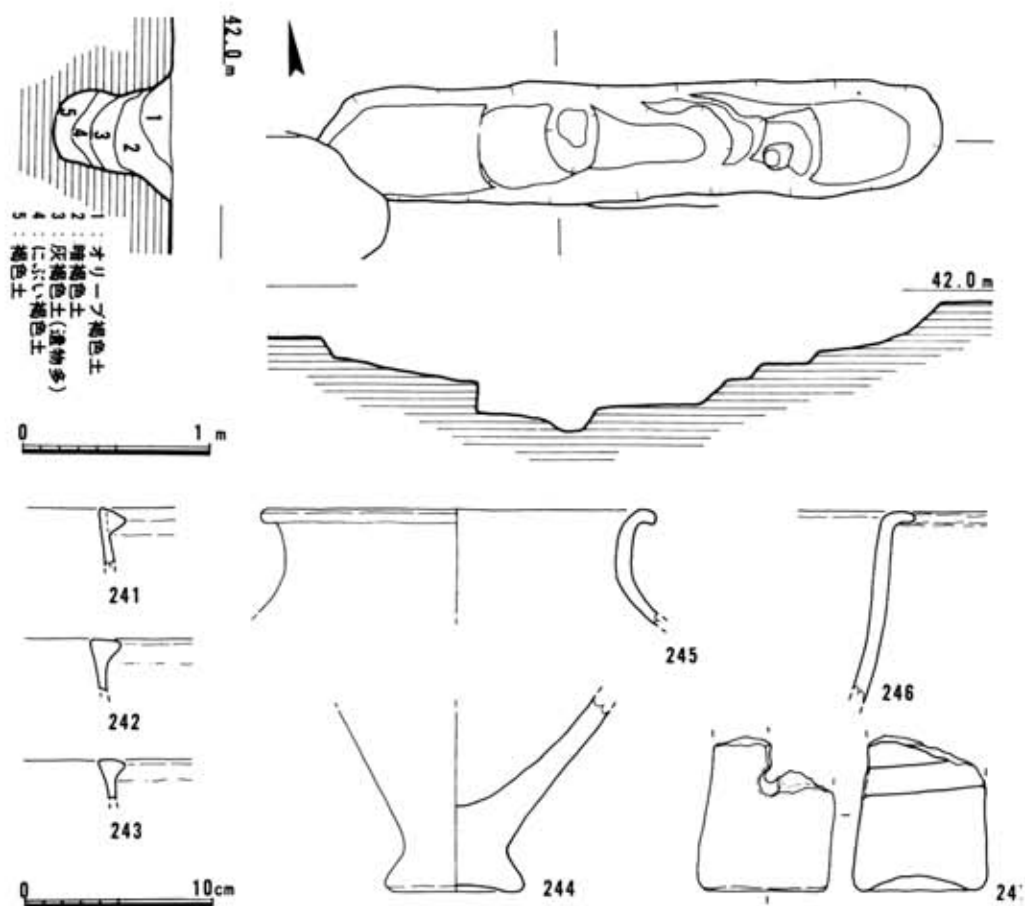


図61 SK152(1:40), 出土遺物(1:4)

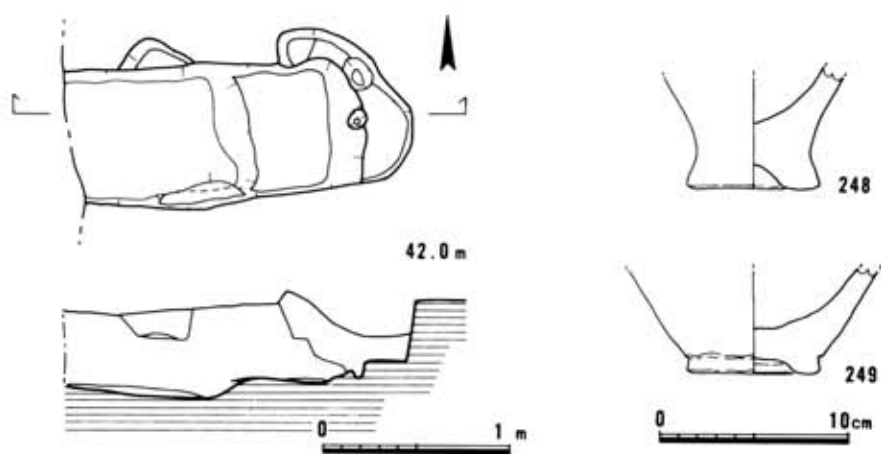


図62 SK156(1:40), 出土遺物(1:4)

SK159 (図63)

調査区南側西端部のBC23・BD23区画に位置する。SH161・SH169と重複し、SH161より古い。SH169との新旧関係については、調査時の所見ではSK159が新しいと判断したが、出土遺物の様相からは逆の場合も考えられる。平面形は長軸2.4m以上、短軸1.5mの隅丸長方形で、西側の一部が調査区外である。底面は平坦で深さ0.4mであり、断面は逆台形を示す。埋土中から弥生土器少量と石製穂摘具が出土した。

250・251は甕の口縁部、252・253は甕の底部である。254は外湾刃半月形の石製穂摘具で、一方の端部を欠損する。泥岩製で表面の荒れが目立ち、特に図の裏面は剥落が著しい。刃部は両刃である。

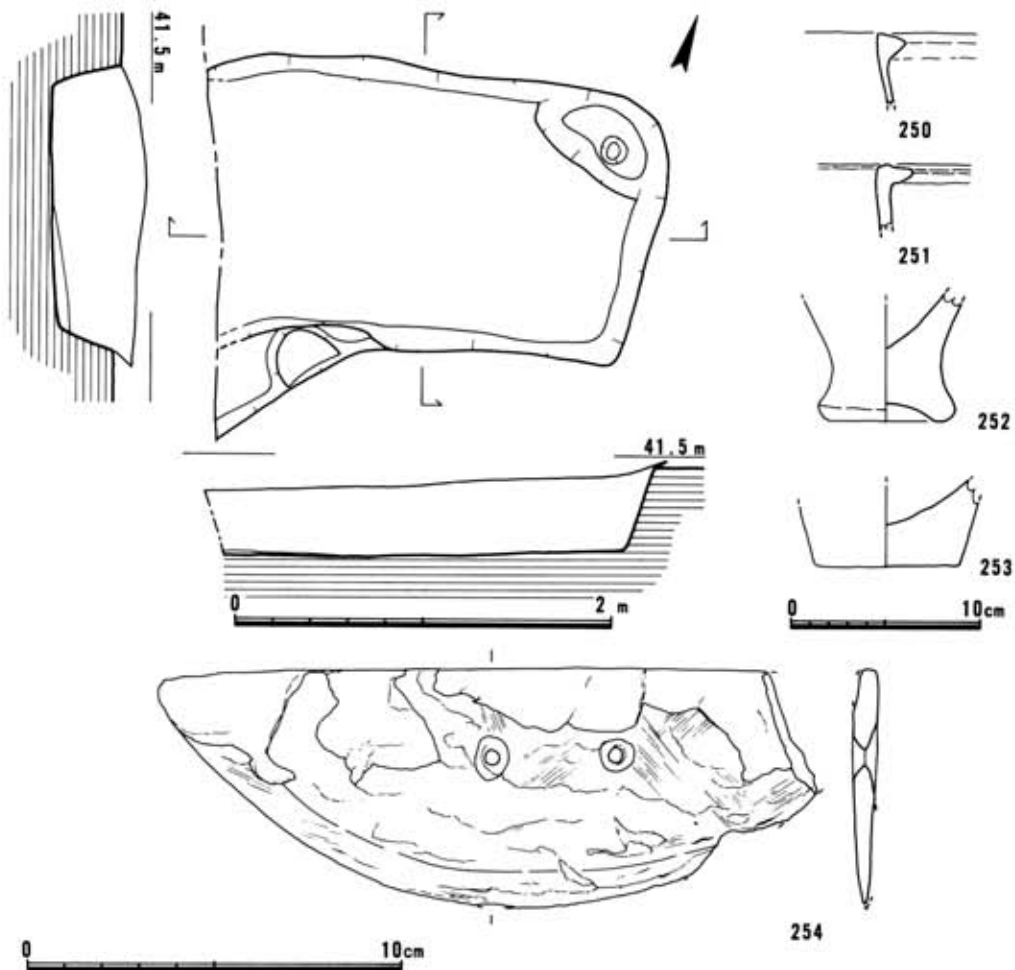


図63 SK159(1 : 40), 出土遺物(250~253は1 : 4, 254は1 : 2)

(3) 溝

SD144 (図64)

調査区中央東よりBF20・BF21区画に位置する。両端を各々SH127とSH128とに区切られ、弧状をなす残存長5.7mの溝である。幅0.4m、深さ0.3mで、断面はU字形を示す。遺物は埋土中から弥生土器小片が出土したのみで、図示できるものはない。

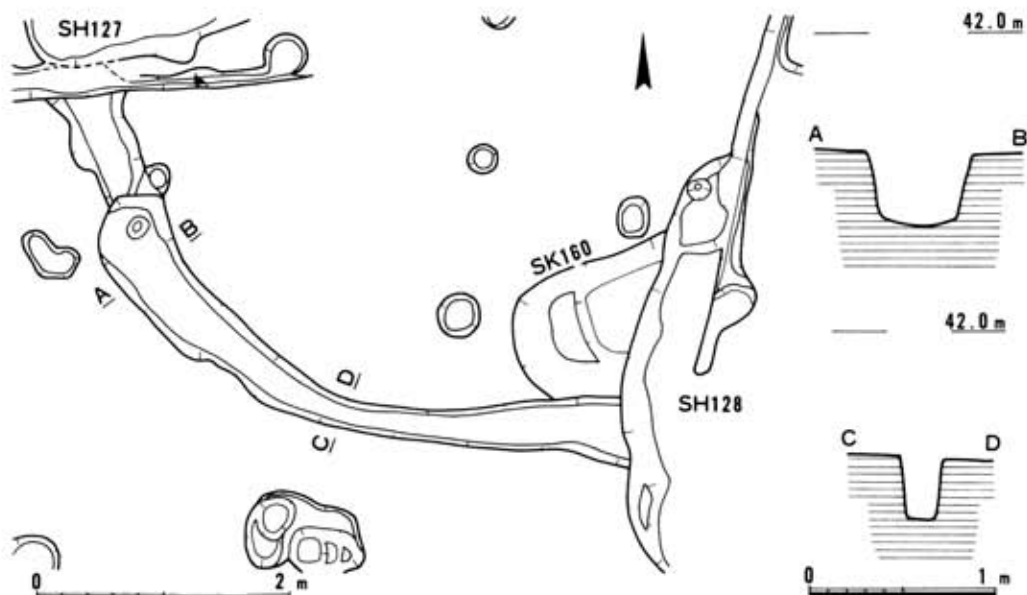


図64 SD144(1:60, 断面図は1:40)

SD172 (図65)

調査区中央西よりをSH131の北側からSH137まで南北に走る溝で、長さ21m、幅0.5m、

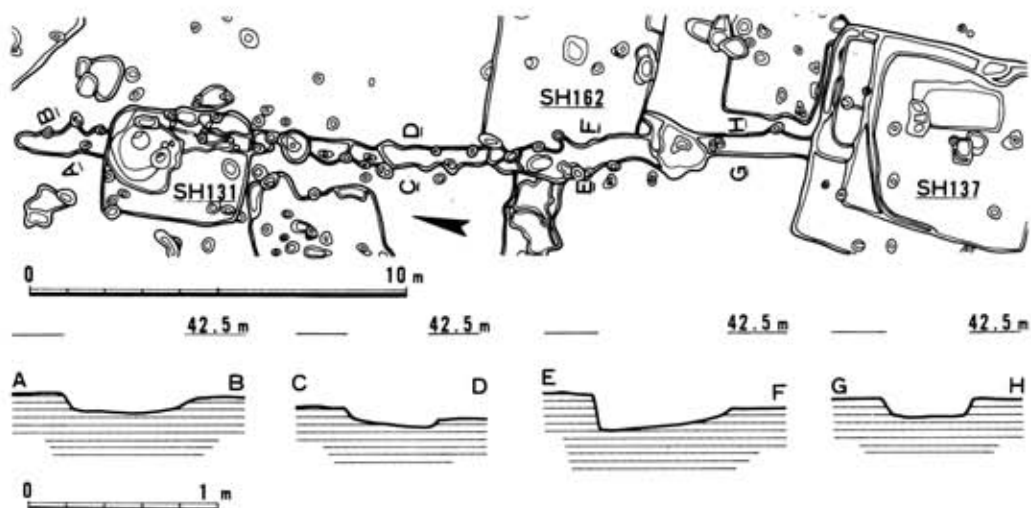


図65 SD172(1:200, 断面図は1:40)

深さ0.2mである。断面は逆台形で、底面は平坦である。他の遺構との関係では、SH162より新しく、SH131・SK153・SK170・SK150のいずれよりも古い。遺物は埋土中から弥生土器の小破片が僅かに出土したのみで、図示できるものはない。

(4) 小穴の出土遺物 (図66)

小穴から出土した遺物の内、紙数の関係で石器類についてのみ報告する。

255～258はいずれも凹基の打製石鏃で、形態と風化度から弥生時代のものと判断される。255・256は讃岐岩質安山岩製で、255は素材剥片の剥離面を大きく残し周縁部に加工を加える。257・258は良質黒色の黒曜岩製で、258はやや大型で脚部の一方を欠損し先端部が先鋭でないことから、あるいは製作途上での失敗品かとも思われる。255はP-13、256はP-71、257はP-202、258はP-92出土である。

259はP-60出土の石製紡錘車で、完存品である。片岩質で、全面に丁寧な研磨で仕上げられている。

260はP-108、261はP-207出土の玄武岩製石斧で、基部と体部のみの欠損品である。

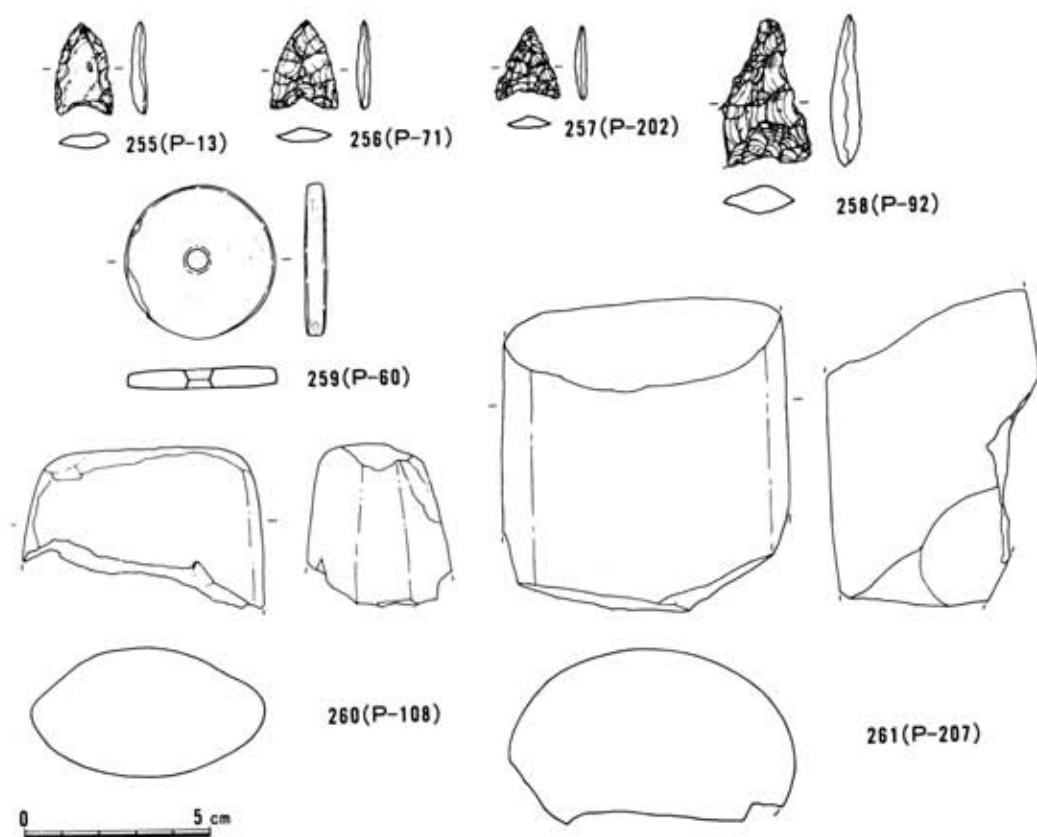


図66 小穴の出土遺物(1:2)

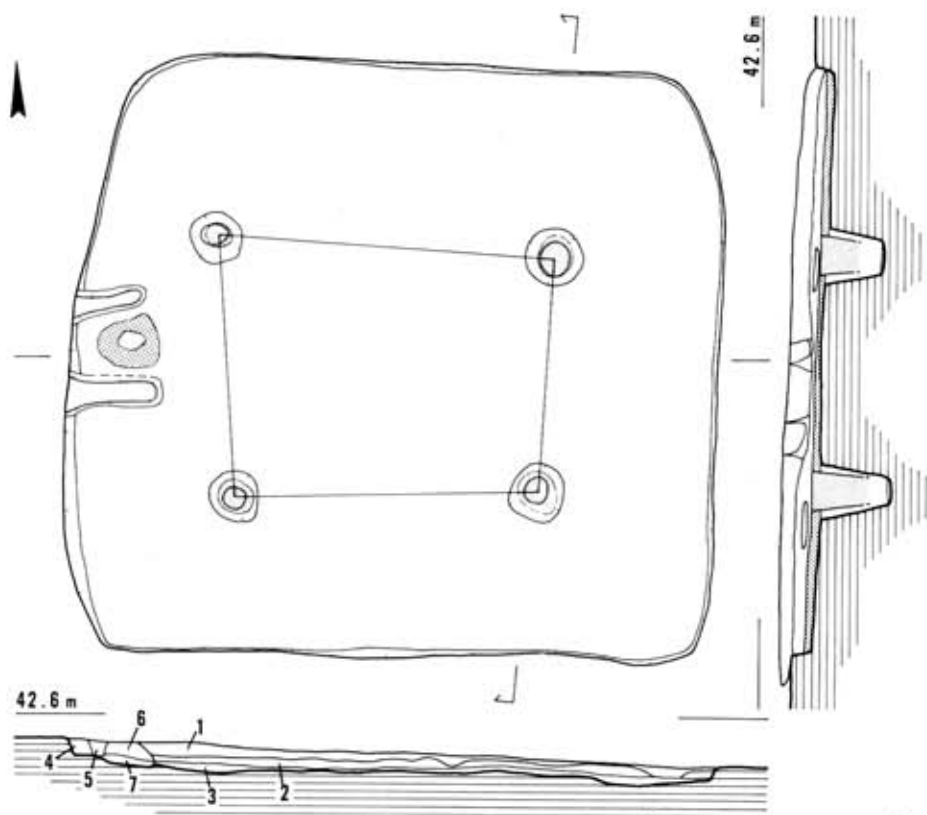
3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物

SH120 (図67)

調査区中央北よりのBG2区画に位置する。SH121と重複し、これより新しい。平面は方形で、長軸5.2m、短軸4.8m、現存壁高0.1m、主軸はN87°Wである。主柱穴は4箇所、梁行柱間1.9～2.1m、桁行柱間2.4～2.7mで、主柱穴は径0.4m、深さ0.6mである。西壁中央に竈があるが、調査時の掘り間違いにより上部構造などは明確にできなかった。竈内は赤橙色の焼けた硬化面となっているが、中央部に径0.2m程の硬化の弱い範囲があり、この位置に支脚があったものと推定される。厚さ0.04～0.08mの貼床が施される。床面には一面に炭化物が散らばり、抜き取り痕の明瞭でない径0.2～0.3mの柱痕跡が確認され、いわゆる焼失家屋とみられる。遺物は床面の須恵器杯2個体・土師器杯1個体、竈内の土師器杯1個体・甕ないし甎の破片1個体分以外は、埋土中から砥石1点と土器片が少量出土したのみである。

262・263は東側の床面で出土した須恵器杯である。口縁部はやや内傾気味に大きく立ち上がり、端部内面は段をなす。外底部は回転ヘラケズリである。264は竈の北脇から出土したほぼ完形の土師器杯で、口縁部は短く内湾する。265は竈内出土の土師器杯で、ほぼ1個体分の破片があるが、遺存状態が悪く、復元図示が十分にできなかった。266は砥石で使用面は4面である。



- 1: 黒褐色土 2: 黒褐色土(炭化物混) 3: 赤褐色土(貼床) 0 2 m
 4: 明褐色土(炭化物粒・赤色土粒・黒褐色土粒混) 5: 明赤褐色土(明褐色土混)
 6: 明黄褐色土 7: 赤色粘質土

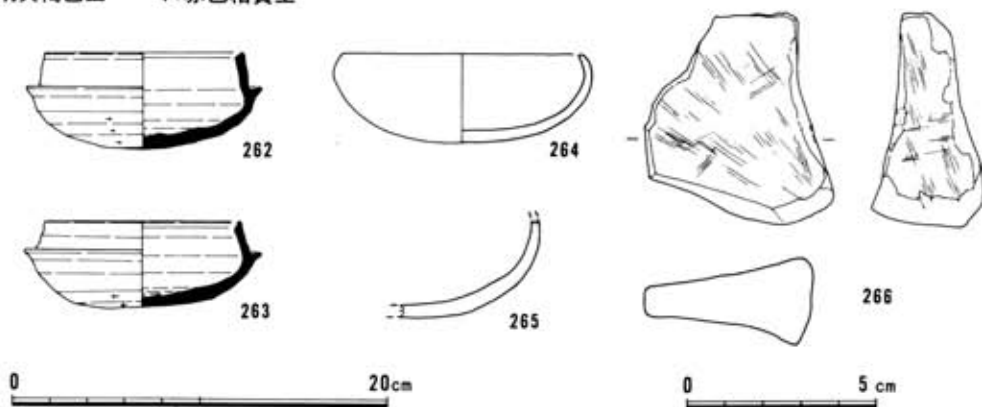


図67 SH120(1:60), 出土遺物(262~265は1:4, 266は1:2)

表1 1区出土遺物一覧 法量の単位はcm・g、()は復元値

遺物番号	採回番号	出土遺構	遺物の種類	法量①口径 ②底径 ③器高 ④胴径 ⑤高さ ⑥幅 ⑦厚さ ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図6	S H101	弥生土器・鉢	①(27.8)	橙色	92002721
2	図6	S H101	砥石	⑤16.9 ⑥8.9 ⑦2.9 ⑧620	泥岩	92004753
3	図7	S H102	弥生土器・甕	②(6.5)	にぶい橙色	92002722
4	図7	S H102	弥生土器・壺	①(9.5) ④14.7	橙色	92002723
5	図7	S H102	弥生土器・台付鉢	②(8.2)	橙色	92002726
6	図7	S H102	弥生土器・高杯	②(16.8)	にぶい黄橙色	92002727
7	図7	S H102	弥生土器・高杯	②(16.4)	浅黄橙色	92002729
8	図7	S H102	弥生土器・支脚	②(14.0)	にぶい橙色	92002725
9	図7	S H102	弥生土器・支脚		にぶい橙色	92002724
10	図7	S H102	弥生土器・支脚	④5.8	にぶい橙色	92002728
11	図8	S H102	鉄鎌	⑤13.8 ⑥3.8		93002112
12	図10	S H114	弥生土器・甕	①(33.1)	黄橙色	92003193
13	図10	S H114	弥生土器・甕	②9.3	内：灰色・外：浅黄橙色	92003187
14	図10	S H114	弥生土器・甕	②8.5	灰白色	92003189
15	図10	S H114	弥生土器・甕	②7.8	橙色	92003188
16	図10	S H114	弥生土器・鉢	①(14.3) ②5.8 ③7.7	にぶい黄橙色	92003190
17	図10	S H114	弥生土器・支脚	②8.2	橙色	92003192
18	図12	S H121	弥生土器・壺	④(16.0)	内：褐色・外：浅黄橙色	92004553
19	図12	S H121	弥生土器・鉢	①(6.8) ②3.5 ③5.4 ④8.3	浅黄橙色	92004554
20	図12	S H121	弥生土器・高杯		浅黄橙色	92004555
21	図14	S H123	弥生土器・甕	①(16.2) ②21.1 ③(18.0)	橙色	92002740
22	図14	S H123	弥生土器・甕	①(34.0) ④(36.0)	橙色	92002736
23	図14	S H123	弥生土器・壺	①(13.0) ③15.2	にぶい黄橙色	92002741
24	図14	S H123	弥生土器・高杯	①(34.7) ②(16.4) ④17.9	にぶい橙色	92002738
25	図14	S H123	弥生土器・器台	①14.1 ②(18.1) ③18.4	にぶい褐色	92002734
26	図14	S H123	弥生土器・鉢	①(16.8) ②5.2	浅黄橙色	92002735
27	図16	S H124	弥生土器・甕	①(43.0) ④(47.4)	浅黄橙色	92002752
28	図16	S H124	弥生土器・甕	①(19.1) ④(19.0)	橙色	92002747
29	図16	S H124	弥生土器・甕	①(15.3) ②3.6 ③22.7 ④17.0	浅黄橙色	92002746
30	図16	S H124	弥生土器・甕	①(14.1) ②5.4 ③19.9 ④15.0	褐色	92002745
31	図16	S H124	弥生土器・蓋	①(13.7)	橙色	92002749
32	図16	S H124	弥生土器・支脚	②11.6 ③10.1	黄橙色	92002744
33	図17	S H124	弥生土器・壺	①18.6 ②9.2 ④27.7	にぶい橙色	92002751
34	図17	S H124	弥生土器・器台	①12.5	褐色	92002742
35	図17	S H124	弥生土器・器台	①(12.0) ②(14.3) ③18.2	明黄褐色	92002743
36	図19	S H127	弥生土器・甕	①(25.0) ④(23.3)	にぶい橙色	92004482
37	図19	S H127	弥生土器・甕	②6.2	にぶい橙色	92003194
38	図19	S H127	弥生土器・甕	②6.2	浅黄橙色	92003195
39	図19	S H127	弥生土器・甕	②3.9	にぶい橙色	92003197
40	図19	S H127	弥生土器・鉢	①(25.2)	褐色	92003196
41	図19	S H127	弥生土器・甕	①(25.5) ④(31.5)	浅黄橙色	92003199
42	図19	S H127	弥生土器・壺	①(20.9)	褐色	92004552
43	図19	S H127	弥生土器・支脚	②12.6 ③12.6	浅黄橙色	92003198
44	図19	S H127	弥生土器・高杯	①(27.7)	浅黄橙色	92004551
45	図19	S H127	弥生土器・高杯	②15.0	黄橙色	92003200
46	図21	S H128	弥生土器・甕	①23.1 ②6.5 ③33.7 ④24.9	褐色	92002772
47	図21	S H128	弥生土器・甕	①(20.6) ④(23.5)	橙色	92002754
48	図21	S H128	弥生土器・甕	①26.3	黄橙色	92002755
49	図21	S H128	弥生土器・甕	①(22.8) ④(25.6)	褐色	92002771
50	図21	S H128	弥生土器・甕	①(14.4) ③14.5	にぶい黄橙色	92002770
51	図21	S H128	弥生土器・瓶	②5.7	浅黄橙色	92002756
52	図21	S H128	弥生土器・壺	①(22.3) ②8.9 ③39.8 ④29.3	褐色	92002753
53	図22	S H128	弥生土器・高杯	①(31.7) ②(17.7) ③(22.7)	褐色	92002761
54	図22	S H128	弥生土器・高杯	②(17.0)	褐色	92002762
55	図22	S H128	弥生土器・鉢	①(23.5) ②(7.0) ③12.4	浅黄橙色	92002757
56	図22	S H128	弥生土器・鉢	①(17.1) ③9.3	内：黒褐色・外：褐色	92002768
57	図22	S H128	弥生土器・鉢	①(16.6) ③8.2	褐色	92002769
58	図22	S H128	弥生土器・台付鉢	②9.5	内：褐色・外：浅黄橙色	92002759
59	図22	S H128	弥生土器・器台	①(12.5)	黄褐色	92002764
60	図22	S H128	弥生土器・器台	①(15.4)	褐色	92002765
61	図22	S H128	弥生土器・器台	②14.3	浅黄褐色	92002758
62	図22	S H128	弥生土器・器台	②15.2	にぶい褐色	92002763
63	図22	S H128	弥生土器・支脚	②10.4 ④9.8	褐色	92002767
64	図22	S H128	弥生土器・支脚	②14.1 ③11.2	にぶい褐色	92002766
65	図23	S H131	弥生土器・甕		褐色	92004572
66	図23	S H131	弥生土器・甕		にぶい褐色	92004568
67	図23	S H131	弥生土器・甕		浅黄褐色	92004569
68	図23	S H131	弥生土器・甕		浅黄褐色	92004567

遺物番号	検出番号	出土遺構	遺物の種類	法量①口径②底径③高さ④胴径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図23	S H131	弥生土器・甕	②6.4	にふい・橙色	92004564
70	図23	S H131	弥生土器・甕	②7.2	にふい・橙色	92004563
71	図23	S H131	石製品(紙石?)	⑤14.2 ⑥2.0 ⑦2.1 ⑧128.8	泥岩	92004755
72	図23	S H131	石鏃	⑤2.4 ⑥2.1 ⑦0.5 ⑧1.6	讃岐岩質安山岩	92004768
73	図25	S H132	弥生土器・甕	①(51.1) ④51.4	橙色	92002773
74	図25	S H132	弥生土器・甕	①(27.3)	橙色	92002774
75	図25	S H132	弥生土器・甕	①(24.1)	にふい・橙色	92002778
76	図25	S H132	弥生土器・甕	①(26.5) ④(25.7)	橙色	92002777
77	図25	S H132	弥生土器・甕	②7.5	橙色	92002776
78	図25	S H132	弥生土器・台付甕	④18.2	にふい・橙色	92002775
79	図25	S H132	弥生土器・壺	①(23.6)	橙色	92004544
80	図26	S H132	弥生土器・壺	①(14.0) ③14.6	橙色	92004546
81	図26	S H132	弥生土器・鉢	①18.6 ③9.7	にふい・赤橙色	92004548
82	図26	S H132	弥生土器・鉢	①8.1	内:黒褐色・外:橙色	92002779
83	図26	S H132	弥生土器・台付鉢		浅黄橙色	92004545
84	図26	S H132	弥生土器・高杯	②16.7	橙色	92004549
85	図26	S H132	弥生土器・器台	①(14.0)	にふい・橙色	92002782
86	図26	S H132	弥生土器・器台	②15.9	にふい・橙色	92002786
87	図26	S H132	弥生土器・器台	①(14.2) ②17.8 ③21.2	にふい・橙色	92002785
88	図26	S H132	弥生土器・器台	①14.5 ②19.0 ③21.3	にふい・橙色	92002784
89	図26	S H132	弥生土器・支脚	②11.5 ③5.8	橙色	92004547
90	図26	S H132	弥生土器・支脚	②(11.8) ③11.0	にふい・橙色	92002788
91	図26	S H132	弥生土器・支脚	②(15.6) ③13.0	にふい・橙色	92002787
92	図27	S H133	弥生土器・壺		橙色	92004550
93	図27	S H133	石鏃	⑤3.2 ⑥1.9 ⑦0.5 ⑧1.7	黒曜岩	92004765
94	図29	S H135	弥生土器・甕		内:にふい・橙色・外:橙色	92004558
95	図30	S H136	弥生土器・鉢	①(13.0) ③7.0	橙色	92004556
96	図30	S H136	弥生土器・支脚	②11.6 ③10.8	浅黄橙色	92004557
97	図31	S H137	弥生土器・甕	①(19.5)	橙色	92004560
98	図31	S H137	弥生土器・甕		浅黄橙色	92004559
99	図31	S H137	弥生土器・蓋	①(10.7)	橙色	92004561
100	図31	S H137	弥生土器・鉢	①(13.2) ③5.6	橙色	92004562
101	図32	S H138	弥生土器・甕	②7.7	橙色	92004566
102	図33	S H141	弥生土器・甕	①(36.6)	にふい・黄橙色	92004484
103	図33	S H141	弥生土器・甕	①(33.0)	にふい・黄橙色	92004483
104	図33	S H141	弥生土器・甕	②(9.7)	浅黄橙色	92004486
105	図33	S H141	弥生土器・甕	①(15.6) ②7.5 ③(14.3) ④15.2	橙色	92004485
106	図33	S H141	弥生土器・高杯		橙色	92004489
107	図33	S H141	弥生土器・鉢	①(15.4) ②(5.3) ③6.6	にふい・黄橙色	92004488
108	図35	S H154	弥生土器・甕	①(28.3)	褐灰色	92004457
109	図35	S H154	弥生土器・甕か鉢	①(15.4)	浅黄橙色	92004455
110	図35	S H154	弥生土器・甕	①(13.1) ④(14.1)	浅黄橙色	92004456
111	図35	S H154	弥生土器・甕	②8.6	灰白色	92004460
112	図35	S H154	弥生土器・甕	②6.0	橙色	92004458
113	図35	S H154	弥生土器・壺か鉢	②4.6	浅黄橙色	92004459
114	図37	S H158	弥生土器・鉢?		にふい・橙色	92004571
115	図38	S H161	弥生土器・甕		橙色	92004777
116	図38	S H161	弥生土器・甕		橙色	92004776
117	図38	S H161	弥生土器・高杯		浅黄橙色	92004778
118	図39	S H162	弥生土器・甕		内:橙色・外:浅黄橙色	92004570
119	図39	S H162	弥生土器・甕	②7.1	橙色	92004565
120	図40	S H164	弥生土器・甕		橙色	92004781
121	図40	S H164	弥生土器・台付鉢	②(6.7)	にふい・褐色	92004779
122	図40	S H164	弥生土器・高杯		橙色	92004780
123	図41	S H165	弥生土器・甕		明黄褐色	92004782
124	図44	S H171	弥生土器・甕	①(25.1)	橙色	92004481
125	図44	S H171	弥生土器・甕		内:黄褐色・外:橙色	92004462
126	図44	S H171	弥生土器・甕		橙色	92004463
127	図44	S H171	弥生土器・甕		浅黄橙色	92004466
128	図44	S H171	弥生土器・甕		橙色	92004467
129	図44	S H171	弥生土器・甕		内:明赤褐色・外:にふい・赤褐色	92004468
130	図44	S H171	弥生土器・甕		内:灰褐色・外:橙色	92004471
131	図44	S H171	弥生土器・甕		明茶褐色	92004478
132	図44	S H171	弥生土器・甕		橙色	92004480
133	図44	S H171	弥生土器・甕	①(21.8)	橙色	92004473
134	図44	S H171	弥生土器・甕		橙色	92004474
135	図44	S H171	弥生土器・甕		浅黄橙色	92004475
136	図44	S H171	弥生土器・甕	②6.8	橙色	92004464

遺物番号	検出番号	出土遺構	遺物の種類	法量①口径②底径③器高④胴部径⑤表径⑥幅⑦厚⑧重量	色調・石材	登録番号
137	図44	S H171	弥生土器・甕	①6.7	内：黒褐色・外：橙色	92004477
138	図44	S H171	弥生土器・壺か鉢	②(3.6)	内：褐灰色・外：暗赤灰色	92004472
139	図44	S H171	弥生土器・鉢	①8.6 ②4.0 ③4.3	黄橙色	92004479
140	図44	S H171	弥生土器・蓋	つまみ部径5.5	淡橙色	92004465
141	図44	S H171	青銅器銅型	⑤3.7 ⑥3.1 ⑦1.5 ⑧15.8	石英長石斑岩か	92004735
142	図45	S H171	石斧	⑤14.6 ⑥8.0 ⑦4.5 ⑧855	玄武岩	92004737
143	図45	S H171	石斧	⑤15.0 ⑥7.7 ⑦4.8 ⑧970	玄武岩	92004739
144	図45	S H171	柱状片刃石斧	⑤5.1 ⑥2.8 ⑦3.9 ⑧70.8	泥岩	92004760
145	図45	S H171	小型柱状片刃石斧	⑤7.1 ⑥1.3 ⑦1.4 ⑧20.5	泥岩	92004742
146	図45	S H171	小型柱状片刃石斧	⑤4.4 ⑥1.4 ⑦1.4 ⑧11.4	泥岩	92004743
147	図45	S H171	小型偏平片刃石斧	⑤3.2 ⑥1.6 ⑦0.8 ⑧7.5	泥岩	92004741
148	図45	S H171	石製穂摘具	⑤7.9 ⑥5.7 ⑦0.5 ⑧24.5	泥岩	92004740
149	図45	S H171	石製穂摘具	⑤13.6 ⑥6.3 ⑦0.5 ⑧44.2	泥岩	92004738
150	図45	S H171	土製紡錘車	⑤4.4 ⑥4.5 ⑦1.7 ⑧33.6	浅黄色	92004761
151	図46	S K103	石製剣把頭飾	⑤4.2 ⑥5.7 ⑦1.5 ⑧40.0	泥岩	92004736
152	図46	S K103	弥生土器・甕	①(23.0)	内：明赤褐色・外：橙色	92004417
153	図46	S K103	弥生土器・甕	①(26.7)	橙色	92004418
154	図46	S K103	弥生土器・甕	②(8.2)	内：浅黄褐色・外：淡赤褐色	92004409
155	図46	S K103	弥生土器・甕	②(6.8)	内：浅黄褐色・外：橙色	92004411
156	図46	S K103	弥生土器・壺	②4.0 ④10.8	橙色	92004416
157	図47	S K104	弥生土器・甕	①(26.4) ④26.8	橙色	92004421
158	図47	S K104	弥生土器・甕	②(6.5)	内：黒褐色・外：明赤褐色	92004412
159	図47	S K104	弥生土器・支脚	②7.3	橙色	92004415
160	図48	S K105	弥生土器・甕		にぶい橙色	92004422
161	図48	S K105	弥生土器・甕	②7.8	内：にぶい橙色・外：赤色	92004414
162	図48	S K105	弥生土器・甕	②7.2	明赤褐色	92004410
163	図48	S K105	弥生土器・甕	②(9.2)	橙色	92004413
164	図49	S K107	石剣	⑤7.6 ⑥3.0 ⑦0.8 ⑧21.7	泥岩	92004747
165	図50	S K116	弥生土器・壺	①(23.2)	にぶい赤褐色	92004517
166	図50	S K116	弥生土器・壺		にぶい橙色	92004516
167	図50	S K116	弥生土器・壺	②(10.1)	橙色	92004528
168	図50	S K116	弥生土器・壺	②4.4	にぶい黄褐色	92004523
169	図50	S K116	弥生土器・器台	①7.3 ②7.5 ③14.1	橙色	92004525
170	図50	S K116	弥生土器・器台	①7.0 ②7.9 ③13.7	橙色	92004526
171	図50	S K116	弥生土器・器台	①7.1 ②8.8 ③14.9	にぶい橙色	92004527
172	図50	S K116	弥生土器・鉢	①(6.1) ②(4.6) ③5.9	橙色	92004524
173	図51	S K116	弥生土器・甕	①(27.4)	橙色	92004513
174	図51	S K116	弥生土器・甕	①(28.7)	橙色	92004511
175	図51	S K116	弥生土器・甕	①(26.2)	橙色	92004512
176	図51	S K116	弥生土器・甕	①(26.3) ④24.8	橙色	92004508
177	図51	S K116	弥生土器・甕	①(22.0) ④21.0	橙色	92004509
178	図51	S K116	弥生土器・甕	①(33.0)	にぶい橙色	92004510
179	図51	S K116	弥生土器・甕	②8.1	内：にぶい橙色・外：褐色	92004521
180	図51	S K116	弥生土器・甕	②7.7	橙色	92004520
181	図51	S K116	弥生土器・甕	②6.3	橙色	92004518
182	図51	S K116	弥生土器・甕	②6.5	内：褐色・外：にぶい褐色	92004519
183	図51	S K116	弥生土器・甕	②7.8	橙色	92004522
184	図51	S K116	石製穂摘具	⑤9.8 ⑥7.0 ⑦0.6 ⑧64.4	泥岩	92004759
185	図51	S K116	砥石	⑤6.5 ⑥5.0 ⑦1.2 ⑧39.4	泥岩か	92004754
186	図52	S K118	弥生土器・甕	①(25.6)	泥岩	92000768
187	図52	S K118	弥生土器・甕		橙色	92000769
188	図52	S K118	弥生土器・甕	②7.8	橙色	92000772
189	図52	S K118	弥生土器・鉢		橙色	92000770
190	図52	S K118	弥生土器・壺	②(7.4)	赤褐色	92000771
191	図53	S K119	弥生土器・甕	①(25.8)	浅黄褐色	92004438
192	図53	S K119	弥生土器・甕	①(26.6)	褐色	92004435
193	図53	S K119	弥生土器・甕	①(25.8)	にぶい褐色	92004434
194	図53	S K119	弥生土器・甕	①(27.3)	にぶい褐色	92004430
195	図53	S K119	弥生土器・甕	①(26.9)	灰褐色	92004429
196	図53	S K119	弥生土器・甕	①(30.1)	内：浅黄褐色・外：にぶい褐色	92004437
197	図53	S K119	弥生土器・甕		にぶい褐色	92004431
198	図53	S K119	弥生土器・甕		灰褐色	92004433
199	図53	S K119	弥生土器・甕		褐色	92004432
200	図53	S K119	弥生土器・甕	①(28.0)	にぶい褐色	92004426
201	図53	S K119	弥生土器・甕	①(22.9)	にぶい褐色	92004425
202	図53	S K119	弥生土器・甕	②7.2	内：黄褐色・外：にぶい褐色	92004441
203	図53	S K119	弥生土器・甕	②6.7	内：黒褐色・外：にぶい褐色	92004442
204	図53	S K119	弥生土器・甕	②6.6	内：にぶい褐色・外：浅黄褐色	92004439

遺物番号	採回番号	出土遺構	遺物の種類	法量①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	色調・石材	登録番号
205	㊸53	S K119	弥生土器・甕	㉔4.9	内：にぶい・橙色・外：橙色	92004440
206	㊸54	S K119	弥生土器・壺		にぶい・橙色	92004436
207	㊸54	S K119	弥生土器・壺	①2.5 ④(11.7)	内：橙色・外：にぶい・橙色	92004447
208	㊸54	S K119	弥生土器・壺	②2.5	内：黒褐色・外：黒灰色、浅黄褐色	92004446
209	㊸54	S K119	弥生土器・壺	②8.5	橙色	92004444
210	㊸54	S K119	弥生土器・壺	②9.8	浅黄褐色	92004445
211	㊸54	S K119	弥生土器・壺	②(12.1)	黄灰色	92004443
212	㊸54	S K119	弥生土器・支脚	④7.5	橙色	92004423
213	㊸54	S K119	小型柱状片刃石斧	⑤6.1 ⑥1.5 ⑦1.0 ⑧16.5	泥岩	92004750
214	㊸54	S K119	石製總柄具	⑤7.3 ⑥5.4 ⑦0.5 ⑧23.5	泥岩	92004758
215	㊸55	S K126	弥生土器・甕		にぶい・橙色	92004533
216	㊸55	S K126	弥生土器・器台		にぶい・橙色	92004532
217	㊸55	S K126	石剣	⑤6.8 ⑥4.6 ⑦1.0 ⑧43.5	泥岩か	92004746
218	㊸55	S K126	砥石	⑤8.9 ⑥6.7 ⑦4.3 ⑧310		92004757
219	㊸56	S K129	弥生土器・鉢	①7.1 ③3.3	浅黄褐色	92004540
220	㊸56	S K129	弥生土器・甕		橙色	92004541
221	㊸56	S K129	弥生土器・甕		橙色	92004542
222	㊸56	S K129	弥生土器・甕	②7.0	橙色	92004539
223	㊸56	S K129	弥生土器・甕	②6.8	橙色	92004538
224	㊸56	S K129	弥生土器・壺	②(10.8)	黄褐色	92004543
225	㊸57	S K130	土製紡錘車	⑤3.8 ⑥3.8 ⑦1.3 ①17.8	にぶい・黄褐色	92004752
226	㊸57	S K130	円盤形土製品	⑤4.1 ⑥3.9 ⑦1.1 ⑧21.0	にぶい・橙色	92004762
227	㊸57	S K130	弥生土器・甕	①(28.3)	にぶい・黄褐色	92004536
228	㊸57	S K130	弥生土器・鉢	①(15.1)	にぶい・黄褐色	92004535
229	㊸57	S K130	弥生土器・甕		にぶい・黄褐色	92004534
230	㊸57	S K130	弥生土器・甕	②6.6	にぶい・褐色	92004537
231	㊸58	S K140	弥生土器・甕	①(34.6)	内：にぶい・褐色・外：橙色	92004449
232	㊸58	S K140	弥生土器・甕		橙色	92004448
233	㊸58	S K140	弥生土器・壺	①(19.6)	浅黄褐色	92004450
234	㊸58	S K140	弥生土器・鉢	①(16.4)	内：灰白色・外：浅黄褐色	92004452
235	㊸58	S K140	弥生土器・甕	②7.8	浅黄褐色	92004451
236	㊸59	S K143	弥生土器・甕	②7.9	にぶい・橙色	92004531
237	㊸59	S K143	弥生土器・壺		にぶい・褐色	92004529
238	㊸59	S K143	弥生土器・壺	②6.0	浅黄褐色	92004530
239	㊸60	S K151	弥生土器・甕	①(24.9)	灰白色	92004453
240	㊸60	S K151	弥生土器・甕	②(8.8)	内：褐色・外：にぶい・褐色	92004454
241	㊸61	S K152	弥生土器・甕		黄褐色	92000780
242	㊸61	S K152	弥生土器・甕		褐色	92000781
243	㊸61	S K152	弥生土器・甕		淡黄色	92000782
244	㊸61	S K152	弥生土器・甕	②8.1	内：にぶい・褐色・外：淡赤褐色	92000785
245	㊸61	S K152	弥生土器・壺	①(20.9)	にぶい・褐色	92000783
246	㊸61	S K152	弥生土器・鉢		淡赤褐色	92000784
247	㊸61	S K152	弥生土器・支脚	②6.8	褐色	92000779
248	㊸62	S K156	弥生土器・甕	②7.0	赤褐色	92000777
249	㊸62	S K156	弥生土器・甕	②7.0	内：淡褐色・外：褐色	92000778
250	㊸63	S K159	弥生土器・甕	①(24.0)	浅黄褐色	92000775
251	㊸63	S K159	弥生土器・甕	①(19.0)	褐色	92000774
252	㊸63	S K159	弥生土器・甕	②7.2	褐色	92000776
253	㊸63	S K159	弥生土器・甕	②7.7	内：黒褐色・外：黄褐色	92000773
254	㊸63	S K159	石製總柄具	⑤17.5 ⑥6.4 ⑦0.7 ⑧90.0	泥岩	92004744
255	㊸66	P-13	石鎌	⑤2.4 ⑥1.5 ⑦0.4 ⑧1.5	讃岐岩貫安山岩	92004767
256	㊸66	P-71	石鎌	⑤2.4 ⑥1.8 ⑦0.4 ⑧1.3	讃岐岩貫安山岩	92004769
257	㊸66	P-202	石鎌	⑤1.9 ⑥1.7 ⑦0.3 ⑧0.6	黒曜岩	92004766
258	㊸66	P-92	石鎌	⑤4.0 ⑥2.3 ⑦0.8 ⑧5.0	黒曜岩	92004764
259	㊸66	P-60	石製紡錘車	⑤4.1 ⑥4.1 ⑦0.6 ⑧16.0	結晶片岩	92004751
260	㊸66	P-108	石斧	⑤4.3 ⑥6.5 ⑦3.8 ⑧137.2	玄武岩	92004749
261	㊸66	P-207	石斧	⑤8.4 ⑥7.6 ⑦5.6 ⑧540	玄武岩	92004748
262	㊸67	S H120	須恵器・杯	①(10.4) ③5.1	灰色	92002730
263	㊸67	S H120	須恵器・杯	①(10.3) ③4.6	灰色	92002731
264	㊸67	S H120	土師器・杯	①12.5 ③4.8	赤色	92002732
265	㊸67	S H120	土師器・杯		明赤褐色	92002733
266	㊸67	S H120	砥石	⑤5.6 ⑥4.9 ⑦2.9 ⑧59.4		92004756

第4章 総括

1. まとめ

平原遺跡1区は、弥生時代中期初頭～前葉と後期後半～終末の2時期を盛期とする断続的な集落遺跡で、これ以外に弥生時代中期末～後期初頭と古墳時代中期における居住が確認された。また縄紋時代の石鎌が1点のみ出土したが、これが集落の痕跡を示すものかどうかは不明である。猟場としての土地利用も十分に考えられ、陥穴などの遺構の有無は今後の調査において留意されるべき点である¹⁾。

この他、かつて骨蔵器と思われる奈良時代の須恵器一組（短頸壺と杯転用の蓋）が採集されており²⁾、また東側の崖落ちが削平された折りには石棺墓があったとされる³⁾ことから、墓地としての利用も予想されていたが、今回の調査ではその痕跡すら認められなかった。なお、現在までの知見によれば平原遺跡では確実な弥生時代の墓は確認されておらず、墓域は周辺地区に求めざるをえない。中期初頭～前葉段階の集落に対応する墓地の有力な候補として、小谷を隔てた北西にあたる梅坂炭化米遺跡⁴⁾を挙げておく。

弥生時代中期末～後期初頭の遺構は、竪穴建物2棟と土坑2基がある。平原遺跡においては集落としてのまとまりが希薄な段階であるが、本川川を隔てて南西方にあたる安永田遺跡で青銅器生産が集中的に行われている時期にあたり、これとの関連で注意しておく必要がある。

SH120は1区で唯一検出された古墳時代の遺構で、平面方形の4本柱で西壁中央に竈を作りつけた竪穴建物である。出土した須恵器は小田編年⁵⁾Ⅱ期の古い段階、陶邑田辺編年⁶⁾のTK47型式並行とみられる。平原遺跡一帯での古墳時代集落は、中期でも新しい段階に形成され、後期に至って著しい展開を示す特徴があるが、特にそれまでは居住域としての利用がほとんど見られなかったやや急な傾斜面に竪穴建物が密集して営まれる状況⁷⁾は、自然発生的な集落ではなく何らかの規制に基づくものとの印象を強く与える。

もとより平原遺跡の総合的な評価は、他地区の調査内容だけでなく周辺を含めた遺跡群としての在り方から論ずべきものであるが、今次調査の成果をまとめる意味で1区の主体となる2時期の集落について、以下に予察として述べておきたい。

2. 弥生時代中期初頭から前葉の集落

弥生時代中期初頭～前葉の主な遺構は、竪穴建物8棟、土坑12基、溝1条がある。竪穴建物のうちSH131・SH138・SH162・SH171の4棟は、出土遺物や他遺構との重複関係などからはほぼ問題なくこの時期に比定される。SH114については、平面円形で中央部に土坑を有し環状に主柱が配される点など、この地域においては前期～中期前葉に認められる形態であるが、前章で図示した出土土器は中期末～後期初頭に位置付けられるもので、遺構の特徴が示唆する時期と著しく乖離する。周辺地域においては弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物で平面円形

のものは皆無とってよく、方形・長方形基調の形態へと移行している。極く細片で図示しなかった土器に中期初頭～前葉頃と思われるものがあることから、現場での所見（土層観察をおこなった部分では、とりたてて別遺構との重複を示す乱れなどは認められなかった）と異なった苦しい解釈ではあるが、この段階の竪穴建物に後代の遺構が重複していた状況を掘り誤ったもの、としておきたい。同様な理由で、出土遺物はほとんどないが平面円形のSH115・SH157・SH158の3棟を当該期に比定しておく。

土坑はSK103・SK104・SK105・SK116・SK118・SK119・SK126・SK129・SK130・SK143・SK152・SK156の12基が出土遺物からこの段階に位置付けられる。このうちSK104は貯蔵穴とされるいわゆる袋状土坑で、平面円形で壁がきつく立ち上がるSK116や、小型であるが規格的な長方形のSK143も貯蔵穴の可能性もある。SK116は貯蔵穴としての機能を終えた後、廃棄土坑として利用されたものであるらしい。SK119は多量の土器が投棄されたような状態で出土しており、廃棄土坑と考えられる。

SK103から出土した石製剣把頭飾は、管見に触れた限りでは国内で14例目、筑紫平野においては8例目の資料である⁹⁾。調査時の欠けがある以外は完存で、榎本亀生の分類⁹⁾による「十字形」である。本邦での出土例は前期末～中期初頭の段階に集中するが、本例もまたその範に漏れない。石材は、好んで用いられる鉾石の類でなく、一帯で磨製石器に普通に用いられる在地系の泥岩であり、近辺で製作された品とみて大過あるまい。SK103は前章で報告したように不整形な土坑であるが、調査区の端で傾斜の強い場所にあたり、あるいは方形ないし長方形基調の竪穴建物であった可能性も拭いきれない。いずれにせよ、集落内からの出土である点はここで確認しておきたい。

表2 日本出土の石製剣把頭飾

No	遺跡名	所在地	出土状況	形態	石材	時期	文献
1	平原	佐賀県鳥栖市楯比町字平原	1区SK103	十字形	泥岩	中期初頭	本書
2	荒堅目	佐賀県神埼郡神埼町大字本塚字河東	採集	十字形	褐鉄鉾		①
3	吉野ヶ里(田手二本黒木)	佐賀県神埼郡三田川町大字田手字二本黒木	採集	有鉾十字形	蛇紋岩		①
4	吉野ヶ里(吉野ヶ里丘陵)	佐賀県神埼郡三田川町大字田手字四本杉	中世以降の擾乱層	有鉾十字形	細粒角閃石斑輝岩		註8)
5	鍋島本村南	佐賀県佐賀市鍋島町大字鍋島字二本杉	2区SK338	有鉾十字形	流紋岩	中期初頭	②
6	字木汲田	佐賀県唐津市大字字木汲田	A地区105トレンチ柱穴1	十字形	方鉛鉱か鉄垂鉛鉱		③・④
7	千尋藻	長崎県下県郡豊玉町大字千尋藻		十字形			⑤・⑥
8	里田原	長崎県北松浦郡田平町里免	第1次調査遺物包含層	有鉾十字形	方鉛鉱		⑦
9	栗田	福岡県朝倉郡三輪町大字栗田	土器溜	有鉾十字形	凝灰質細粒砂岩	前期末	⑥・⑧
10	横隈北田	福岡県小郡市大字横隈字北田	古墳時代遺構に混入	十字形?	磁鉄鉾		⑨
11	一ノ口1地点	福岡県小郡市大字三沢字一ノ口	D222貯蔵穴	十字形?	鉄鉾石	前期末	⑩
12	下ノ方	福岡県飯塚市大字立岩字下ノ方	18号袋状堅穴	十字形		中期初頭	⑪
13	前田山	福岡県行橋市大字前田	II-2区55号袋状堅穴	有鉾十字形	磁鉄石	前期末	⑥・⑫
14	高山	山口県下関市大字綾羅木字高山	採集	一字形	凝灰質頁岩		⑬

また、SH171から出土した鋳型は、我国での青銅器生産を示す資料としては最古段階のものであり、平原遺跡3区出土の細形銅戈鋳型¹⁰⁾とともに極めて重要な例である。小破片で製品の特定はできなかったものの、両面鋳型であることは注意されよう。平原遺跡において弥生時代中期初頭から前葉にかけて展開した集落は、柚比地区で遺跡数の増大が顕著となる次代の須玖式段階には廃絶しており、継続性や規模から拠点集落とは言い難い。初期の青銅器生産が、このような比較的小規模な断絶型の集落においても行われていた可能性が示されたことは、今回の調査成果の中でも問題となる点である。

3. 弥生時代後期後半から終末の集落

弥生時代後期後半～終末の遺構としては竪穴建物9棟があり、出土土器からは時期を絞りきれなかったこれ以外の後期6棟もこの段階のものがほとんどであろう。竪穴建物以外に小穴多数の存在から掘立柱建物も当然想定されたのであるが、調査時にそれと認定できるものはなく、整理段階でも十分な検討を行った訳ではないが1棟も確認することができなかった。

土器の様相が比較的明らかなものでは、SH128がやや古い特徴を示すものの、SH123・SH124・SH127・SH132のいずれもが終末段階に比定される。平面形は長方形で、長軸の両端に屋内高床部をもつものと、これに加えもう一辺にも屋内高床部を持つものがある。主柱は、SH137とSH161が4本柱である以外は、いずれも長軸方向の2本柱である。全形の知れるものであれば、中央には炉の可能性の強い浅い土坑、一方の長辺のほぼ中央に壁際土坑を配するのが常である。3辺に屋内高床部のあるものは残る1辺に壁際土坑があるが、このことから壁際土坑の位置を入り口の手掛かりと仮定すると、この時期の竪穴建物全てが東から南に向くことが解る。

ところで、遺存状態の悪いSH161は別としても、3辺に屋内高床部を持ち主柱穴が4箇所というSH137はこの地域の当該期にあっては特異な例である。これを4本柱構造導入の初期の例とするか、あるいは変異的なものとするか俄には決し難く、今しばらくは類例を俟ちたい。

これらの竪穴建物から出土する土器は庄内式並行期を主体とする時期で、器種は在地系のいわゆる西新式から構成され、外来系の資料をほとんど含んでいない。平原遺跡1区における集落はこの段階で一旦断絶し布留式並行期には繋がらない。古墳時代の開始期に集落が再編成されることは非常に興味深い。こうした現象が1区に限られるものか、あるいは平原遺跡全体や柚比地区遺跡群に広く認められる変動であるのか、いずれ周辺での調査の進展によって明らかになろう。

註

- 1) 陥穴とみられる遺構は、鳥栖市域では柚比地区に近接する本川原遺跡において検出されており(佐賀県教育委員会 1991「本川原遺跡」「都谷遺跡」佐賀県文化財調査報告書第104集 pp.397-461)、周辺でも小都市北部の丘陵地帯などで類例が増えつつある(小都市教育委員会 1989「北松尾口遺跡1地点」小都市文化財調査報告書第54集)。
- 2) 鳥栖市教育委員会 1979「柚比遺跡群範囲確認調査第2年次概要報告書-梅坂炭化米遺跡・平原古墳・平原遺跡の調査-」鳥栖市文化財調査報告書第4集
鳥栖市教育委員会 1982「平原遺跡・平原古墳」鳥栖市文化財調査報告書第11集
- 3) 成富武次氏のご教示による。
- 4) 鳥栖市教育委員会の柚比遺跡群範囲確認調査で、前期末~中期前葉の土器棺墓と土坑墓から成る小規模な列埋群の墓域が検出されており(鳥栖市教育委員会 1982「梅坂炭化米遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第10集)、1992年度の発掘調査でも新たに数基の土器棺墓・土坑墓が確認された。
- 5) 小田 富士雄 1979「須恵器の編年」「九州考古学研究(古墳時代編)」 学生社
- 6) 田辺 昭三 1966「陶邑古窯址群I」平安学園高校
田辺 昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 7) 特に1992年度の梅坂炭化米遺跡の調査では、6世紀代の竪穴建物が傾斜のきつい部分にも密集して検出された。
- 8) 表2に示したように佐賀県6例、長崎県2例、福岡県5例、山口県1例で、北部九州に集中する。各々の引用文献は下記にまとめた。なお、吉野ヶ里(吉野ヶ里丘陵)遺跡例は1992年度調査の資料で、調査担当者である七田忠昭氏から出土状況などについてのご教示を受けた。石材は佐賀大学大島恒彦教授の鑑定によるものである。また鍋島本村南遺跡例の石材は西南学院大学唐木田芳文教授の鑑定による。
- 9) 榎本 亀生 1940「結紐形剣柄頭の一変形」「考古学」第11巻第1号 pp.21-27 東京考古学会
- 10) 1992年度の調査で後期の竪穴建物から出土した資料である。砥石に転用されており詳細は不詳であるが、両側の樋がつかない細形I式(岩永省三 1980「弥生時代青銅器形式分類編年再考-剣矛支を中心として-」九州考古学」55号 pp.1-22 九州考古学会)の類型とみられる。

表2の引用文献

- ①佐賀県教育委員会 1976「V 県下の考古資料」「寺浦庵寺跡」佐賀県文化財調査報告書第34集 pp. 13-18
- ②佐賀市教育委員会 1991「鍋島本村南遺跡-1・2区の調査-」佐賀市文化財調査報告書第35集
- ③唐津市教育委員会 1987「宇木汲田遺跡調査概要」唐津市文化財調査報告書第21集
- ④唐津市教育委員会 1988「宇木汲田遺跡調査概要」唐津市文化財調査報告書第27集
- ⑤福岡県文化会館 1978「対馬の美術」
- ⑥小田 富士雄・韓 炳三 編 1991「日韓交渉の考古学 弥生時代編」 六興出版
- ⑦長崎県教育委員会 1974「里田原遺跡 略報II」長崎県文化財調査報告書第18集
- ⑧水島 稔夫 1981「下関市高山遺跡発見の石製剣把頭」「古代文化」第33巻第7号 pp.57-60 古代学協会
- ⑨小都市教育委員会 1988「横隈北田遺跡」小都市文化財調査報告書第48集
- ⑩小都市教育委員会 1991「一ノ口遺跡1地点」小都市文化財調査報告書第74集
- ⑪飯塚市教育委員会 1982「下ノ方遺跡」飯塚市文化財調査報告書第6集
- ⑫行橋市教育委員会 1987「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集

写真図版



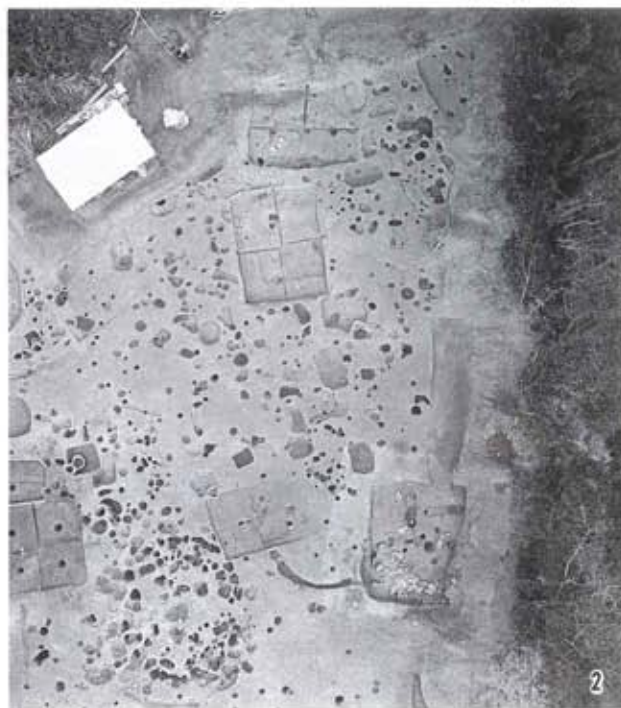
鳥栖市北部から基山町主要部



平原遺跡 1区全景



1区北中央部 (南上空から)



1区北東部 (南上空から)



1区北西部 (南上空から)



1区南東部 (南上空から)



SH101 (西から)



SH102 (西から)



SH114 (南東から)



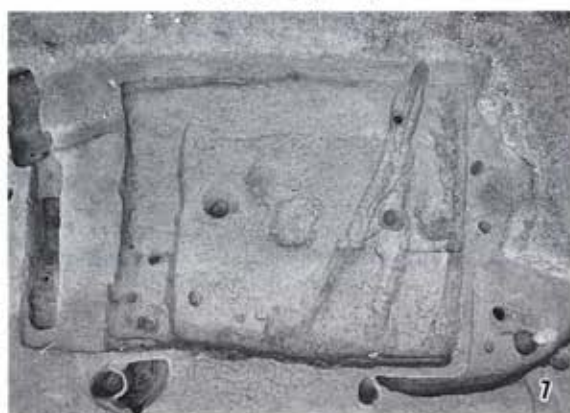
SH114・SH115 (東上空から)



SH121 (東から)



SH123 (南東から)



SH124 (東上空から)



SH127 (北から)



SH128 (西から)



SH128南東部遺物出土状況



SH131 (東から)



SH132 (南東から)



SH133 (西上空から)



SH135 (東から)



SH136 (西から)



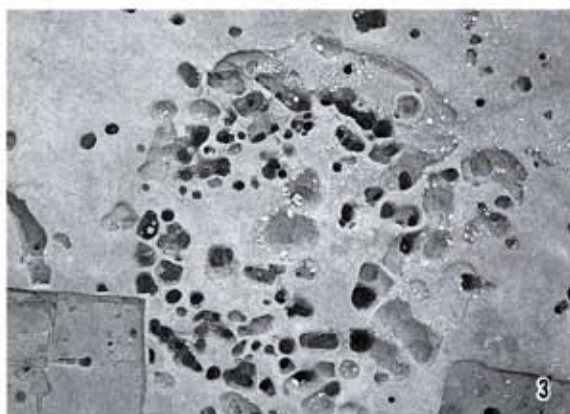
SH137 (東上空から)



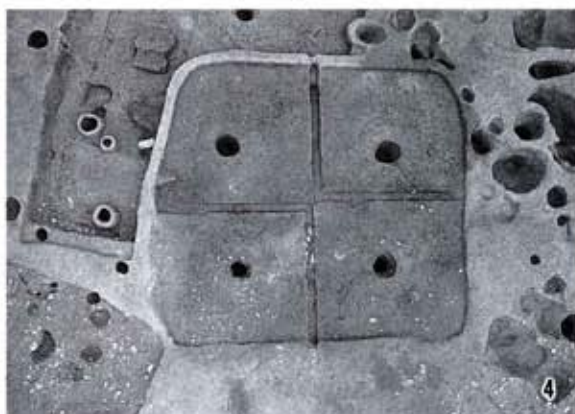
SH138 (東から)



SH165 (西から)



SH171 (北上空から)



SH120 (南上空から)



SK103 石製剣把頭飾出土状況



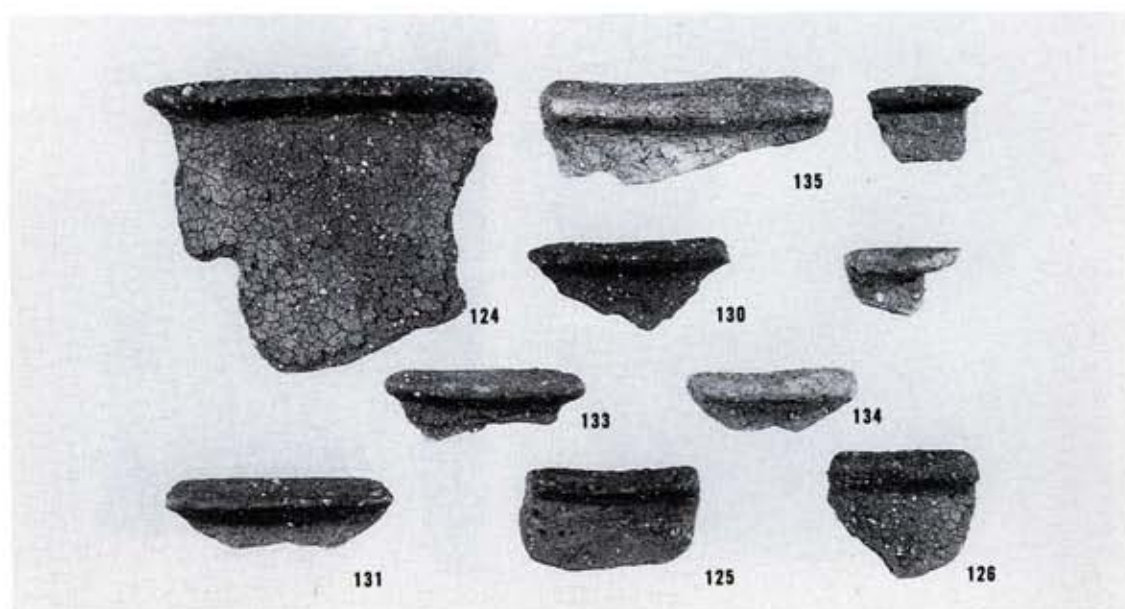
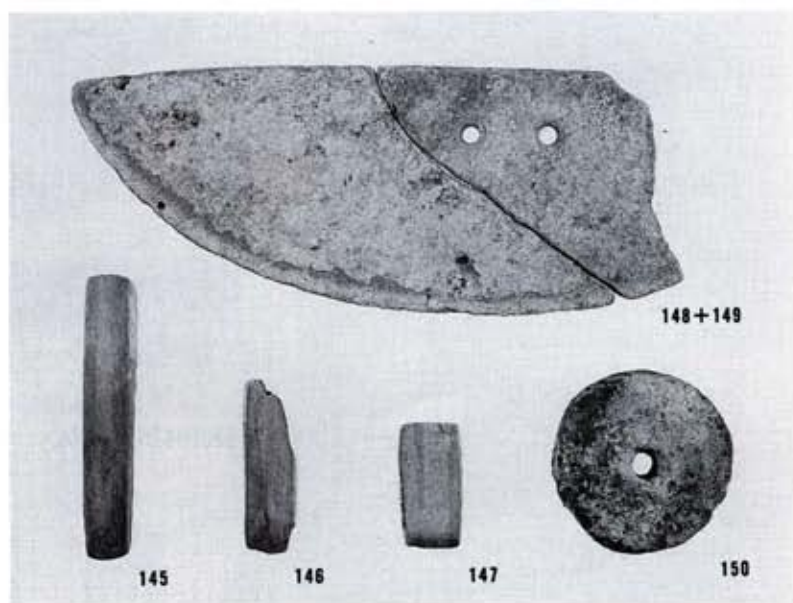
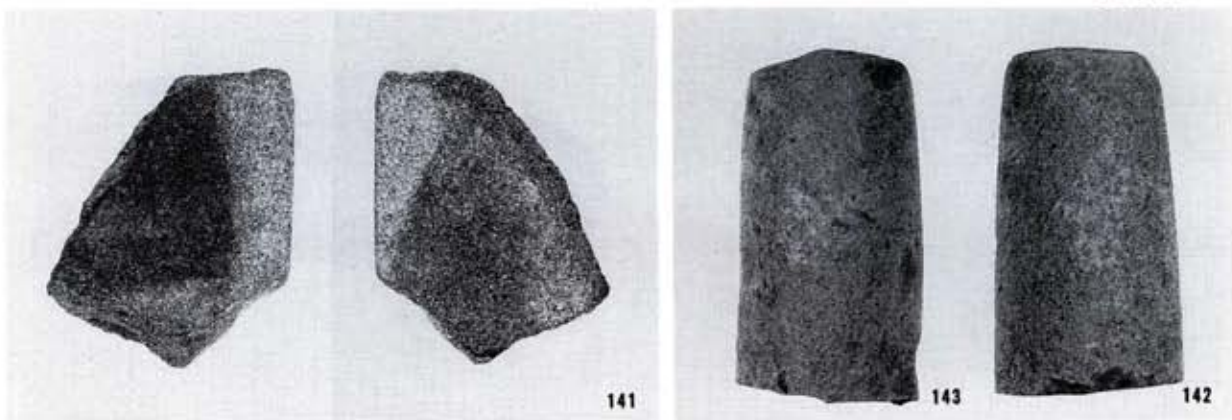
SK104 (西から)



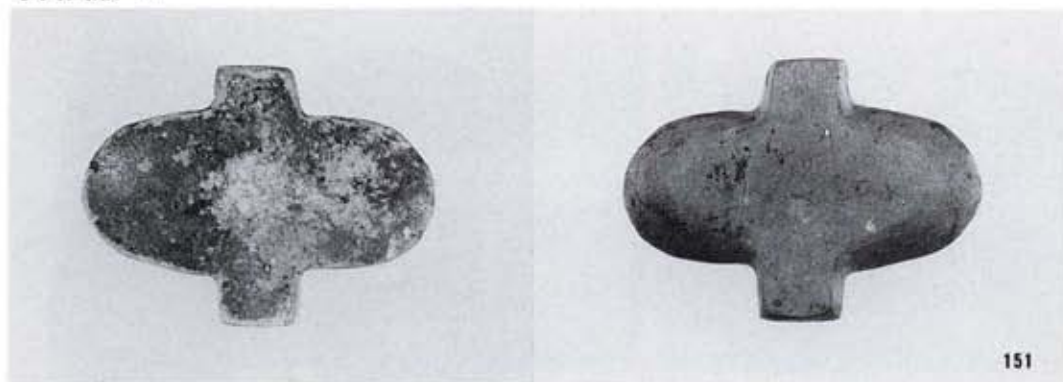
SK116 (西から)



SK119 (南から)



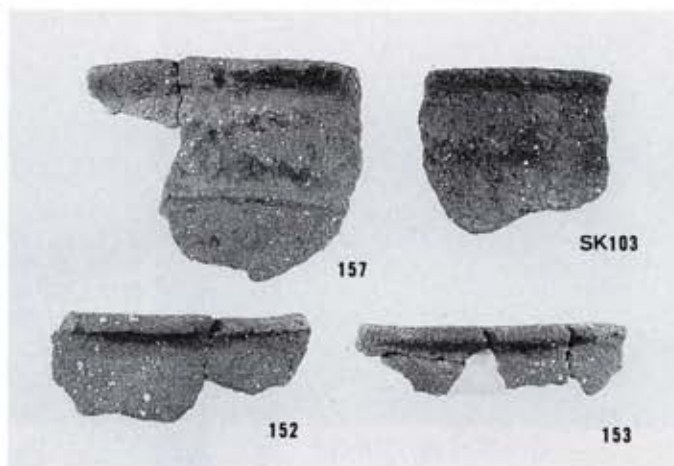
SH171出土遺物



151



156



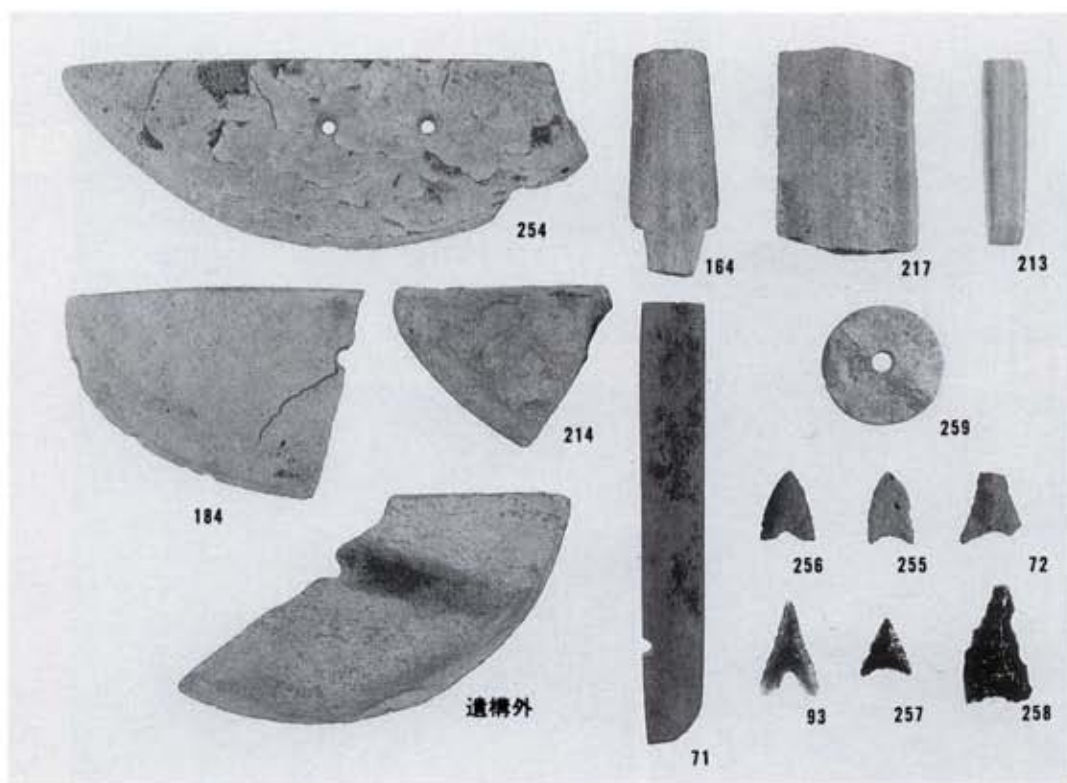
157

SK103

152

153

SK103・SK104出土遺物



254

164

217

213

214

259

184

遺構外

256

255

72

93

257

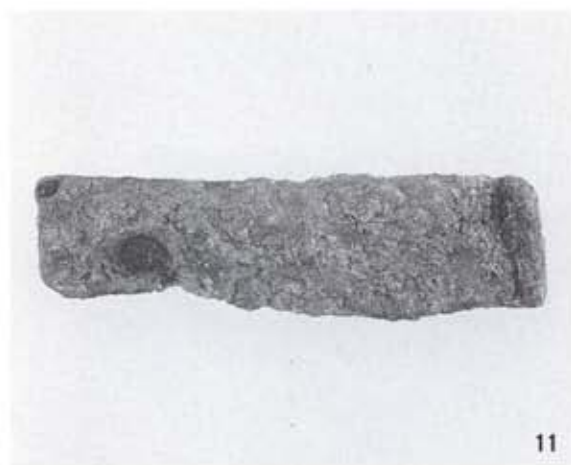
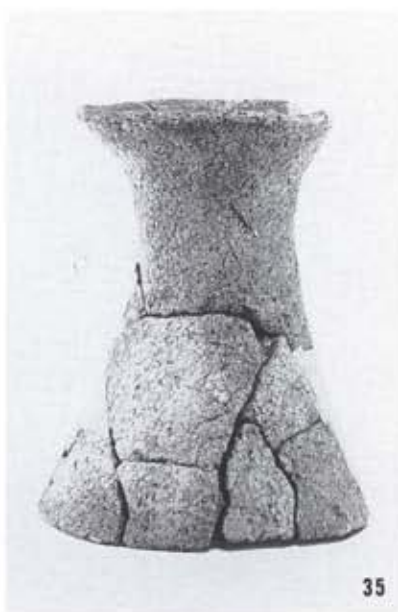
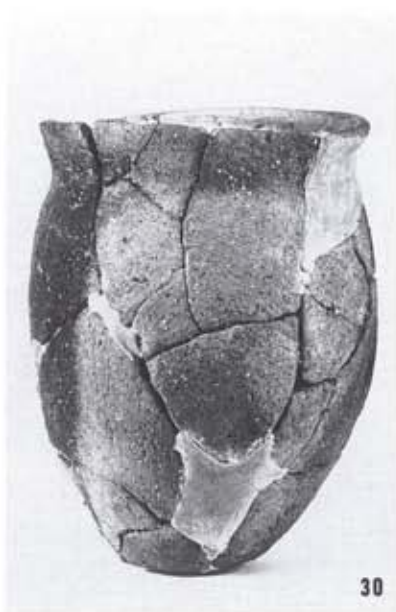
258

71

1区出土石器



SH128出土土器



SH102出土鉄器



SH124出土土器



SH120出土土器

佐賀県文化財調査報告書第119集

平原遺跡 I

—本川川防災調節池事業関係文化財調査報告書 1—

編集 佐賀県教育委員会
発行 佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号
1993年3月31日
印刷 福博印刷株式会社
佐賀県佐賀市兵庫町修理田72の2

